



TITLE:

<4>国内拠点

AUTHOR(S):

CITATION:

<4>国内拠点. 京都大学高等教育叢書 2013, 32: 205-306

ISSUE DATE:

2013-01-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169720>

RIGHT:

IV. 国内拠点

IV-1. MOST

1. はじめに

MOST（Mutual Online System for Teaching & Learning）は、本センターが2009年11月に提供を開始したオンラインFD支援システムで、大学の教職員、大学院生を対象とした招待制のサイトである（図1）。2012年12月1日現在、登録者数480名（+88）、スナップショット数1,401件（+260）、コミュニティ数83件（+8）となっている（括弧内は2011年1月20日以降の増加数）。本節では、MOSTの取り組みやシステム改良の内容を中心に報告をおこなう。



図1 MOSTトップページ (https://most-keep.jp)

2. MOSTにおける取り組み

昨年度までに、MOSTのトップページからリンクされた「スナップショットギャラリー」のコンテンツを充実させるために、関西地区FD連絡協議会の「FD活動報告会」において作成された個別大学で取り組まれている組織的なFD活動に関するスナップショットや、大学教育研究フォーラムの個人

研究発表の中から特徴ある取り組みに対して依頼して作成されたスナップショットなどをMOST上に掲載してきた。今年度は、下記に述べるコースポートフォリオを中心に公開コンテンツの充実を図った。

2-1. MOSTフェローシッププログラム

本センターでは、これまで提供してきた MOST の活動をさらに推進・活性化させるため、全国の大学教員を対象とし、MOST を利用した授業実践の見直しや教育改善の活動に取り組む「MOST フェロー」を 2011 年度に募集し、10 名が選定された。第 1 期 MOST フェローと各テーマを資料 1 に示す。

MOST フェローは、1 年間かけて、対面でのミーティングや MOST を利用することで、フェロー同志で活動のプロセスや成果を共有しながら、各自の教育実践をよりよくするとともに、教員コミュニティとしての成長も目指している。第 1 期 MOST フェローの活動スケジュールを資料 2 に示す。このプログラムは、MOST フェロー運営委員会として、飯吉、田口、酒井、大山（大学院生）、吉田（事務局）、半澤（6～9 月）、岡本（10 月～）が担当した。以下、本プログラムにおける、2 度の対面ミーティングを中心に報告する。

(a) 第 1 回ミーティング

2012 年 2 月 11 日、第 1 期 MOST フェローの第 1 回目ミーティングが京都大学で開催された。プログラムを資料 3 に示す。第 1 回ミーティングでは、フェローの自己紹介や 1 枚の画像を提示しながらの実践紹介をおこない、活動の第一歩を踏み出した。

ミーティングの冒頭で、まず、田口・飯吉から本プログラムの趣旨説明がおこなわれた。ここでは、個人の授業改善だけでなくディシプリンを越えた教員コミュニティとしてもその質的向上を目指すというプログラムのねらいや、MOST を利用して実践を可視化・共有化することの意義などについて説明がなされた。

続いて、事前に提出された自己紹介シートを元に、各フェローによる自己紹介がおこなわれた。1 人 2～3 分程度で、自身が担当する授業を紹介するとともに、選定したテーマや改善したい内容、そのきっかけや現状と課題などについて共有された。

次に、酒井より、この取り組みで各フェローが作成する MOST とコースポートフォリオ（スナップショット）の紹介、年間スケジュールの説明がおこなわれた。本プログラムでは、1 年間で各自のスナップショットを作成するとともに、翌年の第 19 回大学教育研究フォーラムで成果発表することが最終目標であることが示された。

オフィシャルなミーティングの終了後、夕食を兼ねて、引き続き各フェローの教育上の取り組みについてのアピールタイムが設けられた。事前に提出された取り組み内容をアピールするような 1 枚の写真、図、イラスト（自己 PR 用画像）をスクリーンに投影し、各自の教育に関するアピール点が各 2～3 分程度で発表された。本ミーティングは非常に盛況で、終了時刻が過ぎるまで活発な議論や意見交換がおこなわれた。

翌日には、各フェローは、公開研究会「大学教育におけるポートフォリオの活用」へ参加した。この公開研究会では、カンザス大学／ISSOTL 次期会長（当時）のダニエル・バーンステイン教授による、米国で取り組まれているコースポートフォリオについての講演および、国内の実践者によるシンポジウムがおこなわれた。

なお、本ミーティング後、2 週間の期間を設け、ミーティングや公開研究会の感想を掲示板へ投稿することを各フェローに求めた。また、「プロポーザル」スナップショットのテンプレートを送信し、「(1) テ

ーマ」「(2) 対象となる実践、時期」「(3) エビデンス、データの収集方法、協力者、ピアレビューの計画」「(4) 目標」などを1枚のスナップショットにまとめ、後日、オンラインコミュニティ上でフェロー間で共有した。

(b) オンラインでの中間報告

前期開始後、約一ヶ月半経過した時期に、コースポートフォリオ作成の進捗状況や問題点を報告・共有した。すでに提出・共有された上述の「プロポーザル」スナップショットも踏まえ、電子掲示板上でフェローの活動進捗状況を報告してもらい、その際、活動を進めるにあたって「うまくいっていない点」「やり方を工夫してみた点」「スナップショット上の記述・表現上の工夫」など、現状や課題、疑問点についても共有する機会となるよう促した。5月25日より3週間の期間を設け、掲示板上で報告・議論がおこなわれた。

(c) 第2回ミーティング（合宿）

2012年8月21日（火）～22日（水）、KKR大阪において、第2回ミーティングを合宿形式にて開催した。この合宿では、前期に取り組んだ各自の授業実践について、作成途上のコースポートフォリオ等を使って活動報告がおこなわれた。初日は、各自の活動経過報告の後、ディナーセッションとして飯吉によるトークがおこなわれ、講演内容について全体で議論をおこなった。2日目は MOST フェローシッププログラム後半の活動や、プログラムの今後の展開について、グループディスカッションをおこない、最後に議論内容を全体で共有した。以下、資料4のプログラムに沿って説明する。

初日は、飯吉による開会挨拶と本合宿研究会の趣旨説明、酒井による2日間のスケジュールについての説明の後、田口の司会により、各フェローの活動報告がおこなわれた。質疑応答を含め、1人20分間で、作成中のスナップショットやPPTを使って各フェローから報告がなされた。

夕方からは、夕食を兼ねた「ディナーセッション」として、飯吉によるキャスルトーク「実践コミュニティと教育の進化：カーネギー財団やMIT等での経験をふまえて」と題した報告がおこなわれた。MOST フェローシッププログラムは、このタイトルにあるように、カーネギー教育振興財団の取り組みである大学教員コミュニティによる教育改善活動（CASTLプログラム）をベースにしており、米国での先行事例の背景やその実践例や課題などが紹介され、相互研修の理念を加えてデザインされた本プログラムの意義を再確認する機会となった。

2日目の前半のセッションでは、「MOST フェローシッププログラムの今後」と題したグループディスカッションがおこなわれた。3グループに分かれ、コミュニティ活動に望むこと、MOST フェローの活用方法、フェローシッププログラムの将来について、活発な議論がなされ、最後に各グループの議論内容を全体で共有した。

また、後半は、「第19回大学教育研究フォーラムに向けて」と題したセッションがおこなわれた。次の大学教育研究フォーラムの個人研究発表で、各フェローの取り組みについて発表をおこなうが、教育実践に関する報告の未経験者も含まれるため、その発表内容や方法に関する相互チェックの機会とした。

第2回合宿以降の活動は、本原稿執筆時点では未実施であるが、今後予定されている MOST フェローの活動と今後の予定について述べる。

2012年1月には、作成途上のコースポートフォリオの質を上げるため、スナップショット作成の進捗状況や問題点の報告、共有の機会をオンラインでおこなう。このフェロー間での相互チェックを通じてスナップショットを完成させ、3月の大学教育研究フォーラムまでに MOST 上でスナップショットの一

般公開をおこなう。これが本プログラムの一つめの成果である。また、3月に京都大学で開催される第19回大学教育研究フォーラムにおいて、各フェローはそれぞれ1年間かけて取り組んできた活動成果に関して個人研究発表をおこなう。これが二つめの成果となり、第1期MOSTフェローの活動は終了することとなる。

MOSTフェローシッププログラムは、次年度以降も継続すべく、準備を進めている。初年度の第1回ミーティングを除き、ほぼ同様のスケジュールで活動を推進する予定である。3月の第19回大学教育研究フォーラムの期間中に、第2期MOSTフェローの第1回ミーティングを予定している。

2-2. コースポートフォリオ実践プログラムの実践事例の提供

2010年度後期に開発した「コースポートフォリオ実践プログラム」を、カリキュラム改善を視野に入れたプログラムとして発展させるため、2011年度後期より、同じ学科に属する複数の教員が参加する実践プログラムを2つの組織において実施している。この取り組みは、2011～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）「コースポートフォリオを活用した大学カリキュラムの質保証モデルの構築」（研究代表者：田口真奈）に引き継がれているが、ここで作成されたスナップショットを今年度中にMOST上で公開する予定である。

2-3. 関西地区FD連絡協議会の「FD活動報告会2012」

上記のほか、関西地区FD連絡協議会の「FD活動報告会2012」向けに作成されたスナップショット21件を、個別大学で行われている組織的なFD活動の事例として掲載した（III-2参照）。

3. システムの開発と改修について

利用者の要望などを受け、今年度中にMOSTおよびKEEP Toolkitに対しておこなった改修項目を以下に列挙する。原稿作成時点で多くの項目が未完成であるが、今年度内に提供予定である。また、昨年度の改修に関して未報告であった2012年3月に実施した項目についても合わせて報告するが、これらは文末に「昨年度分」と付記している。

3-1. URLの変更

MOSTのURLを変更した（旧URL：<https://online-tl.org> → 新URL：<https://most-keep.jp>）。（昨年度分）

3-2. KEEP ToolkitとSakaiの改修

(a) KEEP Toolkit関連

- ・ダッシュボードに対してフォルダ機能を追加した。ただし、フォルダは1階層のみとし、フォルダ内にフォルダを追加することはできない。（昨年度分）
- ・ボックス内のテキストエディタに、html書式の破棄ツールを追加した。これまで、Word等からテキストデータをコピー&ペーストした際に、書式情報も同時にペーストされていたため、その後のテキスト編集に不具合が生じることがあった。該当するテキストを選択後、今回追加した書式破棄ツールをクリックすることにより、段落以外の書式情報が破棄され、改めて書式を設定できるようになった。（昨年度分）
- ・テキストエディタのウィンドウサイズの変更が可能となった。これまで、エディタの縦横サイズが固定されていたため、エディタ内でテーブルを利用する際など、操作性が悪い場合があったが、今回の改修によりテーブルや画像の編集時の操作性が改善された。（昨年度分）

- ・ ボックスを新たに追加する際、「add box」で既存のボックスの上側に追加する仕様であったが、下側にボックスが追加されるように変更した。（昨年度分）
- ・ テンプレートギャラリーに、コースポートフォリオ作成用のテンプレートを追加し、提供を開始した。これにより、スナップショット新規作成時に「MOST テンプレート」タブを選択することにより、テンプレートが利用できるようになった。（昨年度分）
- ・ 他のLMSなどのプラットフォームへのスナップショットデータの移植を容易にするための規格「IMS Common Cartridge」を適用した。ただし、今回はMERLOTのContent Builderが2011年12月に実装したのと同様の方式を採用し、スナップショットのダウンロード時にマニフェストファイルを追加する等の簡易的措置をおこなった。
- ・ 掲示板ツールで、ユーザーが投稿した記事を投稿者本人が削除できる機能を追加した。
- ・ ダッシュボードにスナップショットへの訪問数・訪問ユーザー数の表示機能を追加した。

(b) MOST (Sakai) 関連

- ・ 前年度に試行的に開発したマイコレクション機能を改修した。具体的には、コレクション内のスナップショットの検索機能の強化、訪問者ログ機能の追加、マッチメイキングツールの検索結果の表示変更などである。
- ・ プロフィール画面のスナップショット一覧に「いいね」数を表示させるようにした。

この他、活用プログラム向けのワークブックやマニュアル類の整備など、各種の改良を随時おこなった。

4. MOST講習会

教育関係共同利用拠点における業務として、本年度は4回の「MOST 講習会」を企画したが、原稿執筆時点までの2回は参加希望がなかったため不開催とした。対象者は、大学教員およびFDや教育改善に関わる大学職員、将来大学教員を目指す大学院生である。今後、12月と3月に講習会を開催予定であり、3月の講習会は、関西地区FD連絡協議会の会員校に所属する教職員向けの講習会で、協議会広報ワーキンググループとの共催で開催予定であり、次年度の「FD活動報告会2013」と連動している。

このほか、MOSTのデモを、第18回大学教育研究フォーラムの参加者に対して実施した。3月に開催される第19回大学教育研究フォーラムにおいても実施予定である（執筆時点で未実施）。MOSTの登録は招待制で、通常は事務局よりアカウントの発行をおこなっていないが、これらの講習会およびデモにおいては希望者にMOSTのアカウントの発行手続きをおこなっている。

5. 今後の展開について

本年度で5年間にわたる特別経費プロジェクトが終了する。この間、MOSTの開発やMOSTを利用した大学教育改善向けの実践プログラムをデザイン・実施してきた。また、このことを通じ、個人・コミュニティ・組織の各レベルにおいて教育実践知の可視化・共有化を試みてきた。次年度以降も、引き続き、日本の大学における教育改善やFDに関する事例を、関西地区FD連絡協議会会員校における特徴的な取り組みやMOSTフェローの取り組みの支援・推進などを通じて、スナップショットを作成し、蓄積、提供をおこなう予定である。

今後の課題としては、Sakai や KEEP Toolkit など技術面の継続的な改善はもちろん、各レベルにおける幅広い支援体制のより一層の強化をはかり、提供する教育改善プログラムの質の向上を目指す。また、ICT による支援の次のフェーズとして、既存の教育コンテンツや人的ネットワークを元に、新たな教育上のナレッジを循環的に生成する場「大学教育コモンズ」の構築を目指す。

(酒井 博之)

第 1 期 MOST フェロー

氏名	所属・職名	テーマ
石村 源生	北海道大学 高等教育推進機構 特任准教授	プロジェクト実習のデザインと評価
長田 尚子	清泉女学院短期大学 国際コミュニケーション科 准教授	新しい授業形態（キャリア教育、サービスラーニング、プロジェクト学習など）のデザインと評価
尾澤 重知	早稲田大学 人間科学学術院 准教授	大人数授業でのグループ学習と Twitter による学生参加型授業
勝又あずさ	成城大学 共通教育研究センター 特別任用准教授	学生 160 人全員とつくるキャリアデザイン授業—理論と実践を組み合わせ、グループワークを通して互いに気づき・意味づけ・行動に繋げるオリジナルカリキュラム—
神田 宏	近畿大学 法学部 教授	大規模・中規模教室における双方向・多方向授業の展開支援方略
木村 修平	立命館大学 言語教育センター 外国語嘱託講師	PBL 型英語授業における ICT および SNS の積極活用とそのシナジー効果
澤田 忠幸	愛媛県立医療技術大学 保健科学部 准教授	学び合いとリフレクションを通じた初年次教育の実践
下井 俊典	国際医療福祉大学 保健医療学部 講師	学生を模擬患者とした演習の試み
村井 淳志	金沢大学 学校教育学類 教授	教育現場で即戦力となれる社会科教師を養成するための、社会科教育法の実践（100 名受講の大講義）
村上 裕美	関西外国語大学短期大学部 准教授	自律した学習者を育てるラーニングポートフォリオと授業改善を促すティーチングポートフォリオの併用による効果の考察

第 1 期 MOST フェロー 活動スケジュール

日 程	活 動
2 月 11 日 (土)	第 1 回ミーティング (京都大学)
2 月 12 日 (日)	第 83 回公開研究会への参加 (京都大学)
～2 月末	公開研究会の感想の共有 ・ MOST 内「第 1 期 MOST フェロー」コミュニティ内の「掲示板」へ投稿
3 月 14 日 (水)	「活動のプロポーザル」をスナップショットで共有 ・ 後日、「テンプレート」を各アカウントに送信
3 月 15 日 (木) ～16 日 (金)	第 18 回大学教育研究フォーラムへの参加 (京都大学) (任意) ・ 「MOST デモ」会場で個別対応可
6 月頃	進捗状況や問題点の報告、共有 (オンライン)
8 月 21 日 (火) ～22 日 (水)	第 2 回ミーティング (1 泊 2 日) ・ 1 日目 : 14:00～宿泊、2 日目 : 9:00～12:00 ・ 活動の進捗共有、成果発表に向けての計画
8 月 22 日	スナップショットの経過を MOST フェローで共有
～9 月 28 日 (金)	第 19 回大学教育研究フォーラム 個人研究発表申込み締切
9 月末頃	スナップショットを MOST フェローで共有
11 月 8 日 (木)	『発表論文集』の原稿を MOST フェロー間で共有
11 月 22 日 (木)	『発表論文集』の原稿提出締切
1 月頃	進捗状況や問題点の報告、共有 (オンライン)
3 月中旬	MOST のギャラリーでスナップショット一般公開 ……成果①
3 月中旬	第 19 回大学教育研究フォーラム (京都大学) ……成果② ・ MOST フェロー運営委員会メンバーによる小講演 ・ 「第 1 期 MOST フェロー打ち上げ会」兼「第 2 期フェローとの交流会」(2 日目)

MOST フェロー 第1回ミーティング プログラム

日 時：2012 年 2 月 11 日（土）16:00～19:00

場 所：京都大学 吉田南 1 号館 共 201 会議室・共 22 演習室（2F）

プログラム

16:00 ミーティング開始	共 201 会議室にご参集下さい（15:30 開場）
16:00 趣旨説明（田口・飯吉）	
16:15 自己紹介	MOST フェローの自己紹介（1 人 2 分程度）
16:45 MOST について（酒井）	
（部屋移動）	共 22 演習室へ移動
17:15 フリーディスカッション	夕食あり
17:30 アピールタイム	1 人 2～3 分で、持参した画像等をスライドに映し、取
18:30 フリーディスカッション	り組みについてのアピールをおこなう
19:00 終了・解散	

会場地図：京都大学 吉田南 1 号館 1 共 23 教室（吉田南構内）



MOST フェロー合宿 2012 第 2 回ミーティング

日 時：8 月 21 日（火） 13:30～21:00（受付 13:00～）

8 月 22 日（水） 8:45～12:30

開催場所：KKR 大阪ボードルーム （6 階）

プログラム（1日目）

日程	時間	プログラム	備考
8 月 21 日 （火）	13:30 ～ 13:40	開会挨拶	挨拶・本合宿研究会の趣旨について 飯吉 透（京都大学） MOST フェロー合宿プログラムについて 酒井 博之（京都大学）
	13:40 ～ 15:20	セッション 1	MOST フェロー活動報告（前半） 司会：田口 真奈（京都大学） （発表・質疑応答 1 人 20 分）
			休憩（15 分）
	15:35 ～ 17:15		MOST フェロー活動報告（後半） 司会：田口 真奈（京都大学） （発表・質疑応答 1 人 20 分）
	17:15-18:00	チェックイン・休憩（45 分）	
	18:00 ～ 21:00	セッション 2	ディナーセッション ディナー キャスルトーク 「実践コミュニティと教育の進化：カーネギー財団やMIT等での経験をふまえて」（飯吉透） オープンディスカッション 司会：田口真奈（京都大学）
	自由行動		

プログラム(2日目)

日程	時間	プログラム	備考
8月22日 (水)	7:00 ～ 8:30		各自で朝食
			チェックアウト
	8:45 ～ 10:30	セッション 3	MOST フェロープログラムの今後 今年度後半のプログラムについて 酒井 博之 (京都大学) 今後の MOST フェローについて (グループワーク) ・コミュニティ活動に望むこと ・MOST フェローの活用法 ・MOST フェロープログラムの将来 ファシリテーター：田口 真奈 (京都大学)
	10:30 ～ 11:30	セッション 4	第 19 回大学教育研究フォーラムに向けて 研究発表に関するピア・チュータリング
			片 づ け・移 動 (タクシー)
	12:00 ～ 12:20	大阪水上バス アクアライナー乗船 (大阪城港～淀屋橋港)	
	12:30		解散

IV-2. 大学生研究フォーラム

1. 概要

大学全入時代といわれる最近の大学教育にとって、学生をどう育てるかということが喫緊の課題となっている。大学はもはや単なる知識を習得させるだけの場ではなく、知識社会、情報化社会、グローバル社会といった新たな社会状況で力強く活躍する人材育成の場ともなっている。そのために大学は、正課・正課外教育、キャリア教育など有機的・包括的に考えていかなければならない。

大学生研究フォーラムは、高等教育における教授学習やファカルティ・ディベロップメントの実践的研究組織・京都大学高等教育研究開発推進センターと、大学生・大学院生への奨学制度で、社会に貢献する有用な人材育成を目指す公益財団法人電通育英会が、現代大学生の姿を正確に理解し、かつ現代社会を力強く生きていける学生を育てるために開催するものである。

さて、大学生研究フォーラムは、プログラムのよりいっそうの充実をはかるべく、2011年度より共催校に東京大学大学総合教育研究センターを加えて、運営組織の拡張をおこなっている。これにともなう、これまで一方通行的な講演形式のフォーラムから、参加者同士が議論をおこなう「参加者ダイアログ」も導入している。また、株式会社学研教育みらいの協力を得て、参加対象者を大学、企業等の関係者だけでなく高校教諭にまで拡張している。これはとくにキャリアデザインが大学入学以前の状態と密接に絡んでいる調査結果をふまえてのことである。こうして二日目には、従来型の一日目の議論をふまえた「高校教諭のためのシンポジウム」を新たに設けている。

本年度の大学生研究フォーラムは、正課・正課外教育、キャリア教育の架橋のテーマにグローバルキャリアを加えて、「グローバルキャリアの時代に大学教育は何ができるか」を年度テーマとして、以下に述べるプログラムを実施した。参加者数は、1日目が398名、2日目が239名であった。

*大学生研究フォーラムは、特別経費「大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成」を受けて、国内連携事業の一つとして運営されました。

2. プログラムの特徴

1) 一日目のプログラム——大学生研究フォーラム

今年は、①トランジション調査の中間報告、②事例報告・パネルディスカッション、③総括パネルディスカッションの構成でプログラムを実施した。各プログラムの概要、登壇者は下記のとおりである。

①学校から仕事へのトランジション調査の中間報告 京都大学・東京大学・電通育英会共催で2012年4月に実施した学校から仕事へのトランジション調査の中間報告を2つおこなった。登壇者とテーマは下記の通りである。

・溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

「学校教育の経験は仕事にどのように影響を及ぼしているか」

- ・ 中原淳（東京大学大学総合教育研究センター）
「『企業での活躍と大学時代の経験』の関係をさぐる」

②事例報告・パネルディスカッション 「グローバルキャリアの時代に大学教育は何ができるか」という年度テーマのもと、それに基づく下記の事例報告を3件おこない、それらについて参加者ダイアログならびにパネルディスカッションをおこなった。

- ・ 福田 公子（首都大学東京理工学研究科）
「生物学自主研究－『研究』を通して学部学生が能動的な社会的力をつける試み－」
- ・ 勝又美智雄（国際教養大学）
「学生の国際競争力を高めるための教育・学習」
- ・ 林 雅子（アサヒビール株式会社人事部）
「グローバル戦略に呼応した人材開発のあり方」

③総括パネルディスカッション 午前中のトランジション中間報告ならびに午後の事例報告・パネルディスカッションを受けて、大学教育改革、キャリア教育の専門の識者に自由に討論してもらった。一日の振り返り、総括となることも目的とした。パネリストは下記の3氏である。

- ・ 児美川孝一郎（法政大学キャリアデザイン学部）＜キャリア教育の立場＞
- ・ 吉見 俊哉（東京大学大学総合教育研究センター）＜高等教育全体の立場＞
- ・ 大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター）＜高等教育全体の立場＞

司会：松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

2) 二日目のプログラム——「高校教諭のためのシンポジウム」（協力：学研教育みらい）

高校におけるキャリア教育をどのようにおこなえばよいか、どこまでやるべきか、どのように大学へ接続させるか、という問題が検討された。プログラムは、①特別講演、②大学生研究フォーラム 2012 の概括と高校教諭へのメッセージ、③高校現場からのレポート、④パネルディスカッション、の4部構成のもと実施された。

①特別講演

- ・ 村上 育朗（教育未来研究会「そうぞう」代表）
「凡事徹底—想定外の時代を生きる—」

②大学生研究フォーラム 2012 の概括と高校教諭へのメッセージ

- ・ 大学研究フォーラム 2012 の概括：溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）
- ・ メッセージ1：児美川孝一郎（法政大学キャリアデザイン学部）
- ・ メッセージ2：福田 公子（首都大学東京理工学研究科）

③高校現場からのレポート

- ・ レポート1：高村聖悟（広島県立尾道北高校）
「生徒の進路を見据えたキャリア学習」
- ・ レポート2：下谷慎一（鳥取県立鳥取西高校）

「教科を横断した小論文指導で社会を考える」

④パネルディスカッション

- ・パネリスト：奥村 弘史（滋賀県立膳所高校）
- ・パネリスト：西根 正子（三重県立伊勢高校）
- ・パネリスト：浜田 伸一（福島県立福島高校）
- ・パネリスト：佐藤 幸彦（北海道札幌北高校）
- ・パネリスト：溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）
- ・司 会：大堀 精一（月刊情報誌「学研・進学情報」監修）

3. 大学生研究フォーラム 2012・高校教諭のためのシンポジウムを振り返って

大学生研究フォーラム 2012（1 日目）では、これまでの正課・正課外教育にキャリア教育を架橋させるというテーマに、グローバルキャリアの問題を加えて検討をおこなった。グローバル人材ということで、英語ができる・できないということは、企業のなかではさほど問題になっていないという話が印象的であった。問題は英語ができる・できないということよりもむしろ、異文化へ接触していくときの適応力や対人関係、コミュニケーション力にあるということであった。異質な状況・ものに触れて仕事をおこなっていく以上、異文化を理解するための学習も大いに求められることだろう。同質性の高いところで仕事をすることの多かった日本人が、国内も含めてさまざまな異文化状況で仕事をしていくことが増えてくると予想される。そのような近未来を想定した大学教育がもっとなされなければならないと考えられた。

次いで、高校教諭のためのシンポジウム（2 日目）では、昨年を引き続いて、高校におけるキャリア教育がどのように推進されるべきかということをも、実践事例を通して検討した。多くの論点が出されたが、もっとも課題だと感じたのは、「キャリア教育」の定義や概念理解が、学校や先生方によってさまざまであるということであった。小論文を書くこと、そこで社会の問題についていろいろ考えることがキャリア教育であるという学校もあれば、アクティブラーニングを導入すること、修学旅行・研修、オープンキャンパスなどで大学訪問すること、進路を考えることがキャリア教育であるという学校もある。大学でなされているように、卒業生や社会人を講師に呼んでの講演会、インターンシップに行かせることをもってキャリア教育と呼ぶ学校もある。どの活動も多かれ少なかれキャリア教育と呼べるものであるが、どの側面のキャリア教育を議論しているのかのマッピングがないと、「キャリア教育」という同じ用語を用いていても議論がかみ合わないと感じたのも正直なところである。ある参加者は「キャリア教育は高校では要らない」と主張したが、そこで考えられている「キャリア教育」も、いろいろな側面のうちの一側面でしかなかったりするのである。早急に概念整理の作業を進めて、実践をより精緻にとらえていかなければならないと考えられた。

4. 付録資料

『大学生研究フォーラム 2012』のプログラム（Web 上で公開）
（<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/forum/>）

（溝上 慎一）

研究フォーラム



大学生研究フォーラム2012

大学生研究フォーラム2012は満員の参加者をお迎えし、好評のうちに終了いたしました。

ご来場いただいた皆様、誠にありがとうございました。

来年度の「大学生研究フォーラム2013」(1日目)

および「高校教諭のためのシンポジウム」(2日目)は

下記の日程・会場で開催することが決定しました。

【日時】2013年8月17(土)・18(日)

【会場】東京大学本郷キャンパス伊藤謝恩ホール

【主催】東京大学大学総合教育研究センター

京都大学高等教育研究開発推進センター

公益財団法人電通育英会

詳しいプログラムのご案内は、3月末頃を予定しております。

京都大学／東京大学／電通育英会共催

大学生研究フォーラム2012を開催しました



グローバルキャリアの時代に大学教育は何ができるか

三者共催でますます充実した内容に

大学生の成長とキャリア形成を支援する「大学生研究フォーラム2012」が、京都大学高等教育研究開発推進センター、東京大学大学総合教育研究センター、公益財団法人電通育英会の三者共催で開催されます。グローバル化が進む中での大学教育の役割をテーマに、多彩な登壇者の方を迎え、ますます充実した内容で開催いたします。

ダイアログ(対話)を通して「参加するフォーラム」へ

課題に対して参加者同士がその場で意見を交換し、目的を共有化しながら最善の解決策を見出すダイアログ・コミュニケーションでは、「聞く」だけから、あなたの意見も反映する「参加する」フォーラムの場を提供します。

■大学生研究フォーラム 2012開催概要

<開催日>
2012年8月19日(日)

■(併催)高校教諭のためのシンポジウム開 催概要

<開催日>
2012年8月20日(月)

＜会場＞
京都大学百周年時計台記念館
＜会場へのアクセスマップ＞

■開催スケジュール

10:00～11:15

学校から仕事へのトランジション調査の中間報告

「学校教育の経験は仕事にどのように影響を及ぼしているか」

溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

「『企業での活躍と大学時代の経験』の関係をさぐる」

中原淳（東京大学大学総合教育研究センター）

11:30～12:45 昼食・交流会

挨拶：

大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター長）

吉見 俊哉（東京大学大学総合教育研究センター長／副学長）

松本 宏（公益財団法人電通育英会理事長）

12:45～15:35 シンポジウム

「グローバルキャリアの時代に大学教育は何ができるか？」

ファシリテーター：中原淳（東京大学大学総合教育研究センター）

12:45～12:55 イントロダクション

12:55～13:55 事例報告

「生物学自主研究－『研究』を通して

学部学生が能動的な社会的力を

つける試み－」

福田公子（首都大学東京理工学研究科）

「学生の国際競争力を高める

ための教育・学習」

勝又美智雄（国際教養大学）

「グローバル戦略に呼応した

人材開発のあり方」

林雅子（アサヒビール株式会社人事部）

13:55～14:20 参加者ダイアローグ

14:35～15:25 パネルディスカッション

15:25～15:35 小括

15:45～17:20

総括パネルディスカッション

司会：松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター）

児美川孝一郎（法政大学キャリアデザイン学部）

吉見俊哉（東京大学大学総合教育研究センター）

大塚雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター）

17:20～17:30

閉会の挨拶

大学生研究フォーラム／高校教諭のためのシンポジウム

■参加申し込み

※参加申込は定員に達しましたので受付を終了させて頂きました。

＜会場＞
京都大学百周年時計台記念館
＜会場へのアクセスマップ＞

■開催スケジュール

10:00～

イントロダクション

「シンポジウムの構成と展開、参加者の紹介」

大堀 精一（月刊情報誌「学研・進学情報」監修）

10:15～12:00

特別講演

「凡事徹底—想定外の時代を生きる—」

村上 育朗（教育未来研究会「そうぞう」代表）

12:00～13:30

ランチタイム・ミーティング

13:30～14:30

大学生研究フォーラム2012の概括と高校教諭へのメッセージ

大学研究フォーラム2012の概括：溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

メッセージ1：児美川孝一郎（法政大学キャリアデザイン学部）

メッセージ2：福田公子（首都大学東京理工学研究科）

14:40～15:40

高校現場からのレポート

「生徒の進路を見据えたキャリア学習」

レポート：高村 聖悟（広島県立尾道北高校教諭）

「教科を横断した小論文指導で社会を考える」

レポート：下谷 慎一（鳥取県立鳥取西高校教諭）

15:55～17:50

パネル・ディスカッション

「キャリアと学びをく社会＞に向けてどう指導するか」

司会：大堀 精一（月刊情報誌「学研・進学情報」監修）

パネリスト：奥村 弘史（滋賀県立膳所高校教諭）

パネリスト：西根 正子（三重県立伊勢高校教諭）

パネリスト：浜田 伸一（福島県立福島高校教諭）

パネリスト：佐藤 幸彦（北海道札幌北高校教諭）

パネリスト：溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

17:50～18:00

総括と次年度に向けて

18:15～ 懇親会

■大学生研究フォーラム 登壇者のプロフィール



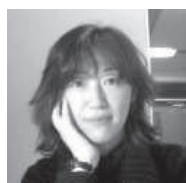
中原 淳(なかはら じゅん)氏
東京大学大学総合教育研究センター 准教授

東京大学教育学部、大阪大学大学院をへて、文部科学省メディア教育開発センター助手、マサチューセッツ工科大学客員研究員、2006年より現職。経営学習論。「大人の学びを科学する」をキーワードに、高等教育・企業人材育成等を研究。



溝上 慎一(みぞかみ しんいち)氏
京都大学高等教育研究開発推進センター准教授

1996年 京都大学高等教育教授システム開発センター助手、2003年より現職。自己形成論、青年心理学、学生の学びと成長を中心としたFDと大学生研究を行っている。大阪府立大学高等教育推進機構学長補佐。



福田 公子(ふくだ きみこ)氏
首都大学東京 大学院理工学研究科生命科学専攻准教授

1996年 東京都立大学大学院理学系研究科生物科学専攻助手。2007年より現職。発生学の研究とともに、学部や大学院での学生の能動的取組へのサポート、女子中高生の理系進路選択支援活動に関わる。



勝又 美智雄(かつまた みちお)氏
国際教養大学 教授・図書館長

1972年から日本経済新聞記者でロサンゼルス支局長、国際部次長、編集委員などを歴任。2004年国際教養大学開学と同時に教授兼図書館長に就任。北米研究、日米関係論、ジャーナリズム論など。



林 雅子(はやし まさこ)氏
アサヒビール株式会社
キャリア開発・ダイバーシティ推進担当部長

1991年 アサヒビール(株)に入社。営業、営業企画部門を経験後、アサヒフィールドマーケティング(株)取締役を経て、2008年より現職。社員のキャリア開発や女性活躍をはじめとするダイバーシティ推進活動に関わる。



児美川 孝一郎(こみかわ こういちろう)氏
法政大学キャリアデザイン学部教授 学部長

1963年生まれ 東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。法政大学文学部専任講師、助教授を経て2007年よりキャリアデザイン学部教授。現在に至る。



吉見俊哉(よしみ しゅんや)氏
東京大学大学総合教育研究センター長

1957年東京生まれ 東京大学教養学部卒。2004年、同大学院情報学環教授。2006年、同学環長。2010年より現職、教育企画室長。専攻は社会学、メディア論、文化研究。



大塚雄作(おおつか ゆうさく)氏

京都大学高等教育研究開発推進センター長

東京大学理学部・教育学部卒、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位修得。1996年同教授、2000年大学評価・学位授与機構教授を経て、2012年より現職。



松下佳代(まつした かよ)氏

京都大学高等教育研究開発推進センター教授

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。京都大学教育学部助手、群馬大学教育学部助教授、京都大学高等教育教授システム開発センター助教授を経て、2004年より現職。

■大学生研究フォーラム2012 お問い合わせ先

京都大学高等教育研究開発推進センター
溝上慎一研究室
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
TEL:075-753-3047 FAX:075-753-3045
mizokami.shinichi.4u@kvoto-u.ac.jp

(公財)電通育英会 事務局
〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-17
電通銀座ビル4F
TEL:03-3575-1386 FAX:03-3575-1577

■高校教諭のためのシンポジウム お問い合わせ先

学研教育みらい 学力開発事業部
〒141-0031 東京都品川区西五反田8丁目1-13 タケウ
チビル
TEL:03-3490-4581 FAX:03-3779-0859

京都大学高等教育研究開発推進センター
溝上慎一研究室
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
TEL:075-753-3047 FAX:075-753-3045
mizokami.shinichi.4u@kvoto-u.ac.jp

IV-3. 大学教育研究フォーラム

1. 概要

大学教育研究フォーラムは、京都大学高等教育研究開発推進センターが 1994 年度より年 1 回開催してきたものである。今年で 19 回目を迎える（2013 年 3 月 14 日・15 日開催予定）。毎年 400～500 名の大学教職員関係者が参加する、全国的にも広く認知された大学教育改善に関する研究・実践交流の場である。

同フォーラムは、FD（ファカルティ・ディベロップメント）や教授法、教育評価、遠隔教育といった諸領域における、学内・学外の大学教育関連の最先端の実践知をあまねく集積する場として開催するものである。最近の趨勢をふまえた最先端の知見は、学内外の教育改善推進に大きく貢献すると考えられている。

*大学教育研究フォーラムは、特別経費「大学教員教育研修のための相互研修型 FD 拠点形成」を受けて、国内連携事業の一つとして運営されました。

2. プログラムの特徴

第 19 回大学教育研究フォーラムは、①シンポジウム、②小講演、③参加者企画セッション、④個人研究発表から構成され実施される。昨年まで、③参加者企画セッションは「ラウンドテーブル」と称されていたが、今年からは「参加者企画セッション」と名称変更をしている。ラウンドテーブルはもちろんのこと、シンポジウムからワークショップまで多様な形態のセッションを、参加者が企画できるように考慮してのことである。

以下は、各プログラムの特徴、ならびに本年度の具体的プログラムである。

①シンポジウム『「学び」を改めて問う—主体的な学びとは何なのか—』

趣旨 昨年 8 月に出された中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学士課程教育の質的転換への好循環の「始点」として、学生の学修時間の増加・確保が掲げられています。この答申では「ガクシュウ」はすべて「学修」と記されていますが、これは、大学設置基準の「1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成する」という文言にそった表現です。具体的には、事前準備・授業受講・事後展開を通しての「主体的な学修」の充実が謳われています。いいかえれば、授業内・外での教員の教育計画にしたがって学生が自らガクシュウすることが「主体的な学修」です。これに対し、本シンポジウムでは、「主体的な学び」をテーマに掲げました。その意図は、設置基準や教員の教育計画を視野に入れつつもそれに縛られない形で、主体的に学ぶとはどういうことなのか、現代の大学においてそれを実現するには何が必要なのかを、さまざまな視点から根本的に議論することにあります。パネリストには、デジタルテクノロジー、学習環境デザイン、主体性の原理的考察、共同性にもとづく学校教育のあり方といった視点から、「学び」というテーマに理論的・実践的に関わってこられた方をお招

きました。パネリストからのご提案、政策担当者からの応答をふまえて、フロアのみなさまとともに、大学における主体的な学びのあり方について議論していきたいと思います。

- 報告者 1： 渡部 信一（東北大学大学院教育情報学研究部教授／研究部長）
報告者 2： 美馬 のゆり（公立はこだて未来大学情報科学部教授）
報告者 3： 田中 智志（東京大学大学院教育学研究科教授）
報告者 4： 藤田 英典（共栄大学教育学部教授／学部長）
報告者 5： 松坂 浩史（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長）
司 会： 松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

②小講演 各論的に、具体的なトピックを 8 つ取り上げ、最先端の知見を提供する。本年度は下記のテーマで講演者に依頼をおこなっている。

- 及川 恵（東京学芸大学教育学部准教授）
「大学の授業におけるストレスマネジメントの実践」
田島 充士（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授）
「アクティブラーニングにおける公共圏他者を『共創的越境』から読み解く」
飯吉 透（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）
田口 真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）
酒井 博之（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）
「教育改善のための大学教員コミュニティ形成—MOST フェローシッププログラム—」
清水 栄子（阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師）
「アカデミック・アドバイジングの展開とアドバイザーの能力開発—アメリカの事例を手がかりに—」
山田 和人（同志社大学文学部教授・PBL 推進支援センター長）
「PBL の何が学生を成長させるのか？—同志社大学プロジェクト科目（公募制・教養教育）の試みから—」
耳塚 寛明（お茶の水女子大学理事・副学長）
桂 瑠以（お茶の水女子大学学生支援センター講師）
「学生寮への教育的期待—お茶大 SCC の実践と課題—」
長澤 多代（三重大学附属図書館研究開発室准教授）
「主体的な学びのベースとなる大学図書館の学習空間とサービスラーニングコモンズと情報リテラシー教育を中心に—」
山村 滋（大学入試センター研究開発部教授）
「高校と大学の接続から見た高校教育の課題と大学入学者選抜制度の改革」

③参加者企画セッション ある特定のテーマでの研究・実践交流を促す目的で、一般参加者から募集するセッションである。本年度では「LTD（Learning Through Discussion）学習法の実践」「大学アドミニストレータの視点から考える IR 開発の課題」「学習理論にもとづく教育実践のデザイン」など 13 件の応募があった。

④個人研究発表 「FD・授業公開」「教育評価」「カリキュラム」「授業研究」「教育評価」「e-Learning・遠隔教育」「大学生・大学生活」の研究部会を用意し、大学教育実践研究の交流

の場としている。本年度は 96 件の応募があった。2009 年度の申し込みが 67 件、2010 年度の申し込みが 72 件、211 年度の申し込みは 77 件であったから、申し込みは増加傾向にあると言える。

3. 来年度からの参加費徴収について

これまで大学教育研究フォーラムは京都大学高等教育研究開発推進センターの運用経費で開催費用その他をまかなってきたが、昨今の厳しい財政事情のなか、参加費を徴収しないことにはフォーラムを続けられない状況となった。2013 年度・第 20 回大学教育研究フォーラムより参加費を徴収することが案内される。

4. 付録資料

- 『第 19 回大学教育研究フォーラム プログラム』（Web 上で公開）
(<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/2012/program2012.pdf>)

(溝上 慎一)

第19回 大学教育研究フォーラム プログラム

2013.3.14 THU・**15** FRI

京都大学 吉田南構内1号館

【個人研究発表・参加者企画セッション】：1号館／総合館（吉田南構内）

【小講演】：1号館（吉田南構内）

【シンポジウム】：百周年時計台記念館・1F百周年記念ホール（本部構内）

【情報交換会】：百周年時計台記念館・2F国際交流ホール（本部構内）

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター

本研究フォーラムは特別経費プロジェクト「大学教員教育研修のための相互研修型FD拠点形成」の一環です。

協賛：関西地区FD連絡協議会

※本プログラムは下記 Web 上で、PDF 版を公開しています。

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>

第19回大学教育研究フォーラム

◆日 程 2013年3月14日(木)～15日(金)

◆会 場 京都大学 吉田キャンパス

【個人研究発表・参加者企画セッション】 1号館／総合館(吉田南構内)

【小講演】 1号館(吉田南構内)

【シンポジウム】 百周年時計台記念館・1F百周年記念ホール(本部構内)

【情報交換会】 百周年時計台記念館・2F国際交流ホール(本部構内)

3月14日(木)

受 付 8:15～11:00 ……【1号館・共106】
12:30～13:00 ……【百周年時計台記念館・1F百周年記念ホール】

個人研究発表(1) 9:00～10:45 ……【1号館／総合館】

9:00～9:20 個人発表①

9:20～9:40 個人発表② *1人あたりの時間20分

9:40～10:00 個人発表③ (発表時間15分＋質疑応答3分＋2分交代)

10:00～10:20 個人発表④

10:20～10:45 全体討論

小 講 演(1) 11:00～12:00 ……【1号館】

シンポジウム 13:00～17:15 ……【百周年時計台記念館・1F百周年記念ホール】

開会の挨拶 13:00～13:10 松本 紘(京都大学総長)

シンポジウム 13:10～17:15

「『学び』を改めて問うー主体的な学びとは何なのかー」

報告者1 渡部信一(東北大学大学院教育情報学研究部教授／研究部長)

報告者2 美馬のゆり(公立はこだて未来大学情報科学部教授)

報告者3 田中智志(東京大学大学院教育学研究科教授)

報告者4 藤田英典(共栄大学教育学部教授／学部長)

報告者5 松坂浩史(文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長)

司 会 松下佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

情 報 交 換 会 17:30～19:30 ……【百周年時計台記念館・2F国際交流ホール】

3月15日（金）

受付 8:30~13:30 【1号館・共106】

個人研究発表(2) 9:00~10:45 【1号館／総合館】

9:00~ 9:20 個人発表①

9:20~ 9:40 個人発表② *1人あたりの時間20分

9:40~10:00 個人発表③ (発表時間15分+質疑応答3分+2分交代)

10:00~10:20 個人発表④

10:20~10:45 全体討論

小講演(2) 11:00~12:00 【1号館】

参加者企画セッション 13:30~16:00 【1号館／総合館】

3月14日(木)

第 1 日

個人研究発表(1) 9:00~10:45

A-1. 教育評価研究部会

座長：谷口進一 ……………【会場：1号館・共311】

アクティブ・ラーニング型授業の評価とFDへの展開

ー2011年度授業評価アンケート・数値データの分析からー

雨森 聡(島根大学教育開発センター)

鹿住大助(島根大学教育開発センター)

森 朋子(島根大学教育開発センター)

松田岳士(島根大学教育開発センター)

アクティブ・ラーニング型授業の評価とFDへの展開

ー2011年度授業評価アンケート・自由記述の分析からー

鹿住大助(島根大学教育開発センター)

雨森 聡(島根大学教育開発センター)

森 朋子(島根大学教育開発センター)

松田岳士(島根大学教育開発センター)

VALUE ルーブリックの意義と課題ー規準とレベルの分析を通してー

松下佳代・高橋雄介・坂本尚志・田川千尋・田口真奈(京都大学高等教育研究開発推進センター)

平山朋子・大山牧子・畑野 快・蔣 妍・羽山裕子・山本はるか・斉藤有吾

(京都大学大学院教育学研究科)

蒲 雲菲(京都大学高等教育研究開発推進センター)

工科大学におけるジェネリックスキル修得の自己評価とその分析

谷口進一(金沢工業大学基礎教育部)

青木克比古(金沢工業大学基礎教育部)

中 勉(金沢工業大学基礎教育部)

高 香滋(金沢工業大学基礎教育部)

A-2. 教育評価研究部会

座長：藤原智子 ……………【会場：1号館・共207】

学生の授業評価視点を反映した質問項目の作成

「授業過程評価スケールー看護系大学院修士課程用ー」開発を目ざして

中山登志子(千葉大学大学院看護学研究科)

舟島なをみ(千葉大学大学院看護学研究科)

私立大学におけるSD(Staff Development)の現状

岩崎保道(高知大学評価改革機構)

大学生のレポート観の変容：メタファー法を用いてー「虹」から「積み木」へー

館野泰一(東京大学大学院学際情報学府)

中原 淳(東京大学大学総合教育研究センター)

九州大学におけるGPA制度と成績分析

藤原智子(九州大学基幹教育院)

淵田吉男(九州大学基幹教育院)

B-1. カリキュラム研究部会**座長：小川 勤 …… 【会場：1号館・共312】**

「企業」「大学」が協同し学びに関わることで学生の主体性は引き出されたか？

平山恭子（Future Skills Project 研究会事務局／株式会社ベネッセコーポレーション）

教員養成改革としての金融経済教育

水野英雄（愛知教育大学教育学部）

高専における高大一貫教育としてのカリキュラムー数学・物理等の工学基礎科目を通してー

斎藤 斉（群馬工業高等専門学校）

高等教育の質保証を目指した教養教育カリキュラムの改革ーカフェテリア方式から定食メニュー方式へー

小川 勤・糸長雅弘（山口大学大学教育センター）

C-1. 授業研究部会**座長：尾澤重知 …… 【会場：1号館・共313】**

科学リテラシーをめぐる対話型授業ーアクティブ・ラーニングの効果的展開へ向けた取り組みと検討ー

小島健太郎・山田秀人（九州大学基幹教育院）

受入機関との連携 PBL によるマネジメント力の育成法の検討

酒井浩二（京都光華女子大学キャリア形成学部）

小林 薫（京都光華女子大学キャリアセンター）

山本嘉一郎（京都光華女子大学キャリア形成学部）

3年生と1年生の授業リンクによる相乗効果を高めるキャリア教育

佐藤龍子（静岡大学大学教育センター）

大教室授業における Twitter とグループ学習を連携させた授業の効果の検討

尾澤重知（早稲田大学人間科学学術院）

森 裕生（早稲田大学人間科学部）

江本啓訓（東京農工大学総合情報メディアセンター）

C-2. 授業研究部会**座長：大島弥生 …… 【会場：1号館・共208】**

理科教員養成の方法としての川村メソッドの実践

川村康文（東京理科大学理学部）

海老崎功（京都市青少年科学センター／東京理科大学科学教育研究科博士課程）

松本 悠（東京理科大学）

理科教員養成の方法としての川村メソッドの評価

海老崎功（京都市青少年科学センター／東京理科大学科学教育研究科博士課程）

川村康文（東京理科大学理学部）

松本 悠（東京理科大学）

初年次教育科目「導入基礎演習」の学修効果

吉田文子・柿澤美奈子・鈴木千衣（佐久大学看護学部）

初年次日本語表現科目における言語能力の変化

大島弥生（東京海洋大学海洋科学部）

石井一成（東京海洋大学海洋科学部）

大場理恵子（東京海洋大学海洋科学部）

トンプソン美恵子（東京海洋大学海洋科学部）

池田玲子（東京海洋大学海洋科学部）

3月14日(木)

C-3. 授業研究部会**座長：倉茂好匡 …… 【会場：総合館・共北25】**

医学生への図表の利用に関する基本的・医学的表現技術教育

佐藤 梓（東京女子医科大学医学部）

三原祥子（東京女子医科大学医学部）

木林和彦（東京女子医科大学医学部）

地域資料館と連携した活動型授業における学生の学びの過程

黒田純平（東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科）

池田玲子（東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科）

大島弥生（東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科）

大学生の挙手・発言行動を促進する授業環境の構築

吉村匠平・森田慶子（大分県立看護科学大学看護学部）

大学1年生に対する科学的和文作文法指導―教員の研究紹介を教材にした取り組み―

倉茂好匡（滋賀県立大学環境科学部）

C-4. 授業研究部会**座長：宇田 光 …… 【会場：総合館・共北26】**

自発的な学習を促進する英語のリーディングクラスの運営について

平野真理子・入江和子（神戸海星女子学院大学）

教員がゼミナールの授業構成上で抱える困難の検討

伏木田稚子（東京大学大学院学際情報学府）

学生・企業・大学三者による利益享受型インターンシップ

―食品産業を対象とした地域金融機関との連携授業―

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター）

須藤 智（静岡大学大学教育センター）

坂井敬子（静岡大学大学教育センター）

佐藤龍子（静岡大学大学教育センター）

BRD（当日ブリーフレポート方式）を用いた講義の実践―主体的な学びと評価を中心に―

宇田 光（南山大学総合政策学部）

C-5. 授業研究部会**座長：木野 茂 …… 【会場：総合館・共北27】**

学生のレポート概念は何に基づいているのか

福田 健（清泉女子大学文学部）

理系基礎科目を通じた学生の学び―物理学基礎実験における学生アンケート調査から―

平 知宏・西垣順子（大阪市立大学大学教育研究センター）

学生の主体的な学びと学修内容―授業例からの考察―

木野 茂（立命館大学共通教育推進機構）

D-1. FD・授業公開研究部会

座長：榊原暢久 ……【会場：総合館・共北28】

相互授業参観の現状、成果と課題

堀井啓幸（山梨県立大学人間福祉学部）

山本武信（山梨県立大学国際政策学部）

杉田由仁（山梨県立大学看護学部）

ライティングセンターで文章指導を受けた学生のレポート分析―表記・表現面と構成面に着目して―

實淵洋次（関西大学教育推進部）

岩崎千晶（関西大学教育推進部）

林田定男（関西大学教育推進部）

金田純平（関西大学教育推進部）

千葉大学医療系3学部の専門職連携教育プログラム「亥鼻 IPE」におけるFD/SDについて

高橋平徳・小河祥子（千葉大学大学院看護学研究科）

朝比奈真由美・石井伊都子（千葉大学医学部附属病院）

酒井郁子・中村伸枝（千葉大学大学院看護学研究科）

伊藤彰一・岡田聡志（千葉大学大学院医学研究院）

黒河内仙奈（千葉大学大学院看護学研究科）

鈴木優章・関根祐子（千葉大学大学院薬学研究科）

田邊政裕（千葉大学大学院医学研究院）

前田 崇（千葉大学医学部附属病院）

増田和司（千葉大学大学院薬学研究科）

宮崎美砂子（千葉大学大学院看護学研究科）

芝浦工業大学におけるFD活動の事例報告―SCOT 学生による授業コンサルティングの可能性―

榊原暢久（芝浦工業大学教育イノベーション推進センター／工学部）

ホートン広瀬恵美子（芝浦工業大学教育イノベーション推進センター／工学部）

D-2. FD・授業公開研究部会

座長：杉原真晃 ……【会場：総合館・共北31】

ラーニングコモンズを媒介としたUDの推進で学生の主体的な学び、考える力の向上へ

清水 亮（三重中京大学現代法経学部）

学生視点によるティーチングポートフォリオ作成支援

長谷川紀幸（横浜国立大学工学研究院等技術部）

広島大学におけるPBL(Problem Based Learning)の全学展開

小澤孝一郎（広島大学大学院医歯薬保健学研究院）

於保幸正（広島大学大学院総合科学研究科）

古澤修一（広島大学大学院生物圏科学研究科）

田地 豪（広島大学大学院医歯薬保健学研究院）

西堀正英（広島大学大学院生物圏科学研究科）

吉田香奈（広島大学教養教育本部）

FD担当者が抱く問題意識とキャリア展望

杉原真晃（山形大学基盤教育院）

佐藤万知（東北大学高等教育開発推進センター）

半澤礼之（北海道教育大学教育学部）

村上正行（京都外国語大学マルチメディア教育研究センター）

3月14日(木)

E-1. e-Learning・遠隔教育研究部会**座長：米谷 淳 ……【会場：総合館・共北32】**

大学言語教育におけるPODCASTの試用

Russell Mayne (山梨大学大学教育研究開発センター)

奥村圭子 (山梨大学留学生センター)

iPadを活用した全学情報リテラシー教育と学習支援情報の共有

小松泰信 (大阪女学院大学国際・英語学部)

川崎千加 (大阪女学院短期大学英語科)

国内外の日本語教師の持続的成長を支援するeポートフォリオ

加藤由香里 (東京農工大学大学教育センター)

Web-based FDのID論的検討：基本設計

米谷 淳 (神戸大学大学教育推進機構)

合田美子 (熊本大学大学院社会文化学研究科)

F-1. 大学生・大学生生活研究部会**座長：林田定男 ……【会場：総合館・共北37】**

『学習支援ハンドブック』作成の目的と活用上の課題

ー特別な支援を要する学生に対する全学支援の試みー

伊藤嘉一・森川和子・三田地真実・天野一哉・西永 堅・伊藤一美 (星槎大学共生科学部)

教員、職員、学生が求める学生支援を実現するための取り組み

吉田 博 (徳島大学大学開放実践センター)

工学系学生による海外実務訓練の意義ー国際連携教育プログラム派遣学生を事例としてー

リー飯塚尚子 (長岡技術科学大学国際連携センター)

学生の文章力および卒業論文に対する意識の変化ーアンケートと態度調査よりー

林田定男 (関西大学教育推進部)

樋口隆太郎 (関西大学大学院心理科学研究科)

金田純平 (関西大学教育推進部)

實淵洋次 (関西大学教育推進部)

岩崎千晶 (関西大学教育推進部)

F-2. 大学生・大学生生活研究部会**座長：村上正行 ……【会場：総合館・共北38】**

「グループ学習エリア」における学生支援の試みー小規模な施設改修に伴う学習スペースの設置事例ー

村上孝弘 (龍谷大学図書館事務部)

主体的な学習態度の獲得を促す自己調整学習方略ー潜在差得点モデルを用いた検討ー

畑野 快 (京都大学大学院教育学研究科)

学長インターンシップのすすめー学長インターンシップ3年の実績と課題ー

伊東幸宏 (静岡大学学長)

佐藤龍子 (静岡大学大学教育センター)

山下義保 (静岡大学秘書室)

坂井敬子 (静岡大学大学教育センター)

大学における学生の授業外での主体的な学びを目指した「自主ワークショップ」の設計と実践

西本直人 (京都外国語大学外国語学部)

村上正行 (京都外国語大学マルチメディア教育研究センター)

小講演(1) 11:00~12:00

大学の授業におけるストレスマネジメントの実践……………【会場：1号館・共207】

及川 恵（東京学芸大学教育学部准教授）

【司会】大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授・センター長）

アクティブラーニングにおける公共圏他者を「共創的越境」から読み解く

……………【会場：1号館・共208】

田島 充士（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授）

【司会】溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

教育改善のための大学教員コミュニティ形成……………【会場：1号館・共311】

ーMOSTフェローシッププログラムー

飯吉 透（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

田口 真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

酒井 博之（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

【司会】田口 真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

アカデミック・アドバイジングの展開とアドバイザーの能力開発……………【会場：1号館・共312】

ーアメリカの事例を手がかりにー

清水 栄子（阿南工業高等専門学校FD高度化推進室特命講師）

【司会】山本 淳司（京都大学総長室（教育担当）課長）

3月14日(木)

シンポジウム 13:00~17:15

会 場 百周年時計台記念館・1F 百周年記念ホール

開会の挨拶 13:00~13:10

松本 紘(京都大学総長)

シンポジウム 13:10~17:15

『学び』を改めて問うー主体的な学びとは何なのかー

趣 旨

昨年8月に出された中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」では、学士課程教育の質的転換への好循環の「始点」として、学生の学修時間の増加・確保が掲げられています。この答申では「ガクシュウ」はすべて「学修」と記されていますが、これは、大学設置基準の「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成する」という文言にそった表現です。具体的には、事前準備・授業受講・事後展開を通しての「主体的な学修」の充実が謳われています。いいかえれば、授業内・外での教員の教育計画にしたがって学生が自らガクシュウすることが「主体的な学修」です。

これに対し、本シンポジウムでは、「主体的な学び」をテーマに掲げました。その意図は、設置基準や教員の教育計画を視野に入れつつもそれに縛られない形で、主体的に学ぶとはどういうことなのか、現代の大学においてそれを実現するには何が必要なのかを、さまざまな視点から根本的に議論することにあります。パネリストには、デジタルテクノロジー、学習環境デザイン、主体性の原理的考察、共同性にもとづく学校教育のあり方といった視点から、「学び」というテーマに理論的・実践的に関わってこられた方をお招きしました。パネリストからのご提案、政策担当者からの応答をふまえて、フロアのみなさまとともに、大学における主体的な学びのあり方について議論していきたいと思います。

- 報告者1: 渡部 信一(東北大学大学院教育情報学研究部教授/研究部長)
 報告者2: 美馬 のゆり(公立はこだて未来大学情報科学部教授)
 報告者3: 田中 智志(東京大学大学院教育学研究科教授)
 報告者4: 藤田 英典(共栄大学教育学部教授/学部長)
 報告者5: 松坂 浩史(文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長)
 司 会: 松下 佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

第2日

個人研究発表(2) 9:00~10:45

A-3. 教育評価研究部会

座長：星野聡孝 ……………【会場：1号館・共207】

大学における授業評価アンケートの運用

吉川政夫（東海大学教育研究所）

有沢孝治（東海大学教育研究所）

数学基礎力の定着を目指した学習支援と学修時間の保証に向けた1つの試み

伊藤昭夫（近畿大学工学部教育推進センター）

高山智行（近畿大学工学部教育推進センター）

安尾正秋（近畿大学工学部教育推進センター）

プロジェクト型学習プログラム「防災コミュニケーション実習」の設計・運営・評価

石村源生（北海道大学）

授業アンケートからポートフォリオへー学習と教育の自己改善を支援する新たな仕組みの導入ー

星野聡孝（大阪府立大学高等教育推進機構）

A-4. 教育評価研究部会

座長：坂井敬子 ……………【会場：1号館・共312】

サービス・ラーニングが大学卒業後の生活に及ぼす効果

ー広島経済大学・興動館プロジェクトを事例としてー

木村 充（東京大学大学院学際情報学府）

中原 淳（東京大学大学総合教育研究センター）

深い学びを促進するパフォーマンス評価ー理学療法教育における「考える OSCE-R」の開発と実践ー

平山朋子（藍野大学医療保健学部）

松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター）

西村 敦（藍野大学医療保健学部）

堀 寛史（藍野大学医療保健学部）

汎用的／専門的／実務的資質能力の学年による違いと学業成績との関連

坂井敬子（静岡大学大学教育センター）

須藤 智（静岡大学大学教育センター）

佐藤龍子（静岡大学大学教育センター）

3月15日（金）

B-2. カリキュラム研究部会

座長：細川和仁 …………… 【会場：1号館・共313】

教員養成型 PBL 教育の課題と展望Ⅷープロジェクト活動型 PBL 教育ー

松本金矢・根津知佳子・森脇健夫（三重大学教育学部）

教員養成型 PBL 教育の課題と展望Ⅸーシナリオ開発としての教員養成型 PBL（その1）ー

山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・中西康雅（三重大学教育学部）

赤木和重（神戸大学発達科学部）

守山紗弥加（三重大学教育学部連携支援室）

学士力の基盤の一つとしての数学力について

ー数学コンピテンシーテストによるアセスメントのまとめに向けてー

水町龍一（湘南工科大学工学部）

御園真史（島根大学教育学部）

テキスト開発を中心とした高大接続教育の実践

ー秋田大学カリキュラム・トランジション・センターの取り組みー

細川和仁（秋田大学教育推進総合センター）

銭谷秋生（秋田大学教育推進総合センター）

鍋島太郎（秋田大学教育推進総合センター）

櫻田 譲（秋田大学教育推進総合センター）

戸井田直美（秋田大学教育推進総合センター）

原田麻子（秋田大学教育推進総合センター）

C-6. 授業研究部会

座長：村井淳志 …………… 【会場：1号館・共208】

理系のためのスペイン語教育

渡辺 暁（山梨大学）

大学における Peer Instruction を用いた授業実践の検討ー授業外学習時間に着目してー

蔣 妍（京都大学大学院教育学研究科）

ポジティブアプローチによる「コミュニティ・オブ・プラクティス」が自己効力向上に与える効果

ー初年次のキャリア教育においてー

勝又あずさ（成城大学共通教育研究センター）

教育現場で即戦力となる社会科教師を養成するための、初等社会科教育法の実践

（100名受講の大講義）

村井淳志（金沢大学学校教育学類）

C-7. 授業研究部会

座長：澤田忠幸 ……【会場：1号館・共311】

大学生の「社会」に関する知識について

尾崎秀夫（神戸海星女子学院大学現代人間学部）

樋口勝一（神戸海星女子学院大学現代人間学部）

自動フィードバックとピアレビューの統合ーアカデミックライティングの授業設計ー

川西 慧（京都大学大学院人間・環境学研究科）

細越響子（京都大学大学院人間・環境学研究科）

高橋 幸（京都大学高等教育研究開発推進機構）

金丸敏幸（京都大学大学院人間・環境学研究科）

田地野彰（京都大学高等教育研究開発推進センター）

学生参加型の授業づくりー基本的な考え方・方法と実践例ー

杉田由仁・流石ゆり子・小林美雪・須田由紀・山本奈央（山梨県立大学看護学部）

立石ゆか（前山梨県立大学看護学部）

協同学習とリフレクションに基づく初年次教育の実践ー学生の心理的特性との関連を含めてー

澤田忠幸・鳥居順子・加藤徳雄・脇坂浩之・草薙康城（愛媛県立医療技術大学保健科学部）

C-8. 授業研究部会

座長：長田尚子 ……【会場：総合館・共北25】

発信型英語授業とICT教育のハイブリッド型講義の試み

木村修平（立命館大学言語教育センター）

作業端末の違いがグループワークにおける学びに及ぼす影響（1）

ーiPadと、紙の違いに注目して：量的指標からの検討ー

須藤 智（静岡大学大学教育センター）

酒井徹也（静岡大学大学教育センター）

坂井敬子（静岡大学大学教育センター）

作業端末の違いがグループワークにおける学びに及ぼす影響（2）

ーiPadと、紙の違いに注目して：質的指標からの検討ー

酒井徹也（静岡大学大学教育センター）

須藤 智（静岡大学大学教育センター）

坂井敬子（静岡大学大学教育センター）

実践者間の対話を通じたプロジェクト活動の深化

ー短期大学の職業実践的プロジェクトへのピアレビューの導入と評価ー

長田尚子（清泉女学院短期大学）

武田るい子（清泉女学院短期大学）

村田信行（清泉女学院短期大学）

3月15日(金)

C-9. 授業研究部会

座長：中島 誠 ……【会場：総合館・共北26】

KitBuilt MapSystemによる主体的な学修時間の確保

茅島路子・宇井美代子・小田部進一・林 大悟・宮崎真由（玉川大学文学部）

平嶋 宗（広島大学大学院工学研究科）

オムニバス講義によるキャリア教育科目におけるe-learningを活用した学生の能動的学習促進の試み

保坂雅子（岡山大学ダイバーシティ推進本部）

学士力に対応した全学的初年次教育の展開⑨ーセミナー導入前後の学びに関する縦断的検討ー

中島 誠（三重大学高等教育創造開発センター）

中山留美子（三重大学高等教育創造開発センター）

長濱文与（三重大学高等教育創造開発センター）

中西良文（三重大学高等教育創造開発センター／教育学部）

南 学（三重大学高等教育創造開発センター／教育学部）

学士力に対応した全学的初年次教育の展開⑩ー4年間の取り組みに関する横断的分析ー

中山留美子（三重大学高等教育創造開発センター）

中島 誠（三重大学高等教育創造開発センター）

長濱文与（三重大学高等教育創造開発センター）

中西良文（三重大学高等教育創造開発センター／教育学部）

南 学（三重大学高等教育創造開発センター／教育学部）

C-10. 授業研究部会

座長：山崎めぐみ ……【会場：総合館・共北27】

数学物理系授業におけるクリッカー等を用いたアクティブラーニングの試み

樋口三郎（龍谷大学理工学部）

協働学習支援システムを利用した英語アカデミックリーディングクラスの実践と評価

細越響子（京都大学大学院人間・環境学研究科）

高橋 幸（京都大学高等教育研究開発推進機構）

坂本尚久（京都大学高等教育研究開発推進機構）

小山田耕二（京都大学高等教育研究開発推進機構）

大学教育におけるコースデザイン構築のためのコンセプトマップの役割

大山牧子（京都大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員）

初年次教育・アカデミックスキルを異文化体験・コミュニケーションとして捉える

山崎めぐみ（創価大学学士課程教育機構）

C-11. 授業研究部会

座長：筒井洋一 ……【会場：総合館・共北31】

映画を教材として用いた教育学の授業実践と効果

小林忠資（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

田中秀佳（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

寺田佳孝（愛知教育大学）

中井俊樹（名古屋大学高等教育研究センター）

ユビキタス映像記録視聴システムを活用した授業研究の試みⅡ

平山 勉（名城大学教職センター）

後藤明史（名古屋大学情報基盤センター）

竹内英人（名城大学教職センター）

携帯電話を使ったインタラクティブな授業の試み

ー大教室講義における学生の潜在的な発言を呼び起こすー

吉岡一志（山口県立大学共通教育機構）

宇田川暢（山口県立大学教育研究推進室）

大学生が参加した高大連携授業「言葉の力がアスリート力を高める」授業設計を中心にしてー

筒井洋一（京都精華大学人文学部）

大木誠一（神戸国際大学附属高校）

D-3. FD・授業公開研究部会

座長：服部憲児 ……【会場：総合館・共北32】

大学院のFDに関する諸問題

吉田雅章（和歌山大学経済学部）

看護系大学看護教員が臨地実習での学生へのかかわりで

最も大切にしていることの形成に影響を及ぼした過去の経験

竹元恵子（園田学園女子大学人間健康学部）

大阪大学における学生参加型FD・教育改善ー過去と現在の比較からー

服部憲児（大阪大学全学教育推進機構）

前田裕介（大阪大学人間科学研究科）

3月15日(金)

D-4. FD・授業公開研究部会

座長：井上史子 ……【会場：総合館・共北37】

授業改善を可能にする環境作りのための3つの段階別アプローチ

ーwin-win 関係の授業改善を目指してー

村上裕美（関西外国語大学短期大学部）

Moodleを活用した教員間の情報共有と初年次教育の授業運営

長谷川元洋（金城学院大学国際情報学部）

時岡 新（金城学院大学国際情報学部）

大橋 陽（金城学院大学国際情報学部）

岩崎公弥子（金城学院大学国際情報学部）

太田正澄（金城学院大学国際情報学部）

齋藤民徒（金城学院大学国際情報学部）

西尾吉男（金城学院大学国際情報学部）

宇都宮みのり（金城学院大学人間科学部）

中村岳穂（金城学院大学国際情報学部）

牛田博英（金城学院大学国際情報学部）

TAから見た心理学教育の共通性と多様性

小杉考司（山口大学教育学部）

川崎徳子（山口大学教育学部）

福田 廣（山口大学教育学部名誉教授）

Teaching 評価のためのポートフォリオの導入と評価指標の作成

井上史子（帝京大学高等教育開発センター）

土持ゲーリー法一（帝京大学高等教育開発センター）

F-3. 大学生・大学生生活研究部会

座長：神田 宏 ……【会場：総合館・共北38】

大学新卒離職率3年3割の改善に向けて

ーcompromise 妥協の米国的解釈から英国式解釈への再転換ー

菅野憲司（千葉大学文学部）

「ピア・コミュニティ」活動における効果の検討ーコミュニティの組織風土に着目してー

山田嘉徳（関西大学大学院心理科学研究科）

村上祐介（関西大学大学院心理科学研究科）

押江 隆（山口大学教育学部）

田中俊也（関西大学文学部）

能動的な学習意欲・態度の涵養のための初学年ゼミの活用例

神田 宏（近畿大学法学部）

上崎 哉（近畿大学法学部）

小講演(2) 11:00~12:00

PBLの何が学生を成長させるのか?【会場:1号館・共207】

ー同志社大学プロジェクト科目(公募制・教養教育)の試みからー

山田 和人(同志社大学文学部教授・PBL推進支援センター長)

【司会】溝上 慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

学生寮への教育的期待ーお茶大SCCの実践と課題ー【会場:1号館・共311】

耳塚 寛明(お茶の水女子大学理事・副学長)

桂 瑠以(お茶の水女子大学学生支援センター講師)

【司会】松下 佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

主体的な学びのベースとなる大学図書館の学習空間とサービス【会場:1号館・共208】

ーラーニングコモンズと情報リテラシー教育を中心にー

長澤 多代(三重大学附属図書館研究開発室准教授)

【司会】田口 真奈(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

高校と大学の接続から見た高校教育の課題と大学入学者選抜制度改革【会場:1号館・共312】

山村 滋(大学入試センター研究開発部教授)

【司会】大塚 雄作(京都大学高等教育研究開発推進センター教授・センター長)

3月15日(金)

参加者企画セッション 13:30~16:00

LTD (Learning Through Discussion) 学習法の実践 …… 【会場：1号館・共311】

ー授業外学習時間が増える能動的学びの仕掛けを考えるー

企画：関田一彦（創価大学教育学部）
 話題提供：小川雅広（山口県立大学共通教育機構）
 話題提供：清水強志（創価大学学士課程共通機構）
 話題解説：安永 悟（久留米大学文学部）
 司 会：関田一彦（創価大学教育学部）

学生とともにすすめるFD …… 【会場：1号館・共312】

代表企画：木野 茂（立命館大学共通教育推進機構）
 共同企画：梅村 修（追手門学院大学国際教養学部）
 共同企画：梶浦桂司（札幌大学法学部）
 共同企画：村山孝道（京都文教大学教務課）
 共同企画：服部憲児（大阪大学全学教育推進機構）
 共同企画：天野憲樹（岡山大学教育開発センター）
 共同企画：吉田 博（徳島大学大学開放実践センター）
 話題提供：木野 茂（立命館大学共通教育推進機構）
 話題提供：天野憲樹（岡山大学教育開発センター）
 話題提供：山本堅一（小樽商科大学教育開発センター）
 話題提供：梅村 修（追手門学院大学国際教養学部）
 話題提供：村山孝道（京都文教大学教務課）
 司 会：木野 茂（立命館大学共通教育推進機構）

「自己理解を深める体験」で学生が変わる、授業が変わる …… 【会場：1号館・共207】

代表企画：川崎弘也（株式会社ラーニングバリュー）
 代表企画：北森義明（順天堂大学名誉教授）
 共同企画：池田輝政（名城大学人間学部）
 共同企画：熊谷太郎（松山大学経済学部）
 共同企画：松井名津（松山大学経済学部）
 共同企画：中村 剛（武蔵野大学教養教育部）
 共同企画：本田直也（大手前大学現代社会学部）
 ファシリテーター：川崎弘也（株式会社ラーニングバリュー）

大学アドミニストレータの視点から考えるIR開発の課題 ……………【会場：1号館・共313】

ー大学情報の活用および公表に向けてー

- 企 画：鳥居朋子（立命館大学教育開発推進機構）
 企 画：川那部隆司（立命館大学教育開発推進機構）
 企 画：石本雄真（立命館大学教育開発推進機構）
 話題提供：高橋哲也（大阪府立大学副学長・高等教育推進機構長）
 話題提供：山本幸一（明治大学教学企画部）
 話題提供：小野勝大（立命館大学教学部）
 話題提供：浅田智史（立命館大学情報システム部）
 指定討論：本間政雄（立命館アジア太平洋大学副学長）
 司 会：鳥居朋子（立命館大学教育開発推進機構）

学習理論にもとづく教育実践のデザイン ……………【会場：1号館・共208】

ー活動理論と学習科学のアプローチからー

- 企 画：森 朋子（島根大学教育開発センター）
 話題提供：松下佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター）
 話題提供：松田岳士（島根大学教育開発センター）
 話題提供：益川弘如（静岡大学大学院教育学研究科）
 話題提供：森 朋子（島根大学教育開発センター）
 司 会：森 朋子（島根大学教育開発センター）

批判的思考と高次リテラシー育成のための教授法 ……………【会場：総合館・共北25】

- 企 画：楠見 孝（京都大学教育学研究科）
 話題提供：道田泰司（琉球大学教育学部）
 話題提供：若林靖永（京都大学経営管理大学院）
 話題提供：三浦麻子（関西学院大学文学部）
 話題提供：信原幸弘（東京大学総合文化研究科）
 指定討論：若山 昇（帝京大学法学部）
 司 会：楠見 孝（京都大学教育学研究科）

私立教養系大学における初年次情報リテラシー・リメディアル教育の狙いの整理

……………【会場：総合館・共北26】

- 企 画：樋口勝一（神戸海星女子学院大学現代人間学部）
 話題提供：佐伯 勇（甲南女子大学人間科学部）
 話題提供：落合史生（元帝塚山大学副学長）
 話題提供：平野真理子（神戸海星女子学院大学現代人間学部）
 話題提供：樋口勝一（神戸海星女子学院大学現代人間学部）
 指定討論：澤田端也（神戸海星女子学院大学現代人間学部）
 司 会：樋口勝一（神戸海星女子学院大学現代人間学部）

3月15日(金)

教養教育におけるコミュニケーション教育の充実に向けて……………【会場：総合館・共北27】

企 画：山地弘起（長崎大学大学教育機能開発センター）

話題提供：田中東子（十文字学園女子大学人間生活学部）

話題提供：Gehrtz 三隅友子（徳島大学国際センター）

話題提供：山地弘起（長崎大学大学教育機能開発センター）

指定討論：保崎則雄（早稲田大学人間科学学術院）

司 会：山地弘起（長崎大学大学教育機能開発センター）

学生が主体的に学び、考える授業の創り方？……………【会場：総合館・共北28】

ー大学コミュニティ全体のUDという発想ー

企 画：清水 亮（三重中京大学現代法経学部）

話題提供：上野寛子（明治学院大学教養教育センター）

話題提供：曾根健吾（東洋大学文学部）

話題提供：高橋 和（岡山大学文学部）

指定討論：橋本 勝（富山大学大学教育支援センター）

指定討論：川上忠重（法政大学理工学部・FD推進センター長）

司 会：清水 亮（三重中京大学現代法経学部）

大学教員のポートフォリオのこれから……………【会場：総合館・共北31】

企 画：栗田佳代子（東京大学大学総合教育研究センター）

話題提供：秦 敬治（愛媛大学教育企画室）

話題提供：竹元仁美（聖マリア学院大学）

話題提供：皆本晃弥（佐賀大学全学教育機構高等教育開発室）

話題提供：山内一祥（佐賀大学全学教育機構高等教育開発室）

話題提供：東田 卓（大阪府立大学高専）

話題提供：金田忠裕（大阪府立大学高専）

話題提供：本田知己（福井大学大学院工学研究科）

司 会：栗田佳代子（東京大学大学総合教育研究センター）

統計的手法を用いた対話型ワークショップ……………【会場：総合館・共北32】

ワークショップ開発：吉澤 剛（大阪大学）

ワークショップ開発：高橋真吾（早稲田大学）

ワークショップ開発：田原敬一郎（未来工学研究所）

企 画：奥本素子（総合研究大学院大学）

企 画：岩瀬峰代（総合研究大学院大学）

司 会：田原敬一郎（未来工学研究所）

京都大学におけるポートフォリオ情報環境戦略の開発と実装 ……………【会場：総合館・共北37】

企 画：梶田将司（京都大学情報環境機構）
話題提供：川井秀一（京都大学生存圏研究所）
話題提供：池田裕一（京都大学学際融合教育研究推進センター）
話題提供：惣脇 宏（京都大学学際融合教育研究推進センター）
話題提供：酒井博之（京都大学高等教育研究開発推進センター）
指定討論：飯吉 透（京都大学高等教育研究開発推進センター）
司 会：梶田将司（京都大学情報環境機構）

博士課程学生がすすめる<FD> ……………【会場：総合館・共北38】

企 画：森下真実（広島大学大学院教育学研究科）
話題提供：中居舞子（広島大学大学院教育学研究科）
話題提供：境愛一郎（広島大学大学院教育学研究科）
話題提供：黒木貴人（広島大学大学院教育学研究科）
話題提供：尾場友和（広島大学大学院教育学研究科）
話題提供：山口裕毅（広島大学大学院教育学研究科）
話題提供：森下真実（広島大学大学院教育学研究科）
話題提供：尾川満宏（日本学術振興会／広島大学大学院教育学研究科）
指定討論：樋口裕介（福岡教育大学教育学部）
指定討論：田口真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター）
司 会：尾川満宏（日本学術振興会／広島大学大学院教育学研究科）
司 会：杉田浩崇（広島大学大学院教育学研究科）

参加方法等について

◆**参加資格** 大学教育関係者、もしくは大学教育に関心のある方。

◆**参加費用** 発表論文集等の資料代として1,000円を当日受付にて申し受けます。

◆**参加申込の方法**

次のいずれかの方法で、2013年2月4日(月)17時までに、

1. 高等教育研究開発推進センターのHPの入力フォームから、オンラインで申し込む。
2. 22ページのFAX用フォームを使用し、FAXにて申し込む。

センターHP: <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp>

◆**情報交換会について**

初日(3月14日) 午後5時半より、百周年時計台記念館2階・国際交流ホールにて、講師の先生方を囲んで情報交換会を開催いたします(会費5,000円)。

こちらに合わせて、お申し込みをお待ちしております。

会費は当日、受付にてお支払いください。

◆**お問い合わせ**

京都大学学務部共通教育推進課管理掛

730forum@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

(注) メールを送る場合には、件名に「大学教育研究フォーラムについての問い合わせ」とお書きください。

あさがお(ASAGAO) MLのご案内

高等教育研究開発推進センターでは、当センターに関する最新の情報をお知らせするための『あさがお(ASAGAO) ML』を設けています。

このMLでは、「公開研究会」「大学教育研究フォーラム」などのイベント開催や他の高等教育関連機関のシンポジウム、ワークショップの開催などの情報を提供しており、案内を自由に投稿することもできます。

＊下記のURLから登録できます。

<http://kyoto-u.s-coop.net/asagao/>

FAX: 075-753-6691 宛先: 京都大学高等教育研究開発推進センター

第19回大学教育研究フォーラム 参加申込書 (FAX用)

氏 名	
フリガナ	
所 属	
職 名	
メールアドレス	<p>このメールアドレスを『あさがお (ASAGAO) ML』に登録することを</p> <p>希望する 希望しない 登録済み (○をつけてください)</p>
<p>情報交換会</p> <p>3月14日(木) 17時半～ 会費 5,000円</p>	<p>参加する 参加しない (○をつけてください)</p> <p>(注) キャンセルの方は、2013年3月7日(木) 17時までにご連絡下さい。申し込みをされて当日お越しにならない場合には、後日請求をさせていただきます。あらかじめご了承下さい。</p>
備 考	

会場地図



主な交通機関

地下鉄烏丸線・今出川駅より

市バス 203 系統「銀閣寺道・錦林車庫」行「百万遍」下車
市バス 201 系統「百万遍・祇園」行「京大正門前」下車

京阪・出町柳駅より

市バス 201 系統「祇園・みふ」行「京大正門前」下車
又は、東へ徒歩約 20 分

阪急・河原町駅、京阪・祇園四条駅より

市バス 31 系統「熊野・岩倉」行「京大正門前」下車
市バス 201 系統「百万遍・祇園」行「京大正門前」下車

IV-4. FD ネットワーク代表者会議（JFDN）

IV-4-1. 第5回会議の概要

平成24年9月5日（水）、FD ネットワーク代表者会議（JFDN）の第5回会議が、京都大学 芝蘭会館別館研修室にて開催された。北は北海道から、南は九州まで、全国15のFD ネットワークの代表が参集し、それぞれの活動の現状と課題について報告し合った。その後、安部田康弘氏（文部科学省 高等教育局 大学振興課 学務係長）よりコメントをいただき、それを皮切りに、本年度の課題として取り上げたFD ネットワークの評価、FD そのものに関わる評価について熱心な議論が続いた。FD ネットワークにとっては、予算確保の難しさなど、前途多難な時代ではあるが、各ネットワークの取組の充実、また、相互の情報交換の場をもつことを通して、次の段階へのステップアップの可能性を感じさせる勢いも感じることであった。

1. 参加者

北海道地区 FD・SD 推進協議会

山田 邦雅（北海道大学 高等教育推進機構 准教授）

いわて高等教育コンソーシアム

佐藤 洋一（岩手医科大学 医学部 教授）

江本 理恵（岩手大学 大学教育総合センター 准教授）

国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点

杉本 和弘（東北大学 高等教育開発推進センター 准教授）

関内 隆（東北大学 高等教育開発推進センター 副センター長／教授）

東日本地区大学間 FD ネットワーク・つばさ

小田 隆治（山形大学 高等教育研究企画センター 教授）

障害者高等教育拠点

石田 久之（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター教授）

看護学教育研究共同利用拠点

北池 正（千葉大学大学院 看護学研究科附属看護実践研究指導センター センター長／教授）

遠藤 和子（千葉大学大学院 看護学研究科附属看護実践研究指導センター 特任准教授）

鈴木 友子（千葉大学大学院 看護学研究科附属看護実践研究指導センター 特任助教）

文部科学省

安部田 康弘（文部科学省 高等教育局 大学振興課 大学改革推進室 学務係長）

大学コンソーシアム石川

林 透（北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンター 特任准教授）

青野 透（金沢大学 大学教育開発・支援センター 教授）

福井県学習コミュニティ推進協議会（F レックス）

山川 修（福井県立大学 学術教養センター 教授・F レックス会長）

内藤 徹（仁愛女子短期大学 教授・F レックス FD チームリーダー）

FD・SD 教育改善支援拠点

夏目 達也（名古屋大学 高等教育研究センター 教授）

医学教育共同利用拠点

鈴木 康之（岐阜大学 医学教育開発研究センター センター長／教授）

全国私立大学 FD 連携フォーラム

沖 裕貴（立命館大学 教育開発推進機構 教育開発支援センター長／教授）

大学コンソーシアム京都

徳永 寿老（大学コンソーシアム京都 高等教育研究推進事業部 事務局長）

山本 美奈（大学コンソーシアム京都 高等教育研究推進事業部 次長）

川面 きよ（大学コンソーシアム京都 専門研究員）

山陰地区 FD 連絡協議会

松田 岳士（島根大学 教育開発センター 准教授）

九州地域大学教育改善 FD・SD ネットワーク：Q-Links

小貫 有紀子（九州大学 教育改革企画支援室 特任助教）

相互研修型 FD 共同利用拠点

大塚 雄作（京都大学 高等教育研究開発推進センター センター長／教授）

松下 佳代（同 教授）

飯吉 透（同 教授）

溝上 慎一（同 准教授）

田口 真奈（同 准教授）

酒井 博之（同 特定准教授）

半澤 礼之（同 特定助教）

田川 千尋（同 特定助教）

高橋 雄介（同 特定助教）

坂本 尚志（同 特定助教）



FD ネットワーク代表者会議（JFDN）第5回会議 集合写真

2. プログラム

時間	プログラム	内容
10:30	受付開始	芝蘭会館 別館研修室
11:00 ～ 11:15	趣旨説明	趣旨説明：大塚 雄作 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授)
11:15 ～ 12:30	FDネットワークおよび教育関係共同利用拠点の現状と課題Ⅰ	〔発表 各10分〕 1. 山田 邦雅 (北海道大学) 「北海道地区FD・SD推進協議会の活動」 2. 佐藤 洋一 (岩手医科大学) 「いわて高等教育コンソーシアムにおける大学間連携FDネットワーク」 3. 杉本 和弘 (東北大学) 「東北大学における教育関係共同利用拠点の活動と課題」 4. 小田 隆治 (山形大学) 「FDネットワーク“つばさ”現状・課題・評価」 5. 石田 久之 (筑波技術大学) 「障害者高等教育拠点 ―聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスを保障する教育支援ハブの構築―」 6. 北池 正 (千葉大学) 「看護学教育研究共同利用拠点の現状と課題」
12:30 ～ 13:30	フリーディスカッション・昼食	研修室にて弁当昼食の予定
13:30 ～ 15:30	FDネットワークおよび教育関係共同利用拠点の現状と課題Ⅱ	〔発表 各10分〕 7. 林 透 (北陸先端科学技術大学院大学) 「大学コンソーシアム石川(UCI) FD・SD活動の展開」 8. 山川 修 (福井県立大学) 「福井県学習コミュニティ推進協議会 (フレックス)」 9. 夏目 達也 (名古屋大学) 「名古屋大学FD・SD教育改善支援拠点の活動と課題」

		<p>10. 鈴木 康之（岐阜大学） 「岐阜大学 医学教育開発研究センター Medical Education Development Center (MEDC)」</p> <p>（休憩）</p> <p>11. 沖 裕貴（立命館大学） 「全国私立大学 FD連携フォーラムの取組」</p> <p>12. 徳永 寿老（大学コンソーシアム京都） 「大学コンソーシアム京都のFD活動 現状と課題、評価について～ポストGPおよび第4ステージに向けて～」</p> <p>13. 大塚 雄作（京都大学） 「FDネットワークとしての関西地区FD連絡協議会の5年」</p> <p>14. 松田 岳士（島根大学） 「山陰地区FD連絡協議会 2012報告―成果を位置づける―」</p> <p>15. 小貫 有紀子（九州大学） 「かたらしてえQ-Links 2012」</p>
15:45 ～ 16:45	ディスカッション	<p>コメント：安部田 康弘（文部科学省）</p> <p>司会：大塚 雄作（京都大学）</p>
17:00	記念撮影・解散	

（大塚 雄作、高橋 雄介）

IV-4-2. 第5回FDネットワーク代表者会議を終えて

2012年9月5日(水) 11:00~17:00、京都大学芝蘭会館別館(国際交流会館)2階研修室1において、プログラムに示されたように、全国から15のFDネットワーク、教育関係共同利用拠点の代表者が集まり、第5回FDネットワーク代表者会議(Japan Faculty Development Network, JFDN)が開催された。昨年度も感じたことであるが、全国のFDネットワークがどのようなことに取り組み、どのような課題をもっているのかということを経験するだけでも、お互いに自らのネットワークを次につなげるとてもよい刺激を与え合う場になっているということが感じられたのは私だけだろうか。それはまた、それぞれのネットワークの取組が一年一年充実してきている証左でもあろう。そして、そのような刺激を与え合う場は、我々センターのFD理念でもある「相互研修型FD」の一つの典型的な形態にもなっているということを実感できるJFDNであった。

また、今年は、それぞれの取組をどのような形で評価してきているかという点についての情報交換を意図的に取り入れた。それぞれのFDネットワークから、さまざまなレベルでいろいろな評価の工夫が試みられていることが共有され、また、その一部には我々のセンターでも大いに参考になるものも含まれていた。

それらのFDネットワークの報告を受けて、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室の安部田康弘学務係長より以下のような趣旨のコメントをいただいた。

- ① まず、FDの成果をどう捉えるかという点で、FD実施組織側が自分たちの活動がどのくらいインパクトを与えているのか、アカウンタビリティを示す視点と、また、FD活動を経験した教員たちの授業がどう変わったのかという視点が考えられる。
- ② 次に、発表された中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』とFDの関係という点について、往々にして新しい答申に目が行ってしまい、FDが軽視されてしまうことがあるが、今回の場合は、主体的な学びを確立するための授業のあり方という点で、FDと密接な関係がある。
- ③ FDの評価という点について、マネジメント部門がIRの活用の仕方を十分に把握できていない印象がある。FDの成果もIRなども含めて測定が行われたとして、それをどう活用するのか、マネジメント部分のIRとFD等の理解を深める工夫が求められる。

以上、FDの成果を捉えるレベルの問題、答申とFDとの関連性とFD活性化の課題、そして、FD評価における評価リテラシーに関わる育成の問題など、重要な課題が指摘された。

それを受けて、FD評価、FDネットワークの評価に関わって、熱心な質疑応答が行われた。主な論点は以下の通りであった。

- ① FDやFDネットワークを評価する際、例えば、FDネットワーク自体も多重に関わってくることになるが、どれがどういう効果をもっているかを識別することが難しくなっているのではないか？
- ② FDやFDネットワークをどう捉えるかによってFDの評価のあり方も異なってくる。例え

ば、各大学のディプロマポリシーに即して FD の効果を評価するというのが一つの行き方であり、それに FD ネットワークのみならず、部局ごとの教育活動、日常の相互研修型 FD 活動なども含めて、どうそれが達成されているかが重要で、それぞれの寄与がどの程度であるかは特に問題にする必要はないのではないか。

- ③ FD や FD 活動も多岐にわたり、ネットワーク化も進んでいくと、パソコン通信からインターネットへの発展をアナロジーとして考えてみても、どれが直接的に影響を及ぼしているかを分離するのは難しく、間接的な寄与でしかみていくことはできないのではないか。
- ④ FD ネットワークの効果と、個別の大学の IR や FD 成果の評価は、切り分けて考えていく必要があるのではないか。
- ⑤ 授業改善に関しては、ストーリー的な情報で評価していくということもあり得るのではないか。ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーなどとの関連はきちんとみていく必要があると思われる。マネジメント側の評価リテラシーの問題は、IR などのデータに関するやりとりをするなかで、結果的にパフォーマンスを上げるということがあり得るのではないか。
- ⑥ FD ネットワーク、各大学の FD、学部、教員、学生といったように、多層に分かれているが、教育の成果という点で学生に対して責任を負うべきなのは学部であり、そこを改めて共有する必要がある。そこを抜きにすると、評価も FD 担当者のなかで堂々巡りになりかねないが、ただ、経済界など外側に向けて評価をすることが FD に関する的確な評価になるとも言えない部分があり、ある種自己完結的な評価の蓄積も大切だろうと思われる。
- ⑦ 答申はどうも現実には即しておらず、センターは、答申と現実の間を埋める役割を担うことになる。その意味で、センターが学部の存在をしっかりと把握していることが肝要である。
- ⑧ 授業改善の評価は、授業アンケートの事前・事後の差で必ずしも測定するのは容易でないということもあり、アンケートのみならず、教務データは全数の情報が含まれていることもあって、教務データの分析、また、それとアンケートのリンクなどを、情報保護などの制約を超えて利用できるように働きかけていくべきである。

以上のように、FD、FD ネットワークに関わる評価のあり方について質疑が行われ、FD 評価、FD ネットワークの評価のあり方は、上記のようにさまざまな論点があり、今後さらに各ネットワークにおいても、お互いの情報交換を通じて精錬させていく必要があることが共有された。

FD ネットワークの試みは、そのコアになる大学を中心に多くのリソースを要することは、FD ネットワークがそれだけ成熟してきている現在であっても、また、今後であっても、間違いのないところであり、それに関わる支援を、文科省はじめ、社会に対して求めていかなければならない。しかし、とりわけ昨年の大震災以降の逼迫した国家財政の中で、この FD 義務化時代にあっても、FD ネットワーク等の活動に十分な予算が割り振られることはなくなっていくであろうことは想像に難くない。その厳しい時代背景にあっても、FD ネットワークに対する社会からの適切な支援を得ていくためにも、FD ネットワークの取組の成果を共同して社会にアピールしていくことは、JFDN の重大な使命と既になっているということが、今回の JFDN 会合で新たに認識させられたことの一つである。

現に、この JFDN 会合からほぼ 10 日後、私どもの高等教育研究開発推進センターが申請していた特別経費としての新プロジェクトが、文科省において次年度の概算要求に盛り込まれなくなったことが判明した。この JFDN 自体も、特別経費『大学教員教育研修のための相互研修型 FD 拠点形成（2008～2012）』により立ち上げることができたのであるのが、その経費に依拠

して、関西地区 FD 連絡協議会などの地域 FD ネットワークも運営してきていただけない、突然、奈落の底に突き落とされたという思いが私どもセンターを覆いつくしている。もちろん、そういう状態になっても、何とか FD ネットワークを維持させていかねばならないという思いはあるし、また、そういう状況の中でこそ、FD ネットワークの運営に関わる新たな側面を見出していくこともできるという前向きの姿勢をもたねばならないと自らに言い聞かせてもいるが、それこそ先行きの見えない不安は拭いきれずにいる。それだけに、今まで、こうした FD ネットワークの意義を、社会に対してしっかりアピールできてきていたのかどうか、その点の反省も含めて、きちんとこれまでの FD ネットワークの活動を総括しておく必要が生じてきたと言えるであろう。

実は、この年の今頃に、センター自体がこのような状況になるかもしれないことは、5 年計画のプロジェクトが終了する年度にさしかかるということもあって、昨年の時点で当然予想されたことであり、正直、それが現実になるとはそのときは切実に感じていたわけではないのであるが、そのような逼迫した財政下における FD ネットワークの今後の方向性について、昨年の「JFDN 後記」において、私なりに思いつくままに取り上げている。その考え方は、今も大きく変わることはないので、ここに再掲してさらに強調しておくことにしたい。

FD ネットワークの第一の意義として、そこで取り上げたことは、核となる FD 人材を確保できるということである。各大学レベルでは、FD の担当者は、多くの場合、委員会方式で行われており、数年の単位で代わっていく。それによって、FD の経験者の輪を広げていくことはできるのであるが、FD 活動を深めていくことは難しい。その点で、5 回を迎える JFDN 会合に集まるメンバーは、その半数程度は継続して来られているのを見てもわかるように、FD ネットワークは FD を掘り下げるコアメンバーを育てることにになり、その存在が、各大学の FD を今後もサポートし続けていき得るのである。FD 自体、十年一日のごとく、常に、その形骸化が問題とされてきているが、それを乗り越えることは各大学単位で達成できることではなく、そうしたコアメンバーが FD ネットワークに存在することが有効となり得るのであり、そのためにも、コアメンバーを育てる FD ネットワークの充実が求められることになるのである。この点は、今後とも、FD ネットワークの重要な役割として位置づけられていくであろう。

次に、FD に関する Web 等の ICT 活用による効率化の問題が挙げられている。その基盤として、京大センター開発の MOST (Mutual Online System for Teaching & Learning) などが十全に機能を発揮するためには、多くの教員、あるいは、教員集団が、FD や教育改善への関心を共有しているという前提が必要となる。そのためにも、現在、MOST フェローと呼ばれる教員集団を全国からの公募によって構成し、そのコミュニティの下で、それぞれの教育改善に MOST を活用する実践事例を積み重ねているところである。また、多くの授業の概要をスナップショットという形で公開する形で、授業事例の蓄積も進んでおり、そういった Web 等の情報源に自らアクセスし、継続的に活用してくれる素地作りに努めているところである。しかし、MOST などのシステムを維持していくためには、やはりそれなりの人的、予算的リソースの準備が必要となる。そのシステムが断ち切れてしまえば、それまでに構築したシステムへの経費の無駄遣いということにもなるわけで、それこそ予算の効率的な活用という意味においても、そういった部分への継続的支援について社会的なコンセンサスを得ていくということは、今後も引き続き重要なポイントになるであろう。

予算的な面での維持という点に関しては、例えば、大学コンソーシアム京都の活動が全国的にも目立つのは、加盟大学が相当のリソースを拠出し合って、専任の職員がコンソーシアムの

活動に専念できるということがあると思われ、また、四国の大学連合などでも、各大学がある規定に従って、人的リソース、予算的リソースを拠出し合うという方策をとっているということであり、それらに倣って、FD ネットワークへの参加大学からそれ相応のリソース分担をお願いするということがまず考えられる。

それに対して、関西地区 FD 連絡協議会では、参加校は毎年 2 万円の会費を拠出すると規定され、その範囲で継続してきているものの、代表幹事校としての京大のサポートが不可欠であり、そのサポートは我々のセンターの特別経費プロジェクト『大学教員教育研修のための相互研修型 FD 拠点形成』による、予算的、人的リソース（特定教員、事務補佐員等）の存在が欠かせないという状況にあった。しかし、特別経費が切られる昨今、おそらくは、その程度の会費で活動を継続していくことは厳しくなることは目に見えており、何らかの形での予算的・人的バックアップの継続をどこかに求めていかねばならない状況が眼前に突きつけられている。その意味で、ここ数年間が、FD ネットワークの体制作りにとっては試金石とも言えるべき時期であり、そこでの試行錯誤の積み重ねによって、一つのエポックがもたらされることになるのかもしれない。

財政面ではますます厳しくなる情勢の下、こうした諸々の動きを支えていくためには、まずは社会に対して、FD ネットワーク自体の成果をわかりやすく示していくこと、引いては、各大学の FD の状況、FD の成果をわかりやすく示していくことが求められることになるだろう。FD 評価の課題は、今回も熱心に議論が展開されたところであるが、さらに、必要に応じて、今後も議論も積み重ねていく必要があることは、今回の JFDN で再確認できたことである。

第 5 回を迎えた今回もまた、ほぼすべての FD ネットワークの代表者が一堂に会する機会を持てたことは、それを担当してきた者にとっての望外の喜びである。次年度は、特別経費が切れたことにより、JFDN の参加は、各 FD ネットワークに参加旅費等の負担をお願いせざるを得ない状況にあるが、それでもこの貴重な会合の継続と発展を期して、次年度もまた企画・実行を仕掛けていかねばと考えている。そうした苦しい状況のなか、次年度の積極的な参加の心よりのお願いも込めて、本 JFDN 後記の最後に、ご多忙のなかを遠方より参集して下さった FD ネットワークの代表者の方々に記して厚く感謝の意を表しておきたい。また、JFDN の準備に当たって、細々した点で献身的に動いてくれた、京都大学高等教育研究開発推進センターの若手スタッフ及び補佐員の方々に、記して感謝の意を表しておきたい。

(大塚 雄作)

北海道地区FD・SD推進協議会の活動 (平成23年度)

北海道大学 高等教育推進機構
山田 邦雅

北海道地区FD・SD推進協議会

【概要】

北海道地区FD・SD推進協議会は北海道地区の大学等が連携・協同し、FD・SD及びTADの推進に係る情報の交換・共有やプログラムの共同開発を目的とするネットワークです。現在、北海道内にある53校の大学・短期大学・高等専門学校が加盟しています。

加盟校: 53校(高専を含む)

会費: 無し

総会

- ・ 毎年1回
- ・ 場所: 北大
- ・ 参加人数: 40人(23校)

午前

①開催挨拶

北大生涯学習計画研究部門 木村 純

②特別講演

「SPOD及び教職員能力開発拠点におけるSDの実践例」

愛媛大学 教育学生支援部 次長 米澤 慎二

③議事

- ・ 監事校の再任について
- ・ 平成23年度活動報告
- ・ 平成24年度活動計画
- ・ 北海道地区大学職員研究実態調査の実施について



テーマ別セッション

午後

テーマ1: SDにどう取り組むか

テーマ2: 学生による授業評価を授業改善にどう役立てるか

テーマ3: 教員の教育評価について

- ・ 時間: 2時間
- ・ 各テーマ10名程度(司会1名)
- ・ 現状報告でOK(失敗例もOK)
- ・ 取組無しもOK(情報収集目的での参加OK)



Webを通してFD・SDの共有

各大学で開催されるFD・SD関連の催しを共有
平成23年度

- ・ 3月8日 【北星学園大学】 FD研修会「ディプロマ・ポリシーに基づく体系的な教育改善について」
- ・ 3月2日 【北海道情報大学】 FDフォーラム「教職員と学生の協働で変える大学の未来」
- ・ 11月30日 【北海道大学】 高等教育フォーラム「研究大学における教育の質改善法〜カリキュラム改革とFD〜」、「台湾の高等教育の現状と改善について」のご案内
- ・ 12月8日 【室蘭工業大学】 FD講演会「ビジネスパーソンに求められるコミュニケーション能力〜学生の「話す力」「聴く力」「配慮する力」を育てる〜」
- ・ 2月11日 【札幌大学】 第1回0.54Time!〜学生交流会 in 札大〜開催について
- ・ 12月9-10日 【北海道大学】 第2回北海道大学次世代教育ワークショップ
- ・ 11月21日 【北海道大学】 高等教育フォーラム「OISTの挑戦・真に国際的、学際的な大学院を目指して」
- ・ 11月9-10日 【北海道大学】 平成23年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」
- ・ 11月11-12日 【北海道大学】 第19回北海道大学教育ワークショップ
- ・ 10月19日 【北海道大学】 平成23年度北海道地区大学FD・SD推進協議会総会について
- ・ 10月19日 【札幌大学】 FD講演会「愛媛大学のFDの取り組みについて」(仮題)
- ・ 10月15日 【北翔大学】 FD講演会「札幌大学における学生FDの取り組みについて」
- ・ 7月30日 【旭川大学】 FD研修会「大学における教育評価について」
- ・ 7月27-28日 【北海道大学】 大学院生のための大学教員養成講座
- ・ 6月29日 【弘前大学】 FD講演会「院生講師(GSI)制度の執行」
- ・ 6月30日 【室蘭工業大学】 FD講演会「学生のメンタルヘルスへの対応法について」
- ・ 6月3-4日 【北海道大学】 第18回北海道大学教育ワークショップ
- ・ 4月6日 【北海道大学】 平成23年度北海道大学全学教育TA研修会

平成24年度の活動計画

- ・ 初任者教員向けワークショップの開催
- ・ 中堅教員向けワークショップ「大学教員の業務と教育改善」の開催
- ・ SD研修大学セミナーの開催
- ・ SDに係る共同企画に関する研究会の開催
- ・ 大学職員研修実態調査の実施

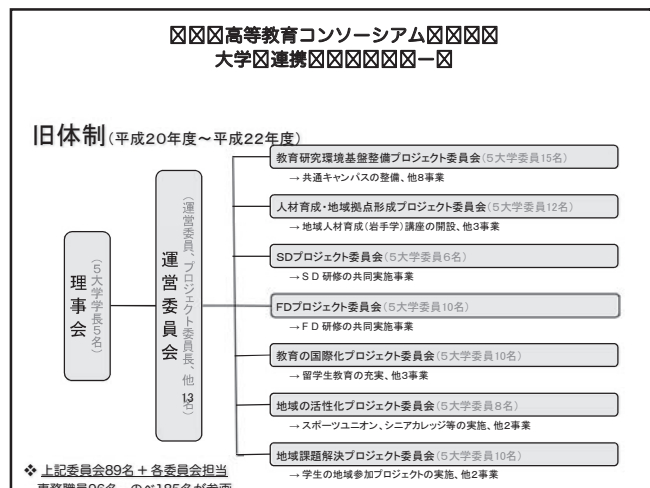
岩手大学 岩手県立大学 岩手医科大学 富士大学 盛岡大学

いわて高等教育コンソーシアムにおける 大学間連携FDネットワーク

佐藤洋一
岩手高等教育コンソーシアムFD・SD連携推進委員会委員長
岩手医科大学解剖学講座細胞生物学分野

いわて高等教育
コンソーシアム
Iwate Consortium of Higher Education

平成24年9月5日



教育力の向上1 FDの共同開催

- 岩手医科大学主催の医学教育ワークショップ「カリキュラムプランニング」[H21.7.17-18]へ連携校から参加: 医大 ← 岩大 & 県大
- 岩手大学主催のFD合宿研修会「学士力の育成と問題解決型授業の導入」[H21.8.20-21]へ参加: 岩大 ← 医大 & 盛大
- FD講演会 & 勉強会: 国立教育政策研究所 川島啓二氏の講演後に勉強(意見交換)会を実施 [H21.12.18]
- FD研究会: 京都大学田中毎実氏による話題提供とFDに関する意見交換を実施。[H22.3.5]
- 合同FD合宿研修会「学生とともに考える『大学教育』」[H22.8.26-27]
- FDキャラバン: 岩手県立大学FDワークショップへの参画
その他

教育力の向上1 FDの共同開催

●大学の背景が様々→おこなっているFD・SDも様々であるが、
実際はどういった違いがあるか、各大学の教職員は認識してい
なかつた

What is the target of FD?

◆ FD/SDの意義: 各大学で力点のおかれ方が異なっていた

A) 個々の教員の能力向上
授業・実習の工夫
コース設計と評価

B) 教育システム構築・運営の改善: 教育機関の管理運営能力の向上
学生のエンドポイント設定
教育コースの改廃
教育におけるPDCAサイクル
卒前教育とインターンシップの連携
教育・研究に必要な資金調達と功利的運用

**Action
Operation**

**Tactics
Strategy**

教育力の向上1 FDの共同開催

●そもそも5大学のミッションが異なっているので、FD・SDもそれに
あわせて、大学ごとに異なっていた。

- Tangible Endpoint: Getting the License (Obligation or Ultimate Aim)
Medicine, Dentistry, Pharmaceuticals, Nursing, Nutrition
e.g. World Federation for Medical Education
- Intangible Endpoint
Economics, Education, Agriculture, Technology (Engineering), Information Science

教育力の向上2 特色ある講義の設定

iHECの教員資産は、補完関係にある

大学のH22年度開講科目の中から
特色ある講義として35科目を選定し、
他大学の聴講を促す

→リベラルアーツの充実を企図
to improve and enhance liberal arts courses

教育力の向上3

学生の地域参加型プロジェクト支援

以下の5件を採択し、支援した

- 岩手医科大学医学部(3年他20名)「地域医療の実態調査 ～医療系大学の学生の視点から～」
- 岩手県立大学社会福祉学部(4年他5名)「STEP(ステップ)」(発達障害児への支援活動)
- 岩手県立大学総合政策学部(4年他5名)「大学生の参加による観光資源を活用した地域経済活性化のための研究」←IBCニュースエコー「岩手をほっとけない！」コーナーで放映 [H21.10.22]
- 岩手県立大学社会福祉学部(3年他6名)「光るどろだんご作り指導者養成講座」(高齢者と保育者対象)
- 岩手県立大学社会福祉学部(4年他5名)「地域勉強会 ～ホームレス支援ボランティアから感じたもの～」

教育力の向上3

学生の地域参加型プロジェクト支援

5大学学長および教職員の前で成果発表

学生の発想とエネルギーに教職員は圧倒された

自発性こそ、活動の源！

その場で、学長に「継続的支援」を陳情

反省点

- 熱心な教員のオルガナイズが無いと、機能しない
- 大学間をまたいだプロジェクトは、自然発生的には生まれない
- 補助金終了後の支援体制に不安

いわて高等教育コンソーシアムにおける
大学間連携FDネットワーク

新・実施体制(2011年度～)

- **基盤整備は補助金でおこなった
Infrastructure: Grant from Gov.**
- **事業継続に必要な資金は各大学
持ち寄りで
Essential operations: financial
support from each Univ.**

3.11

長時間続いた揺れ long earthquake

机から叩き落ちた顕微鏡 jumping microscope

停電 真っ暗な中に灯る非常用電源に群がる学生、住民
blackout and emergency electric power

静まりかえった街 silent city

コンビニやスーパーで整然と並ぶ住民 peoples in order

ラジオで想像するしかなかった津波 radio news of Tsunami

**電源復旧とともに画面で見た被害の甚大
さに唖然 terrible scene in TV**

三陸復興

復興が進むところは...

**「結い」が機能し
ているところ**

Mutual cooperation in the shortage

人手不足、物不足の中でおこなわれる、小集落における共同作業制度
相互扶助の精神の上に成り立っている

三陸復興

高等教育機関ができることは何か？

1) 被災地の住民の支援

- 医療 医学部・歯学部・薬学部
- メンタルヘルス 看護学部
- 食事 栄養学部
- 教育 教育学部、文学部

2) 地域を担う中核的人材育成事業

3) 産学連携による起業・地場産業育成

経済学部、農学部、工学部

各大学は発災後、すぐさま数々の取り組みをスタート

三陸復興

高等教育機関ができることは何か？

- ただし、コンソとしてはすぐに対応できなかった。
- 5大学学長宣言(6月15日)
 - 当面の活動
 - 高校生への支援
 - 沿岸復興:学生ボランティアや調査研究
 - 復興を担う人材育成:教育プログラムの開発
 - 展望
 - 「地域の知の拠点」形成
 - 「復興を担う人材育成」の推進

各大学は発災後、すぐさま数々の取り組みをスタート

三陸復興

高等教育機関ができることは何か？

- 平成23年度文部科学省「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」に採択
- 事業名：いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業(2011-2017)
 - 学校・応急仮設住宅におけるコミュニティ形成と子ども支援事業(いわてGINGA-NET)
 - 地域を担う中核的人材育成事業(いわて高等教育コンソーシアム)

三陸復興

地域復興を担う中核的人材育成プラン

大学進学支援 to facilitate admission rate

1. テレビ会議システムを活用した沿岸地域の高校生への進学案内
2. 大学生ボランティアによる沿岸地域の高校生への学習支援
3. 被災地の中高生に向けた進学相談、大学見学

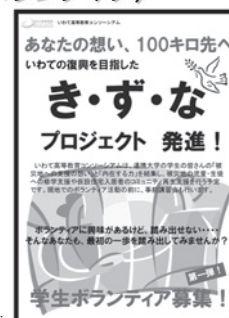
三陸復興

地域復興を担う中核的人材育成プラン

きずなプロジェクト(学生ボランティア)

地域課題解決プロジェクトのテーマを「震災復興」として公募

- * 登録者数
 - 岩手大51、県立大46、医科大2、富士大45、盛岡大16、計160名
- * 事前研修:12月10日&11日
 - 岩手山青少年交流の家:97名参加
- * ボランティア活動:12月17日&18日
 - 釜石:43名、45名
 - 宮古:14名、8名
- * ボランティア活動:1月8日&9日
 - 陸前高田:32名、40名



三陸復興

地域復興を担う中核的人材育成プラン

きずなプロジェクト(学生ボランティア)

大学生ボランティアによる沿岸地域高校生への学習支援

- 釜石市教育センター:NPO法人キッズドア主催「高校進学準備ゼミ」(1/22~3/4)
- [大槌町上町ふれあいセンター:NPO法人カタリバ主催「コラボスクール大槌臨学舎」]
 - 1月22日:釜石へ7名(岩大4、県大2、盛大1)
 - 1月29日:釜石へ4名(岩大4)



三陸復興

復興へ向けてのコンソーシアムの活動

まずは、教育支援と人材育成 被災地は

学生にとっては、最良のインターンシップの場

教職員にとっては、専門知識・技能の実践の場

「助けてあげる」ということではなく、「そこで育てて頂く」という姿勢が求められるであろう。

復興事業は一方的支援ではなく、共同作業。

まさしく「結い」である！

三陸復興

FDネットワーク代表者会議
2012年9月5日(水) @ 京都大学・芝蘭会館別館

東北大学における 教育関係共同利用拠点の 活動と課題

杉本 和弘
東北大学高等教育開発推進センター

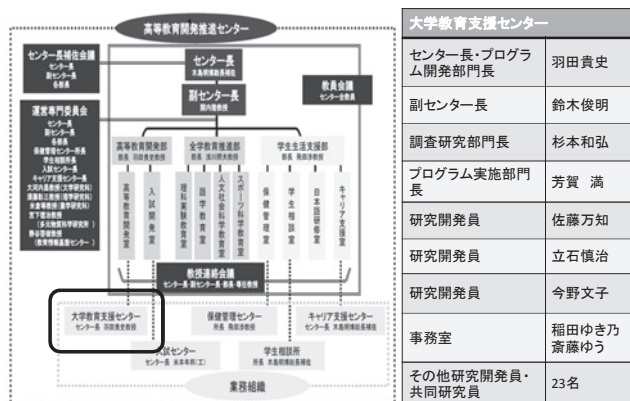


教育関係共同利用拠点 「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」

- 2010年3月活動開始
- 全国の国公立大学における組織的な教育改善・向上に寄与
- キャリアステージに対応した専門性開発プログラム(PDP)の開発
- 海外大学(米加豪)との連携を通してプログラムを開発・提供

ゾーン	カテゴリー
高等教育のリテラシー形成関連 コード:L(Literacy)	高等教育論 コード:L-01
	大学教育論 コード:L-02
	教育内容・カリキュラム論 コード:L-03
	教育技術論 コード:L-04
専門教育での指導力形成関連(各専門分野) コード:S(Specialty)	学習指導法 コード:S-01
	実務指導法 コード:S-02
	研究指導法 コード:S-03
学生支援力形成関連 コード:W(Health&Wellfare)	学生論 コード:W-01
	学生相談 コード:W-02
	キャリア教育 コード:W-03
	健康・教育 コード:W-04
マネジメント力形成関連 コード:M(Management)	組織運営論 コード:M-01
	大学人材開発論 コード:M-02
	教育マネジメント コード:M-03

実施体制



平成23年度PDPの取組内容(1)

- PDプログラムの開発と提供
 - PDプログラム構造の見直し
 - 特色ある教養教育内容開発: 5研究科・部局で9科目を開発
 - 部局プロフェッショナル・ディベロップメント開発: 4部局のPDプログラム開発
 - 52のセミナー・ワークショップを企画・開催
 - 動画化の推進
 - PDプログラムへの参加者総数: 1,563名

平成23年度PDPの取組内容(2)

■ キャリアステージに応じたプログラムの開発

① 大学教員準備プログラム(PFFP)

- 東北大学博士課程後期以上の大学院生、新任教員対象。大学教育の基礎を学び、UCバーレーもしくはメルボルン大学で研修。
- PFFPに関する研究会の開催: 情報収集と議論(H23年7月2日)
- 18名参加(新任教員3名+院生・ポスドク15名)
- オリエンテーション、授業基礎論、英語で授業、マイクロティーチング、米豪の高等教育、海外集中コース、報告会(H23年11月~H24年3月)

平成23年度PDPの取組内容(3)

② 大学教育マネジメント人材育成プログラム(EMLP)

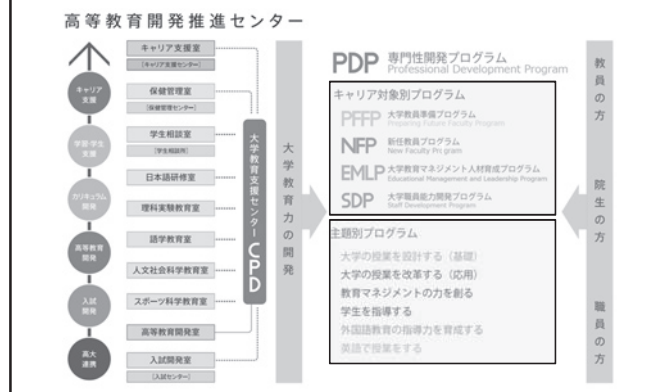
- 各機関レベルで教育改革・改善を担うマネジメント人材を育成。クイーンズ大学で研修。
- プログラム内容等に関する打合せ(H24年5月、クイーンズ大学)
- 4つのステップ(H23年9月~H24年3月)
- 学外者7名を含む11名参加。



③ 大学職員能力開発プログラム(SDP)

- 大学職員の教育企画力や学習支援力を開発・育成。H24年2月に「教育企画力」セミナーを開催。

平成24年度PDPの全体像(1)



平成24年度PDPの全体像(2)

■キャリア別プログラム:



■主題別プログラム: 14セミナー・ワークショップ

■単独セミナー、動画配信

他大学との連携推進(平成24年度)

■豪州首相日本対象教育支援プログラム

- 豪州大学調査の実施(H24年6月)
- 東北大学国際教育院(IIE)との共催セミナー、福島大学・山形大学でのセミナー開催(H24年9月10~12日)



■愛媛大学東北支援プログラム

- 大学職員のための業務改善・企画力養成講座(H24年11月)

調査研究の推進と成果の発信

■プログラム開発を支える調査研究

- 大学教員調査、大学教授資格調査
- 初修外国語学習調査
- 国内外PPFP調査
- 大学管理職調査
- 教育マネジメント・IR調査
- アカデミック・インテグリティ調査



■研究成果の還元・発信

- センター紀要、高等教育ライブラリ、PDブックレット等の刊行

今後の課題

■学内外における認知と部局との協働

■開発プログラムの成果検証と内容充実

- プログラムの実施後、参加者アンケートを実施
- 関係者による外部評価の実施
- 評価結果に基づいて、プログラムの内容(構成要素)充実

■履修証明プログラムへの展開

FDネットワーク代表者会議

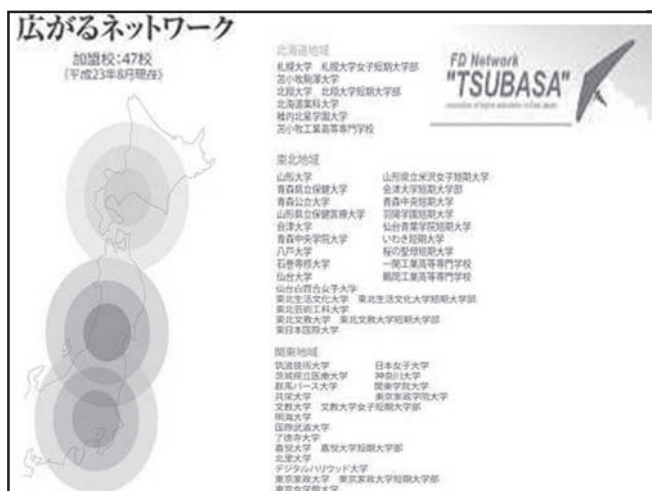
FDネットワーク“つばさ” 現状・課題・評価

2012年9月5日

山形大学 教育開発連携支援センター
小田隆治

「FDネットワーク“つばさ”」

- ◆北海道・東北・関東の主に私立の大学・短大そして高専を対象。
- ◆2008年(平成20年)3月に設立し、4年半が経過する。
- ◆当初、参加校は34校でスタートし、その後順調に増加し、現在49校となる。



「FDネットワーク“つばさ”」の活動

- 6月11日 第7回 FD協議会
- 前・後期 統一フォーマットによる「授業評価アンケート」
- 8月24日 FDワークショップ
- 8月29～30日、30～31日 FD合宿セミナー
- 9月3日 学生FD会議
- 9月9日 大学間連携SD研修会
- 2月11日 第8回 FD協議会
- 2月末日 「研究年報」の発行
- 通年 「ホームページ」の作成と公開

平成22年度「FDネットワーク“つばさ”」の活動(1) 「FD協議会」の開催

- 第7回FD協議会
 - ・平成23年6月11日(土)
 - ・山形大学
 - ・29校、47名参加
- 第6回FD協議会
 - ・平成24年2月11日(土)
 - ・東京家政学院大学
 - ・25校、57名参加

「第7回FD協議会」の第二部: FDワークショップ「震災時の学生支援について」

- 6班でグループディスカッション、全体発表
- 課題: ①震災時に自分はどうしていたか
②震災時の組織的な対応はどうあったか
③震災時に組織はこれからどう対応したらいいか
- ワークショップの評価:4.74(高い満足度)(ポストアンケートによる)

「第8回FD協議会」の第二部： FDワークショップ「震災時の学生支援について」

■5つのテーマを7班でグループディスカッション、全体発表

■テーマ：①学生主体型授業とFD
②授業評価のあり方
③短期大学とFD
④医療系大学とFD
⑤SDのあり方

■ワークショップの評価：4.83(高い満足度)(ポストアンケートによる)

平成23年度「FDネットワーク“つばさ”」の活動(2)

統一フォーマット(山形大学方式)による 「授業改善アンケート」

■北海道から関東までの大学・短大・高専15校

■合計：25.3万枚(山形大学5.3万枚を含む)

■コストは5.8円/枚(用紙代+処理作業代)

平成23年度「FDネットワーク“つばさ”」の活動(3)

山形大学「第11回FD合宿セミナー」

■平成23年8月29日(月)～31日(水)

■1泊2日の合宿を2回実施

■授業設計、シラバスの作成、コーチング、プレゼンテーション

■全国31大学等、65名(山形大学26名含む)の参加

平成23年度「FDネットワーク“つばさ”」の活動(4)

山形大学「第13回FDワークショップ」

■平成23年8月24日(水)10時～16時半

■基調講演：「先生方、授業するのは楽しいですか？」
滋賀県立大学 倉茂好匡 教授

■ラウンドテーブル：①「基盤教育における地域連携型授業の展開」
②東日本大震災と大学教育
③大学生活を学生・教育・職員で語ろう

■全国28大学等、71名(山形大学40名含む)の参加

平成23年度「FDネットワーク“つばさ”」の活動(5)

「学生FD会議」

■平成23年9月3日(土)13時半～18時

■会場：山形大学

■テーマ：「東日本大震災とわたしたち」

■北海道から岡山まで18大学等、
64名の参加(学生39名を含む)

■ワークショップの評価：3.52(4段階評価)(高い満足度)(ポストアンケートによる)

平成23年度「FDネットワーク“つばさ”」の活動(6)

「大学間連携SD研修会」

■平成23年9月9日(金)9時半～18時

■テーマ：「ケース・スタディによる大学事務改善」

■北海道から鹿児島まで35大学等と国立がん研究センター、68名の参加

■ワークショップの評価：4.5(高い満足度)(ポストアンケートによる)

現状：昨年と変わらない

○コストパフォーマンスが高くなるように設計し、実際、限られた人材と予算の中で高い成果を出していると自負している。

○山形大学中心からの脱却を図るために、協議会を首都圏で開催した。

課題：昨年の課題は解決したか

- 1
 - ・担当職員の部署の移動が心配。
 - ・経験を積んだ3年任期の事務補佐員の退職が心配。

↓

心配が現実のものとなる。課長以下全員が移動となる。
- 2
 - ・これから2月には関東圏の大学で協議会を開催したいが、引き受けてくれる大学探しに困っている。

↓

去年は乗り切ったが、これからも心配は続く。
- 3
 - ・専門分野による分科会を設置したいと考えているが、
 - ・ニーズはあるが、実際には動かない。
 - ・逼迫したニーズではないようだ。

↓

専門分野のラウンドテーブルを開催した。

FDの評価(考えていること)

○FDネットワークによって、情報交換や啓蒙は急速に進んでいる。

○FDネットワークによって、教育情報の公開・共有は進んでいる。

○FDネットワークの各種事業は、高い評価を得ている。

○FDのマンネリ化は否めない。

○大学の中で頻繁に開催されるようになった講習会(ハラスメント、男女共同参画...)の中のone of themになっている恐れがある。

○FDネットワークによって、各大学等の教育がどれほどよくなっているかは分からない。

fin.

障害者高等教育拠点

ー聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスを保障する
教育支援ハブの構築ー

筑波技術大学
障害者高等教育研究支援センター
石田 久之

2012/09/05 JFDN 京都大学

1



2

教育コンテンツの開発

- ・聴覚障害学生
 - ろう者学(Deaf Studies)、英語、アメリカ手話
 - ・ Academic adviser(英語)配置等の体制整備
- ・視覚障害学生
 - スポーツ教育
 - ・ Adapted sports coordinatorの養成

3

デフ・スタディーズ

- ・聴覚障害学生のエンパワメントにおける『デフ・スタディーズ』指導の意義

デフ・スタディーズ：先人の知識・知恵の集大成として、成長過程において問題解決策を講じる際など、エンパワメントに必要なリソース。

 - 福祉の授業などで健聴学生にも使える。
 - 単位互換を見据え、コンソーシアムや放送大学と提携してはどうか。
 - ろう者がアイデンティティを持つことは大事だが、自分だけが知っているという状況はかえって孤立感を産むような心理も生じる。「友達も一緒に学んでいる」といった教材になると面白い。

4

アカデミック・アドバイス

- ・『アカデミック・アドバイス提供』に関する高等教育機関のニーズについて

聴覚障害学生の語学教育の充実化に向けて必要。

 - 英語の指導については、学生・教員ともに困っているという話をたくさん聞く。色々な事例を共有して、新しい方法と結び付けるようになればよいと思う。
 - ノートテイクの情報保障が付いているが、スペルの分からない単語を聞いてカタカナで書いているのはよいだろうか。
 - 英語を聞いて英語の要約を行う支援者の養成は検討する必要がある。

5

アダプテッド・スポーツ・コーディネーター

- ・体育・スポーツ活動に関する教育的支援の充実が目的

体育授業に関する相談・助言を行える視覚障害者スポーツの専門家の養成。

 - 視覚障害者スポーツやそれらの指導法についての研修会などの情報提供。
 - 大学に合った支援内容についての相談・助言（個別対応または健常学生と混在しての授業運営、既存の施設・用具の活用など）。

6

多面的な評価

- 例えば、障害学生がいるクラスの研修授業
 - 障害学生が在籍する大学は多いが、多分、研修授業はあまりない
 - 特別な授業になる → 情報保障
 - ノートテイク、点字・拡大資料
 - 特別でない授業 → 多様なコミュニケーション法、共同作業による課題解決
 - 個別性の重視
 - 障害学生、健常学生それぞれの受け取り方
 - 教員の自己評価、学生評価、支援学生の評価

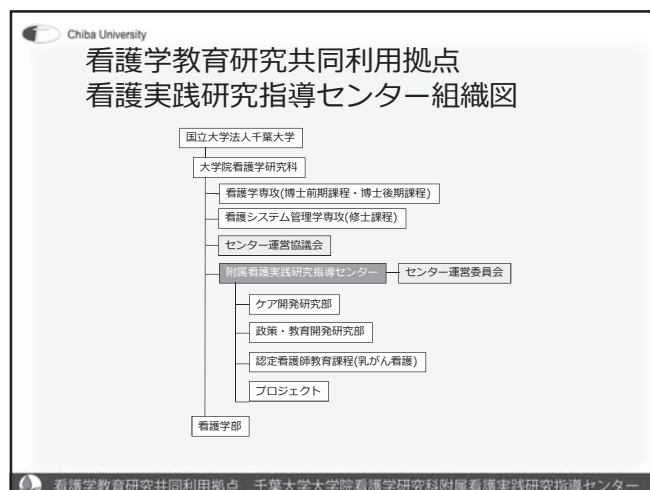
Chiba University

看護学教育研究共同利用拠点の 現況と課題

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
北 池 正 遠藤 和子 鈴木 友子



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター



Chiba University

看護系大学の教員を対象にしたFD

看護学教育指導者研修

看護学教育指導者研修は、看護系大学の臨床実務経験の看護職を対象としています。臨床と大学をつなぐ「距離感」の狭くなる人材育成に
焦点があります。

研修の特徴

- ・実習指導・組織運営に必要となる知識の提供
- ・看護を伝える力、組織における影響力、看護教育・管理・行政等の知識
- ・学生の学習プロセスを体系的に理解(千葉大学看護学部の学生実習に参画)
- ・広い視点、問題解決方法の習得
- ・最先端の大学教育に参画する機会(英書1PE、ポートフォリオの活用等)
- ・教員の役割と意識の転換
- ・研修生以上のネットワーク構築、成長の機会

期 間 平成24年5月14日(月)～7月27日(金)、および平成25年3月11日(金)
定 員 15名

看護学教育ワークショップ

平成11年度から看護学教育ワークショップを毎年実施しています。本ワークショップは、看護系大学の看護学教育カリキュラムをより充実させることを主な目的として、文部科学省から委託を受けて行われてきました。平成22年度からは、センター独自事業として実施しています。

テーマ 大学と臨床の連携(仮題)
期 間 平成24年10月24日(木)～10月26日(金)
内 容 基盤講座、特別講座、テーマ別グループ討議、全体討議等
定 員 80名(看護系大学において看護学教育カリキュラムに賛同を持つ立場にある教員)

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

Chiba University

大学病院の看護職を対象にしたSD

国公立大学病院副看護部長研修

国公立大学病院副看護部長研修は、わが国及びグローバルな世界の医療の現状を踏まえて、全国大学病院の「新看護管理」として自施設の看護改革に向けたヴィジョンを明確にし、その実現に向けた計画を立案・実施・評価することを通じて、最新看護管理として必要な実践能力を高め、大学病院の看護および医療サービスの充実を図ることを目的として、平成18年度よりセンター独自事業として実施しています。

期 間 平成24年6月11日(月)～6月15日(金) 講義
平成24年9月10日(月)～9月14日(金) 演習
平成25年3月 4日(月)～3月 5日(火) 発表会
定 員 25名

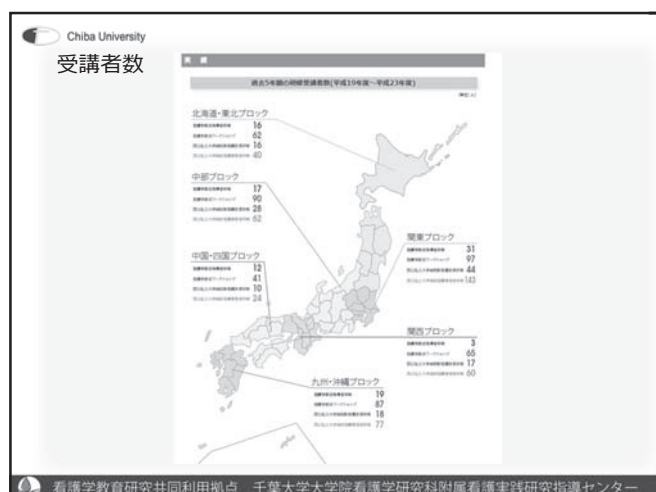
国公立大学病院看護管理者研修


大学病院が、その特殊性を踏まえて、医療機関としての機能を十分に発揮し社会の期待に応えていくためには、看護部長等看護管理者の体系的な管理能力の習得が重要となります。

本研修は、看護系大学等大学病院の看護管理者が、大学病院の特殊性を踏まえて看護管理上に必要な知識を修得し、体系的な管理能力を高め、大学病院の看護の充実を図ることを目的として開催しています。

期 間 平成24年8月20日(月)～8月22日(水)、9月24日(月)～9月26日(水)、平成25年3月6日(木)
定 員 平成24年8月20日(月)～8月22日(水)の受講は50名、全日程の受講は30名

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

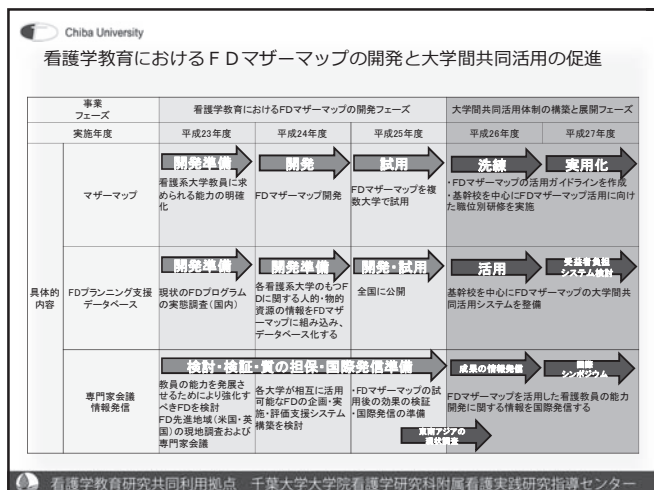


 Chiba University

教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発

事業フェーズ	プログラム開発・検証フェーズ		モデル展開・発信フェーズ		
内 容	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
①看護実践研究	看護の独自性・専門性に関する専門領域横断型研究の企画・スタート 看護の独自性・専門性を可視化する「アクション・ヘルムワーク」の開発(内省・検証)の臨床現場までの調査研究	看護実践研究の開始 共同研究の募集と実施	フォーラム(基礎教育・看護教育・看護実践・看護研究)を用いた実証研究	組織のニーズに応じた教育・実践連携モデルの検証(研修終了者との共同研究)	教育－実践連携モデルの検証(研修終了者との共同研究)
②看護職育成支援プログラムの開発	既存研修評価、①の成果に基づき、プログラム内容の検討	リフレクティブプログラム、看護教育－実践連携研修・指導プログラムの開発	日本看護実践・実践連携研修・指導フェーズの計画・実施研究		
③組織変革支援研修事業	既存研修プログラムの実施	②の成果に基づいた新たな研修プログラムの試行・評価	研修プログラム改善・実践・評価	教育－実践連携モデルを取り入れた研修展開の試行	教育－実践連携モデルを取り入れた研修展開の評価
④情報収集・管理・発信	教育－実践の連携に向けた組織の事業プロセスの系統的な情報収集 教育－実践の連携に向けたプログラム・多職種からの系統的な情報収集・発信	②の成果に基づいた新たな研修プログラムの試行・評価	組織変革実践と課題・課題解決に係る組織条件の系統的な情報収集	組織変革実践と課題・課題解決に係る組織条件の系統的な情報収集	組織変革実践と課題・課題解決に係る組織条件の系統的な情報収集
	HP・ニュース・整備 研究・研修成果によるFD・院内研修	HP・ニュース・発信 学会・研究会で発表			国際・国内シンポジウム開催

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター




Chiba University
看護学教育におけるFDマザーマップの開発キックオフ講演会
2011年6月28日



- ・基調講演 大学教育の革新とFDマップ
川島 孝二
国立教育政策研究所 高等教育研究部 総括研究官、日本高等教育開発協会会長、大学教育学会常任理事、初年次教育学会理事
- ・Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development from a Dean's perspective
Sally Broeze Hardin, PhD, RN, FAAN
Dean and Professor University of San Diego, Hahn School of Nursing and Health Sciences
- ・Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development: A Researcher's Fresh Perspective
Cynthia D. Connelly, PhD, RN, FAAN
Professor University of San Diego, Hahn School of Nursing and Health Sciences
- ・看護学教育におけるFDマザーマップの開発
北池 正
看護実践研究指導センター長

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

看護実践研究指導センター ホームページ



従来は、大学院看護学研究科ホームページの中で、センターの紹介を数ページのみで行っていた。

↓


平成22年9月にセンターの独立したホームページを開設。

- ・更新回数…35回
- ・センターと研修の概要、研修生の募集だけではなく、センターの活動の状況がリアルタイムにわかるように構成。

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター


看護実践研究指導センター 発行物

パンフレット



発行部数1,000部

ニュースレター




発行部数600部

主な配布先

- ・研修生
- ・講師
- ・看護系大学等関連機関

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター


看護実践研究指導センター データベース
教育—研究—実践をつなぐ
組織変革型看護職育成支援データベース



センターのホームページからデータベースに簡単にアクセス可能。

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

Chiba University
センター創立30周年記念誌 2012年3月



看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科
看護実践研究指導センター

30年の歩み
平成21年3月

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター


Chiba University

看護学教育研究共同利用拠点

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター直轄の専攻と連携

教育・研究・実践・交流の看護学教育研究共同利用拠点

看護学教育研究共同利用拠点

本学看護学専攻の看護学教育研究共同利用拠点である「プログラム」は、看護・研究・実践・交流の4つの領域を横断する看護学「プログラム」であり、平成22年度から本学中心に本学・他大学の専攻と協働して実施すると、センターは30年度までに全ての専攻領域でセンターを開設される。専攻領域は専攻領域の特色に応じ、専攻ごとにグループ（中心・連携）専攻を編成し、中心・連携の2つの専攻領域の協働を推進するとともに実施する。

<p>日程</p> <p>平成28年</p> <p>6月30日(土)</p> <p>9:00～11:00(受付開始12:30)</p>	<p>千葉大学けやき会館</p> <p>千葉駅南口徒歩13分</p> <p>千葉大学けやきセンター内</p>
--	--

プログラム

1. 日程 平成28年 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

2. 開催場所 会場は未定。上記の日程を以て実施する会場を 看護学教育研究共同利用拠点

3. 参加人数 100名程度

4. 参加費 無料

5. 申込方法 申込 参加費無料 参加費無料

6. 申込締切 平成28年5月31日

7. 申込受付 平成28年5月31日

8. 申込受付 平成28年5月31日

9. 申込受付 平成28年5月31日

10. 申込受付 平成28年5月31日

11. 申込受付 平成28年5月31日

12. 申込受付 平成28年5月31日

13. 申込受付 平成28年5月31日

14. 申込受付 平成28年5月31日

15. 申込受付 平成28年5月31日

16. 申込受付 平成28年5月31日

17. 申込受付 平成28年5月31日

18. 申込受付 平成28年5月31日

19. 申込受付 平成28年5月31日

20. 申込受付 平成28年5月31日

21. 申込受付 平成28年5月31日

22. 申込受付 平成28年5月31日

23. 申込受付 平成28年5月31日

24. 申込受付 平成28年5月31日

25. 申込受付 平成28年5月31日

26. 申込受付 平成28年5月31日

27. 申込受付 平成28年5月31日

28. 申込受付 平成28年5月31日

29. 申込受付 平成28年5月31日

30. 申込受付 平成28年5月31日

31. 申込受付 平成28年5月31日

32. 申込受付 平成28年5月31日

33. 申込受付 平成28年5月31日

34. 申込受付 平成28年5月31日

35. 申込受付 平成28年5月31日

36. 申込受付 平成28年5月31日

37. 申込受付 平成28年5月31日

38. 申込受付 平成28年5月31日

39. 申込受付 平成28年5月31日

40. 申込受付 平成28年5月31日

41. 申込受付 平成28年5月31日

42. 申込受付 平成28年5月31日

43. 申込受付 平成28年5月31日

44. 申込受付 平成28年5月31日

45. 申込受付 平成28年5月31日

46. 申込受付 平成28年5月31日

47. 申込受付 平成28年5月31日

48. 申込受付 平成28年5月31日

49. 申込受付 平成28年5月31日

50. 申込受付 平成28年5月31日

51. 申込受付 平成28年5月31日

52. 申込受付 平成28年5月31日

53. 申込受付 平成28年5月31日

54. 申込受付 平成28年5月31日

55. 申込受付 平成28年5月31日

56. 申込受付 平成28年5月31日

57. 申込受付 平成28年5月31日

58. 申込受付 平成28年5月31日

59. 申込受付 平成28年5月31日

60. 申込受付 平成28年5月31日

61. 申込受付 平成28年5月31日

62. 申込受付 平成28年5月31日

63. 申込受付 平成28年5月31日

64. 申込受付 平成28年5月31日

65. 申込受付 平成28年5月31日

66. 申込受付 平成28年5月31日

67. 申込受付 平成28年5月31日

68. 申込受付 平成28年5月31日

69. 申込受付 平成28年5月31日

70. 申込受付 平成28年5月31日

71. 申込受付 平成28年5月31日

72. 申込受付 平成28年5月31日

73. 申込受付 平成28年5月31日

74. 申込受付 平成28年5月31日

75. 申込受付 平成28年5月31日

76. 申込受付 平成28年5月31日

77. 申込受付 平成28年5月31日

78. 申込受付 平成28年5月31日

79. 申込受付 平成28年5月31日

80. 申込受付 平成28年5月31日

81. 申込受付 平成28年5月31日

82. 申込受付 平成28年5月31日

83. 申込受付 平成28年5月31日

84. 申込受付 平成28年5月31日

85. 申込受付 平成28年5月31日

86. 申込受付 平成28年5月31日

87. 申込受付 平成28年5月31日

88. 申込受付 平成28年5月31日

89. 申込受付 平成28年5月31日

90. 申込受付 平成28年5月31日

91. 申込受付 平成28年5月31日

92. 申込受付 平成28年5月31日

93. 申込受付 平成28年5月31日

94. 申込受付 平成28年5月31日

95. 申込受付 平成28年5月31日

96. 申込受付 平成28年5月31日

97. 申込受付 平成28年5月31日

98. 申込受付 平成28年5月31日

99. 申込受付 平成28年5月31日

100. 申込受付 平成28年5月31日


看護学教育研究共同利用拠点

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

大学コンソーシアム石川(UCI) FD・SD活動の展開

FDネットワーク代表者会議

2012年9月5日

大学コンソーシアム石川教職員研修専門部会

副部会長 林 透（北陸先端科学技術大学院大学）

部会長 青野 透(金沢大学)

概要

【現況と課題】

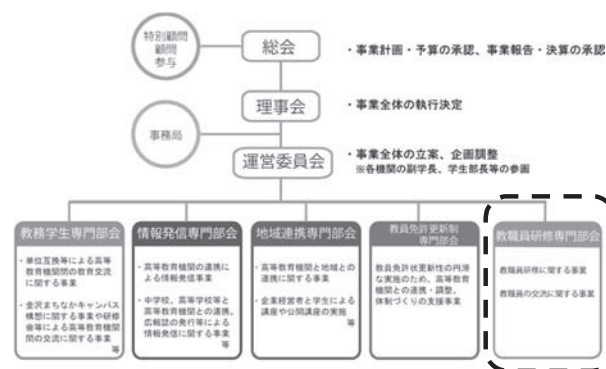
- (1) 大学コンソーシアム石川の組織と活動拠点
- (2) FD・SD事業の実施主体(教職員研修専門部会)
- (3) これまでの実績
- (4) 今年度の事業実施と計画
- (5) 新たな試みほか

【FD・SD事業の評価】

- (6)FD・SD事業の評価のあり方
(7)今後の展望ほか

現況と課題

(1-1)一般社団法人大学コンソーシアム石川 組織図



(1-2)大学コンソーシアム石川(UCI)
参加高等教育機関 20

金沢大学
北陸先端科学技術大学院大学

石川県立看護大学
石川県立大学
金沢美術工芸大学

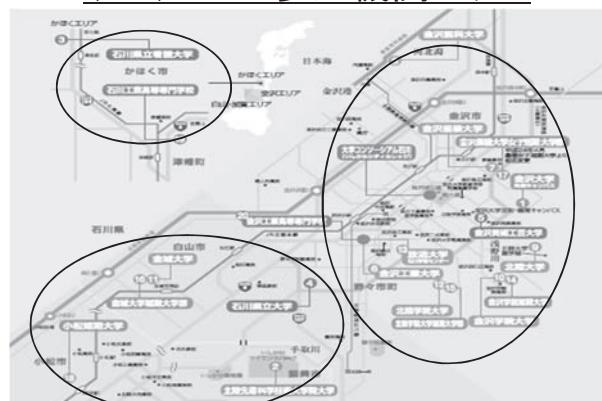
金沢工業大学
金沢星稜大学
金沢医科大学
北陸大学
金沢学院大学
金城大学
北陸学院大学

金沢学院短期大学
北陸学院大学短期大学部
金城大学短期大学部
星稜女子短期大学
小松短期大学

石川工業高等専門学校
金沢工業高等専門学校

放送大学

(1-3) UCI 参加機関マップ^o



(1-4) UCIの活動拠点

- ・ 石川県政記念いのき
迎賓館(セミナールーム)



- ・ 石川四高記念文化
交流館(多目的利用室)



6

(2) UCI教職員研修専門部会

2012年4月～(従来の委員会から部会に昇格)

教職員研修専門部会

(加盟全機関から教員1名・職員1名が参加)

部会長: 青野 透(金沢大学)

副部会長: 川上正文(金城大学)

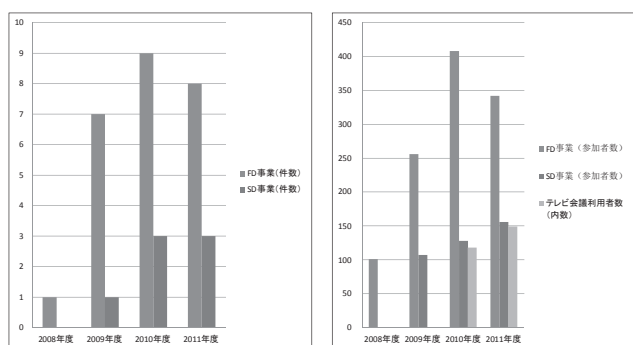
副部会長: 林 透(北陸先端科学技術大学院大学)

※5月中旬に第1回部会を開催。

同部会の下に、FD企画委員会、SD企画委員会

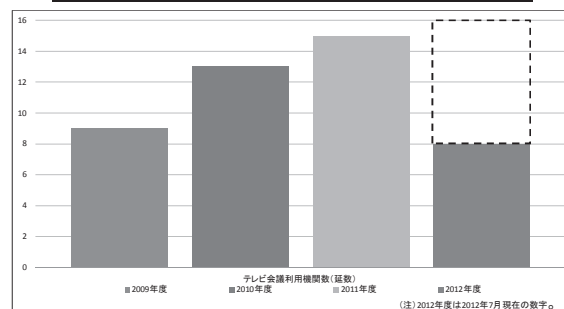
7

(3-1) FD・SD事業実績(実施件数・参加者数) 2008-2011年度



8

(3-2) FD・SD事業実績(テレビ会議 利用機関数) 2009-2012年度



- ・ 県郊外の大学(石川県立看護大、金城大、金沢学院大、小松短大、北陸先端大)による利用が通例化。
- ・ 研修会1回当たり10名前後参加する機関も増加傾向。

9

(3-3) 2011年度事業実績

開催月	内 容	開催場所	参加人数
5月	第1回FD・SD研修会「学生の学習意欲を高め、双方向授業を展開するためのクリック活用術」	セミナー ルームB	41名
6月	第2回FD・SD研修会「高等教育機関の風評リスク対策とコミュニケーション戦略」	〃	53名
7月	第3回FD・SD研修会「大学における発達障害が疑われる学生への支援」 SDワークショップ2011 「集まろう大学職員! 一問題意識を共有するために」	〃 四高記念 文化交流館	73名 50名
9月	第4回FD・SD研修会「京都地域18大学・短期大学によるFD連携事業 ～京都FD開発推進センターの挑戦～」	セミナー ルームB	30名
10月	第5回FD・SD研修会「学習成果を重視した学士課程教育の構築に向けて ～カリキュラムポリシー(CP)・ディプロマポリシー(DP)策定の ためのフレームワークとは～」	〃	58名
11月	第6回FD・SD研修会 「大学等のガバナンスと経営戦略」	セミナー ルームA	42名
12月	SDフォーラム 「大学職員としてのチャレンジ ー大学職員として何ができるかー」	本多の森 会議室	64名
2月	短期大学FDフォーラム 「金沢工業大学における教育支援体制の紹介と施設見学」	金沢工業大学	30名
3月	第7回FD・SD研修会 「障害学生の就職活動に対する支援」 第8回FD・SD研修会 「大学コンソーシアム石川のより有効な活用方法について ーUCIポータルと教材の利用を中心にー」	セミナー ルームB 〃	33名 24名

10

(3-4) FD・SD事業の効果の一例

2011年度

第5回FD・SD研修会(10月21日(金) 18:00～19:30 TV会議4校)

「学習成果を重視した学士課程教育の構築に向けて

～カリキュラムポリシー(CP)・ディプロマポリシー(DP)策定の

ためのフレームワークとは～」

講師: 神戸大学大学教育推進機構 川嶋太津夫 教授

⇒北陸先端大 大学院教育イニシアティブセンター、金沢大 大学
教育開発・支援センター共催で開催。

⇒このセミナーを契機に、北陸先端大
では3つのポリシー策定の議論が
前進(2012年3月策定)。



11

(3-5)他の大学コンソーシアムへの ノウハウの提供

第8回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム
(2011年9月11日 熊本学園大学)

★分科会4

大学間連携によって進めるFD・SDの実効化

金沢大学 青野 透 教授

「夜間開催とテレビ会議システム活用による
連携FD・SDの試み」と題して報告

12

(4-1)2012年度事業実績(1)

第1回FD・SD研修会(6月8日(金) 18:00~19:30 TV会議3校)

「ソフトウェア資産管理セミナー」

講師:石川県企画振興部情報政策課 廣田 雅彦 課長補佐

第2回FD・SD研修会(6月15日(金) 18:00~20:00 TV会議3校)

「ワークライフバランスの実現に向けて」

講師:(株)東レ経営研究所

宮原 淳二 ダイバーシティ&ワークライフバランス部長

⇒地元自治体(石川県)から前年度依頼のあった
テーマの実現。

13

(4-1)2012年度事業実績(2)

第3回FD・SD研修会(7月20日(金) 18:00~20:00 TV会議2校)

「研究活性化とリサーチ・アドミニストレーター」

講師:金沢大学先端科学・イノベーション推進機構

鳥谷 真佐子 リサーチ・アドミニストレーター

第4回FD・SD研修会(8月30日(木) 18:00~20:00)

「今求められる組織的な外部資金獲得方策

ー申請者及び支援者の立場で考えるー」

講師:明治大学研究推進部生田研究知財事務室

小澤 芳明 事務長

⇒これまで少なかった研究活動支援という
テーマの実現。

14

(4-2)2012年度事業実績(3)

大学経営人材養成合宿研修(8月4日(土)~5日(日))

「大学職員としての自分を見つめ、他人に学ぼう!」

北陸地区・中部地区・近畿地区から教職員18名参加。

KJ法による図解化と口頭発表。

「大学業務の可視化」と「大学業務に関する観点や価値観
の違いの共有」

⇒大学教職員の個の学び・成長と大学組織体の自覚



15

(4-3)2012年度事業 今後の予定

第5回FD・SD研修会(9月16日(水) 15:30~17:00)

「高等教育機関は発達障害者支援にどう貢献すべきか
~精神科医の経験をもとに~」

講師:福岡教育大学教職大学院 納富 恵子 教授

第6回FD・SD研修会(9月25日(火) 16:00~17:30)

「電子黒板の教育現場での活用について」

講師:キーパッド・ジャパン株式会社 井上 大輔 氏

そのほか、学生FD、高等教育政策の最新動向などを
テーマに研修会、FD・SDフォーラムを開催予定。

16

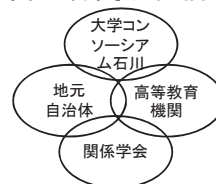
(5)地元自治体や関係学会との タイアップ戦略(新たな試み)

- ・ 地元自治体(石川県)とのジョイントイベント実現

⇒第1回~第2回FD・SD研修会

- ・ 大学行政管理学会中部・北陸地区研究会との
継続的連携(後継者育成も含めて)

⇒大学経営人材養成合宿研修



17

FD・SD事業の評価

18

(6-1) FD・SD事業の評価のあり方

【現状の方策】

- 年度初めと年度末の部会での各委員からの要望聴取、意見交換。
- 各イベントのアンケート結果集計と加盟機関へのフィードバック。
- SD活動・ニーズアンケート(2010)、FD活動・ニーズアンケート(2012)の実施。

⇒コンソーシアム事業としての評価はできている。

⇒当該FD・SD事業の加盟機関の教育研究活動等への貢献度の評価は今後の課題

19

(6-2) 委員からの意見

- 地域を挙げて、いしかわの学生を底上げできるような取組を行うべき。
- 新任教員、職員の研修の実施・慣例化
- 加盟機関の教育実践のグットプラクティスを掘り起こし、紹介してほしい。
- 学生も参加できるような企画実施
- 個別大学で実施できない研修機会の提供

20

(6-2) FD活動・ニーズアンケートから

- 若手教員(又は中堅教員)同士の交流機会提供
- 時機に合ったテーマ設定と機会提供
- 希望する具体的テーマ
 - 初年次教育実践
 - 発達障害学生支援
 - 高等教育政策に関する情報提供
 - 効果的な授業実践の紹介 ほか
- FD・SD研修会開催日時(時間帯)の再検討

21

(7) 今後の展望ほか

- FD・SD事業のプログラム化
- 「大規模大学から小規模大学へ」という資源共有意識の醸成
 - ⇒FD活動・ニーズアンケート等を踏まえたメニューの再整理。
 - ⇒加盟機関内の人的資源をリストアップ。
 - ⇒コアメンバーの強化
 - ⇒共通化できるテーマの更なる掘り起こし、実践
- 多様な関係者が集う場としてのコンソーシアムの充実

22

ご清聴いただき
ありがとうございます

23

福井県学習コミュニティ 推進協議会（フレックス）

福井県立大学
学術教養センター
山川 修

Fレックスとは

- 「学習コミュニティ」をキーワードに平成20年度から連携を開始
- Fukui LEarning Community Consortium(F-LECCS)
- 福井県は恐竜が有名、T-Rexからのもじり
→Tレックス→Fレックス



2

2

Fレックスの目標



継続的な大学連携基盤の構築
(人のネットワーク・ICTシステム)

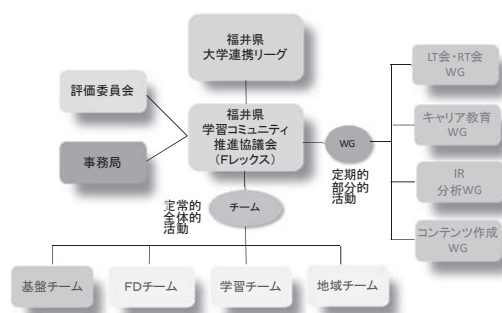
学習コミュニティによる大学間および
地域コミュニティの活性化



大学間連携による
大学教育の改善と改革の推進

3

Fレックス運営体制



4

4

FDチームの目標 (3年間)

- 「相互研修型FDの推進」を基調
 - 【各校のFD活動】各教育機関における、実情に応じたFD活動の独自の創造的な展開
 - 【協働のFD活動】県内の高等教育機関相互のFD活動の交流と協働による教育改善活動の推進
 - 【他との連携】高等教育機関をとりまく、関係教育機関・企業・地域との教育改善をめざす連携の追求
 - 【FD資料の蓄積】連携機関のFD資料などの蓄積と国内外の優れたFD活動の調査と紹介
 - 【人的連携の環】FD活動推進の人的ネットワークの構築

5

具体的な活動

- 定期的な情報交換
 - 月に1回の対面会議を実施
- 合宿研修会
 - より深い議論をするために9月に実施。
 - キャリア教育、学習評価、ポートフォリオがテーマ
- シンポジウムの実施
 - 外部から講師を招きキャリア教育のシンポジウムを12月に実施
- 外部組織との連携
 - キャリア教育で、「ふくいキャリアフォーラム実行委」と連携
- 教育改善を目的とする学生意識調査アンケートを継続的に実施
 - 今年度から一部組織では記名式に移行

6

参加校のFD活動の歴史と現在



参加校	FDの歴史	FDの組織	授業公開	授業アンケート	研修会等	報告書等	他校への企画のオープン化
福井県立大学	2002年FDワーク委員会	教育・学習支援チーム	各部署の教員で実施	前期・後期の年2回実施	講演会、セミナー等実施	報告書	研修会等(企画者の数による)
福井工業大学	2000年FD推進委員会	FD推進委員会	授業公開・見学制度	前期・後期に計年4(H20-22)シヤトルノート式ポートフォリオの実施	FDシンポジウム、各種の研修会の実施	FDコミュニケーション4回と報告書	FDシンポジウム、講演会、などを公開
仁愛女子短期大学	2000年4月からFD委員会	FD委員会	公開授業週間を設定(公開と参観)	前期・後期に中間(配速)と期末(マークと配速)の年4回実施	FDシンポジウム、各種研修会の実施	報告書(「仁愛女子短期大学のFD」)	FDシンポジウム、講演会
敦賀短期大学	2002年より自己点検活動として	FD委員会	制度化されていないが2009年度より実施	前期・後期、全科目実施	専任教員に対し講義の良い点・悪い点を調査		まだ取り組んでいない
福井高専	2001年に自己点検・評価委員会として	創造教育開発センター	公開授業週間を設定、各科目1名の履修の公開授業	前期・後期の年2回実施、報告書は学内のみ公開	各種講演会、研修会の実施	報告書	FD研修会はフレックスに公開
仁愛大学	2003年に自己点検委員会として	FD推進委員会	(未実施)	中間調査と学期末調査	学科内FD研修、講演会	報告書	学内研修:FD講演会は学外にもオープン
福井大学(オブザーバー)	2003年に各学部FD委員会として	各学部FD委員会、高等教育推進センターFD・教育企画部門	医学部で実施	各学部で実施	各学部で各種研修会、FD講演会等その他全学的なFD実施予定	各学部で随時作成	全学的なものは他校にオープン(一部学部間連携もオープン化)

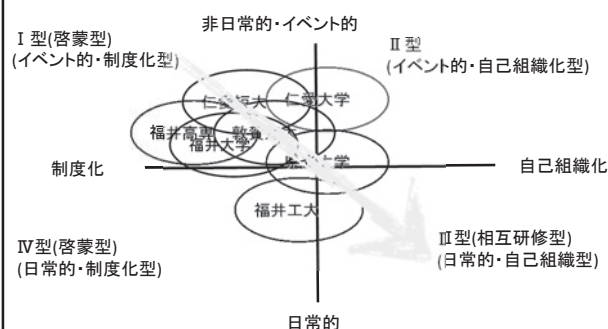
7

参加校の現状とその特徴



少しずつⅢ型に移行している

(田中氏の分類による)



8

課題



- ・「フレックス」と「大学連携リーグ」の融合
 - －フレックス:ボトムアップ、6校参加
 - －大学連携リーグ:県主導、8校参加
- ・さらなる相互研修型FDの推進
 - －FDを日常的な活動にする
 - ・ティーチングポートフォリオは一つのキッカケになるか
- ・FD活動の評価を如何に行うか

9

FD活動の評価



- ・今のところ参加者の感想のみ
 - －大学連携で実施するFD活動には一定の評価
 - －ただし評価しているのはFD委員長クラスの教員
- ・日常的に教育を語るコミュニティ作り
 - －ティーチング・ポートフォリオ
 - －教育改善を議論するためのデータの提供
 - ・授業評価、学生意識調査、学習履歴データ
- ・IRに基づいたCP、DPの検証

10

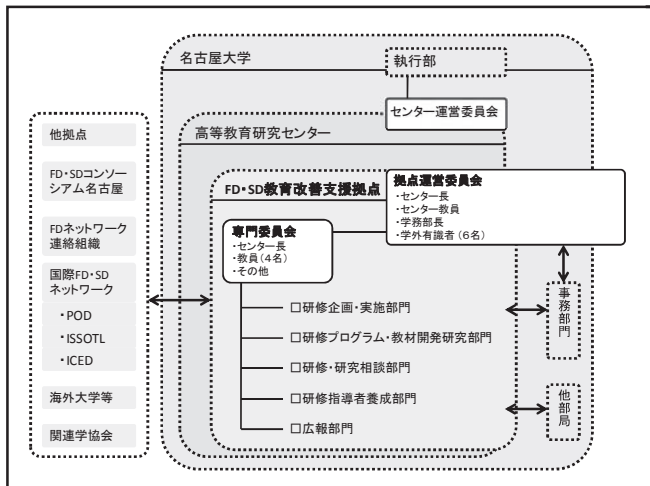
FDネットワーク代表者会議（2012.09.05、京都大学）

「名古屋大学FD・SD 教育改善支援拠点」の活動と課題

名古屋大学高等教育研究センター
夏目 達也

「FD・SD 教育改善支援拠点」の目的

- ①大学教員の教育能力および職員の職業能力の開発・向上を通じて、教職員の自発的な教育改善の取組を促進すること。
- ②中部地域を中心とした各大学における教育・学生支援の質向上を実現すること。



「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

- ・対象者の職位・職務・専門性に対応した体系的FD・SDプログラムの開発・提供。
- ・プログラム関連教材の開発・提供。
- ・諸外国の拠点大学との連携。
 - －プログラム・教材開発。
- ・国際的FD・SD団体での教職員の研修。
- ・国内大学へのFD・SD実施のサポート。
 - －講師の派遣、各種支援ツールの提供

「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

1. FD・SDの教材開発

1.1 FD教材

- ・『名古屋大学新任教員ハンドブック』
- ・『Mei-Writing 日本語版：学術論文の書き方入門』
- ・ファカルティガイド
- ・名古屋大学教員のための留学生受入ハンドブックのウェブ化

1.2 SD教材

- ・『大学の教務Q&A』

FD・SDの教材開発



「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

2. FD・SDプログラム開発の企画・実施
 - 2.1 「大学教育改革フォーラムin東海2012」の開催
 - ・2012年3月、名古屋大学で開催。参加者237名。
 - 2.2 高等教育研究センター主催セミナー
 - ・「招聘セミナー」等 10回
 - ・「客員教授セミナー」 4回
 - 2.3 教員向け各種セミナー・ワークショップ
 - ・「研究グループを率いるために」
 - ・ワークショップ「英語で教える」 その他

「大学教育改革フォーラムin東海2012」



「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

- 2.4 教員向けメンター・プログラム
 - ・個人のニーズに対応したサポートの提供。
- 【教員メンタープログラムに期待される効果】
 - － 職務や生活に関して気軽に相談できる相手を得る
 - － 大学について理解を深める
 - － 教育研究など職務上必要な知識やスキルを獲得する
 - － キャリアの展望を考えるきっかけになる
 - － メンター教員を介してさまざまなネットワークを作る
- 【メンター教員にとっての意義】
 - － 新任教員との交流で新しいアイデアや活力。
 - － 自らの教育研究を振り返り今後のキャリアを考えるきっかけに。

ワーキング・ウーマンパワーアップ会議 本メンタープログラムを表彰



「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

- 2.5 大学教員準備プログラム
 - ・大学院の正規科目「大学教員準備講座」の開講(集中講義)
- 2.6 海外教職員派遣事業
 - ・POD年次大会(米・アトランタ)に派遣。
- 2.7 学部学生向け学習支援の各種セミナー
 - － 教養教育院、中央図書館と共催。
 - － 「レポート書き方講座」「人に伝わる話し方・プレゼンテーション入門」等

「FD・SD教育改善支援拠点」の活動内容

3. 他大学からの利用申請への支援
 - ・協力要請のある大学等にセンター教員を講師として派遣。
 - ・FD・SD等の各種相談への対応。
4. 地域における各種FD・SD情報の提供
 - ・各種情報の提供
 - － センター・ホームページ、メールマガジン、ニュースレター等

今後の活動方針・具体的内容

1. FD・SDプログラムの教材開発

<方針>

- －教職員・学生の多様なニーズの発掘
- －多様な職務・ニーズに対応した効果的なプログラムの開発
- ・学士課程学生向け：アカデミックライティング、図書館活用
- ・大学院学生向け：大学院共通教育、研究支援
- ・教員向け：専門を軸に研究会ベースで開発
- ・職員向け：教務研究、IR研究

今後の活動方針・具体的内容

2. FD・SDプログラム開発の企画・実施

<方針>

- ・教職員のプロフィール・ニーズに応じて、柔軟な形態のFD・SDを企画・実施。
- ・集合研修にこだわらず、多様な方法と内容で実施。
- 2.1 「大学教育改革フォーラムin東海2013」の開催FD・SDプログラムの開発
- 2.2 新任教員研修の新プログラムの実施
 - ・従来のプログラムの改訂・実施
- 2.3 院生・ポスドク向けの学修とキャリア形成の支援
 - ・研究支援プログラム

今後の活動方針・具体的内容

3. その他

- ・トップマネジメントの研究・調査。
 - ・アカデミック・リーダーシップ研究会
 - ・全国の高等教育研究者との共同研究
 - ・大学経営陣向けリーダーシップ形成のための研修プログラム・支援ツールの開発
- ・管理職研究
 - ・全国の主要大学(東北、京大、広大、愛媛大等)との共同研究

FD・SD教育改善支援拠点の課題

1. 少ないスタッフ数で対応。活動内容に限界か。
 - ・FD・SDの教材開発を活動の中心に位置づける。
 - ・多様なアクターへ共同研究・開発の呼びかけ
2. 教職員の多様なニーズの把握
 - ・ニーズは多様であり、つねに変化。把握の努力を怠ることはできない。
 - ・潜在的なニーズの把握をいかに進めるか。
3. FD・SD拠点の活用および
 - ・情報の発信をいかに進めるか。

FD・SD教育改善支援拠点の課題

4. FD・SDの実施主体の形成

- ・実施主体を積極的に引き受ける機関・アクターの形成・確保
- FD・SDは他人任せでは効果を期待できない。

5. 開発した教材・プログラムの普及

- ・いかに多くの大学に活用してもらうか。
- ・そのために拠点として何が必要なのか。
- ・活用による教育改善効果の検証

FD・SD教育改善支援拠点の課題

1. 拠点同士の共同事業

- ・管理職調査の実施
- ・共同研究

2. 地域の多様なネットワークとの連携

- ・地域には、多様なネットワークが存在。
- ・大学・高等教育限定の必要は必ずしもない。
- ・ネットワークといかに連携するか。

MEDC

岐阜大学
医学教育開発研究センター
Medical Education Development Center (MEDC)

2001 医学教育に関する全国共同利用施設として設置
 全国に2か所：岐阜大学、東京医科歯科大学
 専任教員6（教授2、准教授2、助教2）
 客員教授（日本人、外国人）、専任事務官

2008 大学院開設（医学教育学博士課程）

2010 医学教育全国共同利用拠点として認定
 医学教育分野では唯一：岐阜大学のみ
 特任助教1名、研究補佐員1名

2011 開設10周年

MEDC

ミッション

- 新しい医学教育の開発研究と普及
- 医学教育に貢献できる人材育成・FD
- 国内外の医学教育機関との連携・共同研究

知

• PBL-Tutorial 教育の進化と普及
 • E-Learning system の開発

心

• Medical Communication 教育の進化と普及
 • Professionalism 教育の開発

技

• Simulation 教育の開発
 • Teaching & Learning skill の普及

MEDC

全国共同利用拠点としての任務

- **全国規模のFaculty Development** 毎年4回開催
 「医学教育セミナーとワークショップ」
 全国の医療系大学の教員、指導医、医療関係者、学生、模擬患者などを対象として開催
 教育目標：カリキュラムの作り方
 教育方法：新しい教育法の導入、地域での教育
 指導法：講義、グループ学習指導、臨床現場での指導
 評価法：学生評価、教育プログラム評価 etc
- **医学教育専門家の育成**
 大学院「医学教育学」 現在6名在籍
 医学教育専門家認定制度の構築（日本医学教育学会）

MEDC

全国共同利用拠点としての任務

- **医学教育法の開発・普及**
 - 問題基盤型教育（Problem-Based Learning）
 - 医療コミュニケーション教育
 - プロフェッショナリズム教育
 - e-Learning（教育用ウェブサイト）
 - シミュレーション教育（スキルスラボ）
 - 多職種連携教育（医学、歯学、薬学、看護、リハビリ etc）
- **国際交流**
 - 医療英語教育（海外臨床実習）
 - 客員教授の招聘

MEDC

医学教育セミナーとワークショップ・事務情報

第40回 医学教育セミナーとワークショップ in 岐阜
 2011年5月14日（土）～15日（日）

第39回 医学教育セミナーとワークショップ in 広島大学
 2011年1月22日（土）～23日（日）（終了）

第38回 医学教育セミナーとワークショップ in 名古屋大学
 2010年11月6日（土）～7日（日）（終了）

インターネットチュートリアル/座位置業The Tutorial
 ・学習者：大学教員「アカウント作成とログイン手順」
 ・英語版：Rakuichi The Tutorial

PBLチュートリアル
 ・PBLチュートリアルシステム
 ・PBLチューターFD
 ・学生ガイダンス

コミュニケーション・プロフェッショナリズム教育
 ・医療英語実習
 ・OSCE、臨床実習入門
 ・地域体験実習
 ・医師・患者関係コース

Gifu Medical Education e-learning system
 ・Gifu PBL Tutorial System
 ・シミュレーション教育システム
 ・症例データベース集
 ・PBLシナリオネットワーク
 ・e-portfolio

Skills-lab
 臨床スキル シミュレーションラボ

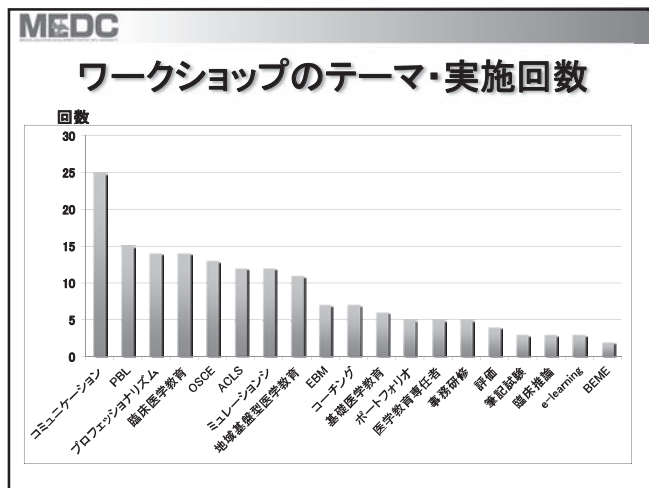
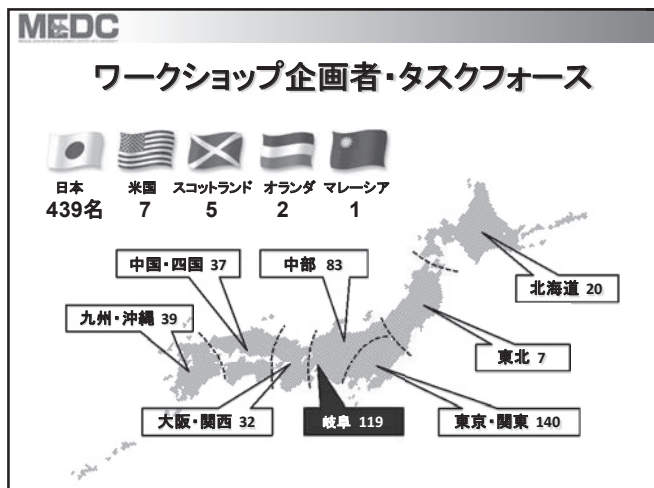
お知らせ
 お知らせ欄、ブログメールを登録し、お知らせを受け取れます（2010/12/22）

リンク集
 ながら情報 ■ ブログメール ■ Medc leaflet ■ MEDC関連書籍 ■ 関係者 ■

MEDC

医学教育セミナーとワークショップ
 通算45回（年4回）、のべ参加者5000名以上
 年2回は岐阜で開催、2回は他大学と共催

2005 金沢医大
 2009 札幌医大
 2005 岩手医大
 2012 福島医大
 2006 筑波大
 2011 千葉大
 2007 東京大
 2005 慈恵医大
 2009 慶応大
 2008 日本医大
 2010 東邦大
 2006 横浜市大
 2008 名城大
 2010 名古屋大
 2004 藤田保健大
 2003 近畿大
 2003 久留米大
 2007 徳島大
 2011 広島大
 2008 大阪医大



MEDC

国公立大学医学部・歯学部 教務事務職員研修

- 目的: 教務事務系職員を対象とした研修会を開催し、学務事務職員の新しい医学教育に関する理解を深めてもらう事により、それぞれの大学における医学教育活動の向上に貢献する。
- 主催: 国立大学医学部長会議常置委員会
- 実施大学: 岐阜大学医学部/MEDC (第2回～11回)
- 2001年開始、年1回開催 (第2回～第11回)
 - SGD: 44テーマ
 - 講演・セミナー: 47テーマ
 - 延べ参加者数: 489人

MEDC

PBLに関する取組

1. PBLに関するワークショップの開催
 - ・ 医学教育開発研究センター主催
 - ・ 各種教育機関における指導
2. PBLの改善に向けた岐阜大学での取組
 - ・ カリキュラムの改善
 - ・ 学生ガイダンス(指導法)の工夫
 - ・ テacher評価表の改善
 - ・ 学生Teacherの試験的導入
3. 新しいPBL: internet PBL

MEDC

PBLに関するワークショップの開催

- テュートリアルセミナー (2泊3日、第3回S&W 2001)
- テュートリアル・ワークショップ (1泊2日、第5回S&W 2002)
- どうすれば良くなるテュートリアル教育 (2泊3日、第9回S&W 2003)
- 歯科のPBLシナリオ作成 (1泊2日、第12回S&W 2004)
- 歯科のPBLシナリオ作成 (1泊2日、第16回S&W 2005)
- PBLシナリオと学習進度 (1泊2日、第17回S&W 2005)
- PBL revisited: 基本に立ち返ろう (2泊3日、第21回S&W 2006)
- 薬学教育におけるPBL導入の意義 (1泊2日、第27回S&W 2008)
- 未来型PBL-テュートリアル教育 (1泊2日、第28回S&W 2008)
- PBL meets simulation テュートリアル教育の進化をめざして (1泊2日、第29回S&W 2008)
- 協調学習とe-learning: オンラインPBLをデザインしてみよう (1泊2日、第33回S&W 2009)
- PBLにおける学生評価 (1泊2日、第35回S&W 2010)
- PBLの学び方を学ぶ (1泊2日、第37回S&W 2010)

MEDC

医療コミュニケーション教育 模擬患者 Simulated Patient の育成

- ・ 専門的なトレーニングを受けた市民ボランティアの協力
- ・ 医療面接を実際に行い、その後、学生にフィードバック
 - 学生同士、模擬患者、教員から
- 1、2年生の体験型授業への協力
- 実技試験OSCE (4年生): 初級編
- 臨床実習中のスキルアップ (5年生): 中級～上級編

- ・ 全国100以上の模擬患者団体との連携
- ・ 模擬患者育成指導者の養成

MEDC

プロフェッショナリズム教育

- 海外では行動科学を核としたプロフェッショナリズム教育が医学部の養成期間(4~6年間)を通じて行われるのが一般化
- 技能・態度面の教育アウトカムとして、プロフェッショナリズムに注目が集中
- ふり返りする専門家 (reflective practitioner)
- ふりかえりの重要なツールとしてのポートフォリオ

岐阜大学: 初期体験実習、地域体験実習(1年生)
PBLガイダンス(能動学習、生涯学習)(2, 3年生)
医師・患者関係(3年生)
臨床実習入門(4年生)
医療面接実習(5年生)

MEDC

シミュレーション医学教育

しっかりした準備教育を行ってから臨床現場に立ってほしいという社会的ニーズを満たすものとして、近年、急速に発展

1. シミュレーション教育に関するワークショップ
2. 日本Model & Simulation 医学教育研究会設立
3. シミュレーション動画教材
4. e-Learning システムの構築
5. スキルスラボの整備
6. 教育プログラム開発



MEDC

国際交流

■ 医学生への国際交流支援教育プログラム

国際的視野をもった医療人を育成するために、海外臨床実習はまたとない機会であり、多くの学生が参加できる準備教育を構築しつつある。

	日 付	トピックス	エクササイズ	講 師
第1回	5月14日	オリエンテーション: 海外実習病院を巡る		高橋/鈴木/若林/大塚/清水
第2回	6月4日	イントロダクション: 海外実習における異文化、言語、倫理的な事項	自由にディスカッション	Barton/若林/鈴木
第3回	6月11日	医療面接1	ロールプレイ	Barton/若林/阿部
第4回	6月25日	医療面接2	ロールプレイ	Barton/若林
第5回	7月2日	ケースプレゼンテーション1	ケースプレゼンテーション	Lefor/若林
第6回	7月16日	ケースプレゼンテーション2	ケースプレゼンテーション	Lefor (Skype) /若林
第7回	10月1日	海外臨床実習体験 報告会		高橋/鈴木/若林
第8回	10月15日	医療面接と臨床推論	ロールプレイ/PBL	Deshpande
第9回	10月29日	ケースプレゼンテーションを基本から	プレゼンテーション/ディスカッション	若林
補講 I	11月12日	医療面接 ~書いて読めよう~	SPとロールプレイ/フィードバック	若林/徳橋
第10回	12月3日	ケースプレゼンテーション3	プレゼンテーション/ディスカッション	Alan Lefor
第11回	12月10日	医療面接、身体診察、臨床推論	SPとロールプレイ/PBL	Deshpande
第12回	12月17日	閉会式	PBL/フリートーク	Evans

MEDC

歴代客員教授



MEDC

成果報告・出版



医学教育セミナーとワークショップ報告書

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

5th, Sep., 2012

2012 FDネットワーク代表者会議
全国私立大学
FD連携フォーラムの取組

立命館大学 沖 裕貴

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

加盟は25大学(2012年5月時点)、総会未承認を含めると29大学

代表幹事校: 立命館大学
幹事校: 関西大学、関西学院大学、慶應義塾大学、中央大学、同志社大学、法政大学、明治大学、立教大学、早稲田大学
会員校: 愛知大学、青山学院大学、神奈川大学、北里大学、九州産業大学、京都産業大学、甲南大学、國學院大学、国士館大学、芝浦工業大学、創価大学、中部大学、帝京大学、東京農業大学、東北学院大学、名城大学、日本大学、明星大学、龍谷大学 (50音順)

設立目的: 全国の中規模以上の私立大学が連携してFD(ファカルティ・ディベロップメント)を推進することにより、日本の新しい「高等教育の質保証」標準を目指す。

内容:
・FDに関わる取組や研究の共同開発・実施
・FDに関わる教材・資料・情報の提供・共有
・全国への情報発信(ホームページの作成、広報誌の発行など)
・その他、設立目的を達成するために必要な活動

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

大学名	入会年月日	総会での確認	2012.5時点学生数 (院生を除く)
1 関西大学		2008年度総会	28,071
2 関西学院大学		2008年度総会	23,116
3 慶應義塾大学	2008年12月6日	2008年度総会	28,844
4 中央大学	2008年11月11日	2008年度総会	25,329
5 同志社大学	2008年12月6日	2008年度総会	24,176
6 法政大学	2008年12月6日	2008年度総会	27,436
7 明治大学	2008年12月6日	2008年度総会	29,881
8 立教大学	2008年11月25日	2008年度総会	19,469
9 立命館大学	2008年12月6日	2008年度総会	32,524
10 早稲田大学	2008年12月6日	2008年度総会	43,974
11 青山学院大学	2008年12月26日	2008年度総会	18,379
12 神奈川大学	2008年12月6日	2008年度総会	18,693
13 京都産業大学	2009年2月6日	2009年度総会	12,970
14 甲南大学		2009年度総会	9,215
15 東京農業大学	2009年3月5日	2009年度総会	12,144
16 名城大学		2009年度総会	15,136
17 北里大学	2010年5月14日	2010年度総会	7,970
18 國學院大学	2010年4月26日	2010年度総会	10,382
19 国士館大学	2009年11月1日	2010年度総会	13,508
20 芝浦工業大学		2010年度総会	7,511
21 創価大学	2010年5月11日	2010年度総会	7,786
22 東北学院大学	2009年6月11日	2010年度総会	11,928
23 帝京大学	2010年7月19日	2011年度総会	24,505
24 龍谷大学		2011年度総会	16,806
25 中部大学	2012年4月1日	2012年度総会	10,088
26 九州産業大学	2012年7月1日	(予定) 2013年度総会	11,016
27 明星大学	-	-	8,090
28 愛知大学	-	-	9,812
29 日本大学	-	-	85,675

JPFF会費: 5万円/年
実践的FDプログラム使用料
会員校
1万円(1~9アカウント)
3万円(10~29アカウント)
5万円(30アカウント以上)
非会員校
2万円(1~9アカウント)
4万円(10~19アカウント)
6万円(20~29アカウント)

481,883名
全国の四年制大学の学生数の18.8%

579,276名、同22.9%

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

2011年度の主な活動

①総会およびパネルディスカッション
2011年度総会およびパネルディスカッション
日時: 2011年7月9日(土)14:00~17:00
場所: 立命館大学朱雀キャンパス1階多目的ホール
参加者数: 70名

②幹事会
2011年度第1回幹事会
日時: 2011年7月9日(土)13:00~14:00
場所: 立命館大学朱雀キャンパス地下1階会議室
参加大学:
関西大学・関西学院大学・中央大学・同志社大学・法政大学・立教大学・立命館大学・早稲田大学(計8大学)

③幹事校ミーティング
2011年6月10日、10月21日、2012年3月19日の合計3回開催

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

2011年度の主な活動

④会員校ミーティング
日時: 2011年12月1日(木)14:00~15:00
会場: 立命館大学東京キャンパス/衣笠キャンパス
参加大学:
青山学院大学・神奈川大学・関西大学・関西学院大学・北里大学・京都産業大学・慶應義塾大学・甲南大学・國學院大学・国士館大学・芝浦工業大学・創価大学・中央大学・帝京大学・東京農業大学・同志社大学・法政大学・明治大学・名城大学・立教大学・立命館大学・龍谷大学・早稲田大学(計23大学)

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

2011年度の主な活動

⑤関東圏懇談会
日時: 2011年6月15日(水)15:30~17:00
場所: 法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナード・タワー26階A会議室
参加大学:
青山学院大学・神奈川大学・北里大学・國學院大学・国士館大学・芝浦工業大学・創価大学・中央大学・帝京大学・法政大学・立命館大学・早稲田大学(計12大学)
参加者数: 30名
概要:
「関東圏の私立大学におけるFDに関する共通理解とは」というテーマのもと、フリーディスカッションを行った。参加大学の現状と課題を共有し、共通する課題(授業アンケート、教員評価)について、取り組み実態と具体的事例の情報共有と意見交換を行った。

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

2011年度の主な活動

⑥会員校懇談会

日時: 2011年12月1日(木) 15:15~17:30

会場: 立命館大学東京キャンパス/衣笠キャンパス

参加大学:

青山学院大学・神奈川大学・関西大学・関西学院大学・北里大学・京都産業大学・慶應義塾大学・甲南大学・國學院大学・国士館大学・芝浦工業大学・帝京大学・東京農業大学・同志社大学・法政大学・明治大学・名城大学・立命館大学・龍谷大学・早稲田大学 (計20大学)

参加者数: 26名

概要:

関東、関西各会場で以下のテーマ毎にグループ懇談を行った後、テレビ会議システムを利用した懇談のまとめを行った。
 ・関東テーマ: A)授業アンケート、B)初年次教育
 ・関西テーマ: A)授業アンケート、B)大学院FD、C)ピア・エデュケーション
 グループ懇談では、共通する課題の確認やその対応策について具体的な事例を交えて情報共有を行った。懇談のまとめでは、各グループの懇談内容を共有するなかで、いくつか重要な課題提起もあり、今後のフォーラムの活動へつながるものとなった。

7

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

分野	講座名	種類	対応レベル		
			1	2	3
研究 R	高等教育論	高等教育論Ⅰ	VOD		
		高等教育論Ⅱ	VOD		
		高等教育論Ⅲ	VOD		
		高等教育論Ⅳ	VOD		
		高等教育論Ⅴ	VOD		
	教授学習理論	教授学習理論Ⅰ	VOD		
		教授学習理論Ⅱ	VOD		
		教授学習理論Ⅲ	VOD		
		教授学習理論Ⅳ	VOD		
		教授学習理論Ⅴ	WS		
教育 E	教育方法論	教育方法論Ⅰ	VOD		
		教育方法論Ⅱ	VOD		
		教育方法論Ⅲ	VOD		
		教育方法論Ⅳ	VOD		
		教育方法論Ⅴ	VOD		
	授業設計論	授業設計論Ⅰ	VOD		
		授業設計論Ⅱ	VOD		
		授業設計論Ⅲ	VOD		
		授業設計論Ⅳ	VOD		
		授業設計論Ⅴ	WS		
管理運営 M	大学管理運営	大学管理運営Ⅰ	VOD		
		大学管理運営Ⅱ	VOD		
		大学管理運営Ⅲ	VOD		
		大学管理運営Ⅳ	VOD		
		大学管理運営Ⅴ	VOD		
	アカデミック・ペロップメント	アカデミック・ペロップメントⅠ	VOD		
		アカデミック・ペロップメントⅡ	VOD		
		アカデミック・ペロップメントⅢ	VOD		
		アカデミック・ペロップメントⅣ	VOD		
		アカデミック・ペロップメントⅤ	VOD		
オプション	立命館大学FD連携	立命館大学FD連携Ⅰ	VOD		
		立命館大学FD連携Ⅱ	VOD		
		立命館大学FD連携Ⅲ	VOD		
		立命館大学FD連携Ⅳ	VOD		
		立命館大学FD連携Ⅴ	VOD		
	立命館大学FD連携	立命館大学FD連携Ⅰ	VOD		
		立命館大学FD連携Ⅱ	VOD		
		立命館大学FD連携Ⅲ	VOD		
		立命館大学FD連携Ⅳ	VOD		
		立命館大学FD連携Ⅴ	VOD		

- ◆レベル1は、専任教員歴3年未満の新任教員
- ◆レベル2は、一般教員
- ◆レベル3は、管理職にある教員を想定。

開発した講座(2012/03現在)
 VOD:41本
 WS:13本

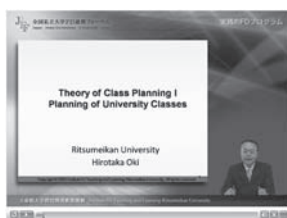
全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

VODの様子



授業設計論Ⅰ
 「大学の授業の設計」日本語版

Theory of Class Planning 1
 "Planning of University Classes"
 English Version



●実践的FDプログラムが保証する教授・学習支援能力

項目	教授・学習支援能力
1. 学習活動の設計	1-1. 教授と学習に関する一般理論を理解する。 1-2. 学生は自らの学ぶべきことを理解したコース設計ができる。 1-3. 学習者中心の授業の設計と計画ができる。 1-4. 学習者中心の授業に必要な目標設定とその適切な記述ができる。 1-5. 学習者中心の授業において適切な評価観点の設定と評価方法の選択ができる。 1-6. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の設計と計画ができる。
2. 教授および学習活動の展開	2-1. 高等教育において学習者中心の授業を実践するための教授・学習方略、方術を理解する。 2-2. 学習を支援する様々なテクノロジーの特徴、利用方法を理解し、授業に用いる。 2-3. 学習展開に応じて柔軟に授業を修正・転換できる。 2-4. 学生と協同して授業を進めることに意欲をもつ。 2-5. 専門分野における調査研究や実践のプロセス、成果を積極的に授業に取り込む。 2-6. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実施ができる。
3. 授業の質の保証	3-1. 教授・学習方略、方術に応じた教育効果の評価方法を理解する。 3-2. 客観的かつ厳格な成績評価ができる。 3-3. 教育効果の評価結果について学生に効果的なフィードバックができる。 3-4. 自らの授業や実践を省察し、改善することができる。 3-5. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の評価ができる。
4. 効果的な学習環境および学習支援環境の開発	4-1. 学習コミュニティの形成を促進する。 4-2. 様々なメディアやツールを活用し、効果的な学習環境の整備や学習支援ができる。 4-3. 学習支援のためのツールや環境の開発ができる。
5. 自己の専門性の継続的な発展	5-1. 学生の多様性を認め、尊重する。 5-2. 自らのキャリアの設計との継続的な開発に努める。 5-3. 大学教員集団の一員として働く。 5-4. 常に高等教育や教授法に関する新しい知識を取り入れることに努める。
6. 大学特有の必要とされる力	6-1. 立命館大学の教学について理解する。

教授・学習支援能力	教育	研究	社会貢献	管理運営
1. 学習活動の設計	授業設計論Ⅰ・Ⅱ(VOD) ●授業設計論Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ(WS)			
2. 教授および学習活動の展開	教授学習理論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(VOD) 教授学習理論Ⅳ・Ⅴ(WS) ●教育方法論Ⅰ・Ⅱ(VOD) 教育方法論Ⅲ・Ⅳ(VOD) ●心理学Ⅰ(VOD) 心理学Ⅱ・Ⅲ(VOD) 心理学ⅣⅠ(WS) 心理学ⅣⅡ・Ⅲ(WS) 教育評価論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(VOD)			●FD概論Ⅰ(VOD)
3. 授業の質の保証	教育評価論Ⅳ ●教育評価論Ⅴ(WS) 教育方法論Ⅳ(VOD) ●教育方法論Ⅴ(VOD) ●心理学Ⅳ(VOD)			
4. 効果的な学習環境および学習支援環境の開発			生涯学習Ⅰ(未VOD)	大学管理運営Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ(VOD) FD概論Ⅱ(VOD) プロジェクト・マネジメント(VOD)
5. 自己の専門性の継続的な発展	●高等教育論Ⅰ(VOD) 高等教育論Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ(VOD)	研究のアウトリーチ活動Ⅰ(VOD) 研究者倫理Ⅰ(VOD)		大学管理運営Ⅰ・Ⅱ(VOD)
6. 大学に特有の必要とされる能力	●立命館学Ⅰ(VOD) 立命館学Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(VOD)			

2012年度の新任教員対象実践的FDプログラム
 VOD: 必修8本+選択を併せて15本
 WS: 必修4本+選択を併せて10本
 (アンダーラインは推奨講座)

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

修了認定

●新任研修修了の認定

- ・2年間(最長4年間)に所定のVOD講義とワークショップをそれぞれ60%以上受講していること(レポート提出を含む)。
- ・ティーチング・ポートフォリオを作成し、TP作成支援者との協議がされていること。
- 受講者、教育コンサルタント、ティーチングポートフォリオ作成支援者が協議の上、総合的に判断し、修了証を発行。
- ・精勤賞(100%受講)、修了証(受講履歴がわかる証明書付き)を発行。

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

新任教員研修の様子



新任教員対象実践的FDプログラム

● 取組の成果

◆ 2008～2011年度 実践的FDプログラム利用者数
※オンデマンド講義は登録者数、ワークショップ・コンサルテーションは参加者の延べ数



	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
オンデマンド講義	—	328人	511人	985人 学科を含む
ワークショップ	133人	153人	235人	196名
教育コンサルテーション (ランチャイムFDを含む)	51人	61人	83人	56人

◆ 2009年度 新任教員修了者

修了者: 33名中13名(2011年に修了した者も含む)
修了率: 33.3%(必須教員のみを対象)
修了者の内訳: 教授1名、准教授6名、助教6名
100%修了者数: 5名

◆ 2010年度 新任教員修了者

修了者: 45名中13名
修了率: 28.9%
修了者の内訳: 教授3名、准教授4名、助教6名
100%修了者数: 4名

2011年オリエンテーションのランチャイムの様子

● 受講者の声 (2011年度修了者)

◆ コンサルテーション・ランチャイムFD

・他の先生方とお話できる機会はとても貴重でした。授業運営上の悩みの共有(とアドバイス)、他の先生方の工夫を教えてくださいることなどによって、自分の教育のあり方を振り返り、改善に向けた努力を始めるきっかけになりました。

◆ TP

・自分の授業について振り返り、来年度に生かそうと考えられ、頭の整理ができた。

◆ 全体

・毎月の課題は、限られた時間の中で興味あるテーマにも真正面から向き合う余裕が持てず、その分浅い学びしかできなかったのではないかとことが私自身の反省点です。

・教学や業務上で非常に忙しい時期は、VOD課題が毎月末に押し寄せてくるようで非常にプレッシャーになりました。でも終わってみればよい経験だったと思います。有難うございました。

・プログラム受講を通し、2年間の自分の教育を客観的に振り返り、よりよい大学教員を目指して努力するきっかけになりました。

・2年間、とても長く負担を感じていたが、終わってみると頭に残っていて、自分の授業に使える部分が多く勉強になったと感じている。

・教育経験のない私には、シラバスの書き方や、教育方法論、教育評価論、教授学習理論などは、日々の授業を組み立てる際に大変役に立ちました。また、大学管理運営論など、大学組織を有るうえで勉強になりました。TPの作成も努力はかりましたが、自分の教育の理念や到達点を整理するうえで、有効でした。

・同じ時に赴任された先生方と出会えたことが、一番のFDの魅力でした。特に、互いの授業の悩みや課題について意見交換をした夏のワークショップは、大変印象深いものでありました。

・担当の先生から丁寧なフィードバックをいただいたときには励みになりました。私自身も学生に対しきちんとフィードバックをしなくては改めて思う機会となりました。

・今後も継続してこうした機会に触れ続けていく必要があると感じます。講習会(ある程度、評価の定まった教育手法の一般向けの紹介など)という位置づけなら、テーマによっては、今後も継続的に参加したいと思っています。

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)

教育開発推進機構の支援

- I. 大学教育の基本的な進め方について、系統的な知識・技能をお伝えします(VOD、WS)。
- II. 授業や学生との接し方に関して、不安や問題をともに解決します(コンサルテーション)。
- III. 大学の壁を越えて、ともに語り合えるラーニング・コミュニティに参加できます(新任教員のネットワーク)。
- IV. 建学の精神と教学理念を踏まえ、「学習者中心の教育」を推進する本学のphilosophyを共有します(ポートフォリオ)。

全国私立大学FD連携フォーラム (Japan Private Universities FD Coalition Forum : JPFF)



お疲れ様でした。

沖 裕貴

oki@fc.ritsumei.ac.jp



大学コンソーシアム京都 の連携FD活動 現状と課題、評価について ～ポストGPおよび第4ステージに向けて～



FDネットワーク代読者会議
2012(平成)24年9月5日

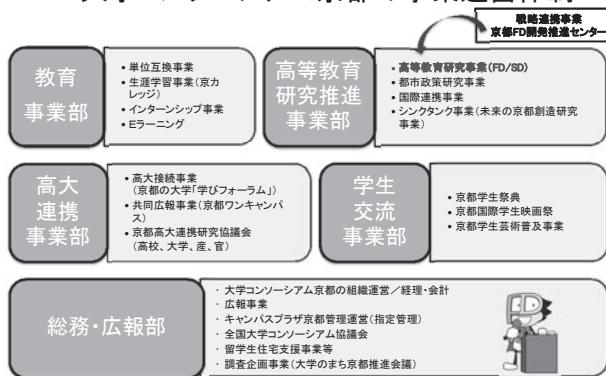
公益財団法人 大学コンソーシアム京都
事務局長 徳永寿老

目次

1. 大学コンソーシアム京都の事業運営体制
2. 戦略連携GPの事業評価結果
3. 2011年度のFD関係事業
4. 2012年度のFD関係事業
5. GP事業評価の残された課題
6. 大学間連携活動の評価について
7. ステージプラン策定プロセス
8. 各ステージにおけるGPの活用
9. ステージプラン:まとめ



1. 大学コンソーシアム京都の事業運営体制



2. 戦略連携GPの事業評価結果

連携校による内部評価および外部委員3名による外部評価を実施し、事業評価委員会において総括が行われた。

【高い評価】

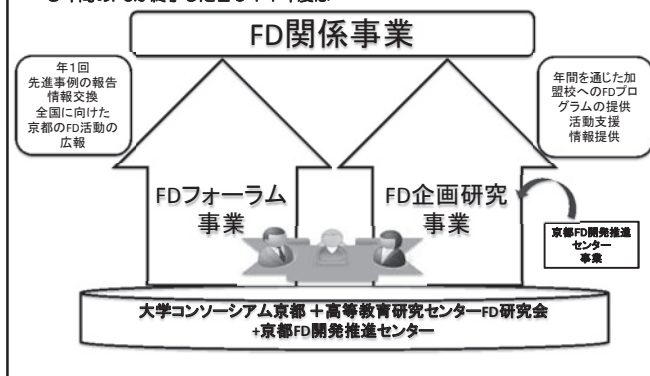
～規模も設置形態も異なる18大学・短大による連携にもかかわらず、3つのWGが機能し、体系的なFD研修プログラムの実施など、着実な成果が上がっている
～中小規模大学では実現が難しいFD専門部署について共通リソースという考え方の下、センター設置とスタッフの配置と言う形で実質的な取組の推進が実現している
～FDハンドブックやニュースレターの発行を通して、取組への直接の参加のない教職員への積極的なアプローチを行っている

【低い評価】

～プロジェクトの成果が実際に個々の大学内のFD活動にどの程度フィードバックされたかが明確ではない
～各取組間(WG間)の連携にまだ改善の余地があるのではないか
～センター運営の事務業務過多により専門員が本来のデベロッパーとしての業務に専心することが難しかったのではないか

3. 2011年度のFD関係事業

3年間のPJが終了した2011年度は…



3. 2011年度のFD関係事業 FDフォーラム事業

2011年度 第17回FDフォーラム

開催概要

【テーマ】大学におけるキャリア教育を考える

【日時】2012年3月2日(土)、3日(日)

【会場】京都産業大学

神山ホール(1日目)

5号館・11号館(2日目)

参加者数
1,109名



3. 2011年度のFD関係事業 FD企画研究事業

月	日	事業名
2011年 6月	18日(土)	京都FD執行部塾
9月	17日(土) 18日(日)	新任教員合同研修A
11月	14日(月)	京都FDe塾①【小規模】
12月	12日(月)	京都FDe塾②【小規模】
1月	21日(土) 22日(日)	京都FDe塾(FDセミナー) 【中規模】 京都FDe塾特別公開講座 【小規模】
2012年 3月	4日(日)	(*第17回FDフォーラム)
	10日(土) 11日(日)	新任教員合同研修B

4. 2012年度のFD関係事業 連携事業の評価結果をふまえて

連携校による内部評価および外部委員3名による外部評価を実施し、事業評価委員会において総括が行われた。

【高い評価】

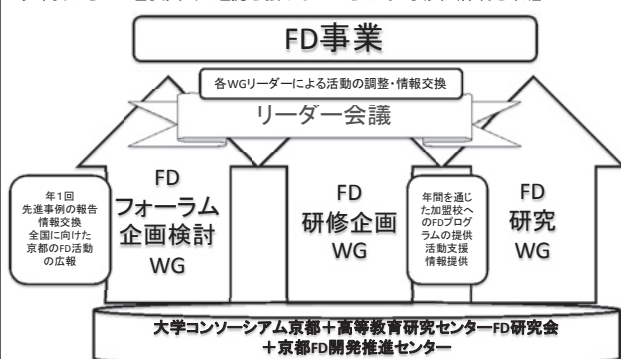
-規模も設置形態も異なる18大学・短大による連携にもかかわらず、3つのWGが機能し、体系的なFD研修プログラムの実施など、着実な成果が上がっている
-中小規模大学では実現が難しいFD専門部署について共通リソースという考え方の下、センター設置とスタッフの配置と言う形で実質的な取組の推進が実現している
-FDハンドブックやニュースレターの発行を通して、取組への直接の参加のない教職員への積極的なアプローチを行っている

【低い評価】

-プロジェクトの成果が実際に個々の大学内のFD活動にどの程度フィードバックされたかが明確ではない
-各取組間(WG間)の連携にまだ改善の余地があるのではないか
-センター運営の事務業務過多により専門員が本来のデベロッパーとしての業務に専心することが難しかったのではないかと

4. 2012年度のFD関係事業

今年度はさらに各委員会の連携を強めることを目的に委員会体制を改組



4. 2012年度のFD関係事業 FDフォーラム事業

2012年度 第18回FDフォーラム

開催概要(予定)

【テーマ】 未定

【日 時】 2013年2月23日(土)、24日(日)

【会 場】 立命館大学

以学館ホール(1日目)

敬学館(2日目)



4. 2012年度のFD関係事業 FD研修企画・研究事業

FD研修企画WG

月	事業名
2011年 6月	京都FD執行部塾
9月	新任教員合同研修A
11月	京都FDe塾①【小規模】
12月	京都FDe塾②【小規模】
1月	京都FDe塾(FDセミナー) 【中規模】
2012年 3月	(*第18回FDフォーラム) 新任教員合同研修B

FD研究WG

検討事項
・まんがFDハンドブック第3弾のテーマ、目次案、構成内容の検討
・FD/SD情報ポータル開発へのアドバイジング
・FD関連の問い合わせに対するコンサルティング対応



5. GP事業評価の残された課題①

連携校による内部評価および外部委員3名による外部評価を実施し、事業評価委員会において総括が行われた。

【高い評価】

-規模も設置形態も異なる18大学・短大による連携にもかかわらず、3つのWGが機能し、体系的なFD研修プログラムの実施など、着実な成果が上がっている
-中小規模大学では実現が難しいFD専門部署について共通リソースという考え方の下、センター設置とスタッフの配置と言う形で実質的な取組の推進が実現している
-FDハンドブックやニュースレターの発行を通して、取組への直接の参加のない教職員への積極的なアプローチを行っている

【低い評価】

-プロジェクトの成果が実際に個々の大学内のFD活動にどの程度フィードバックされたかが明確ではない
-各取組間(WG間)の連携にまだ改善の余地があるのではないか
-センター運営の事務業務過多により専門員が本来のデベロッパーとしての業務に専心することが難しかったのではないかと

5. GP事業評価の残された課題②

プロジェクトの成果が実際に個々の大学内のFD活動にどの程度フィードバックされたかが明確ではない

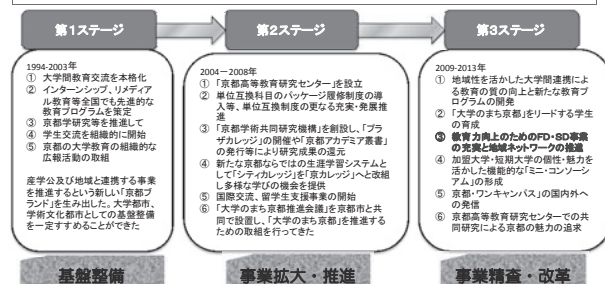
- ・年間の活動計画に対する実績の評価方法・効果測定指標の確立と実施
- ・多様な加盟校のニーズを如何に拾い、どのような取捨選択をして事業の中に組み入れて行くのか



6. 大学間連携活動の評価について

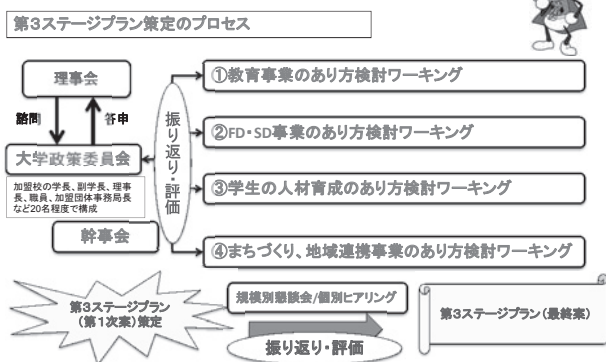
ステージプラン:

理事会のもとに設置される大学政策委員会によって、5年ごとに策定される中期計画。出向職員および有期雇用職員によって運営される当財団においては、活動の継続性を担保する指針であり、ミッションの共有の観点からも非常に重要な役割を果たしている。



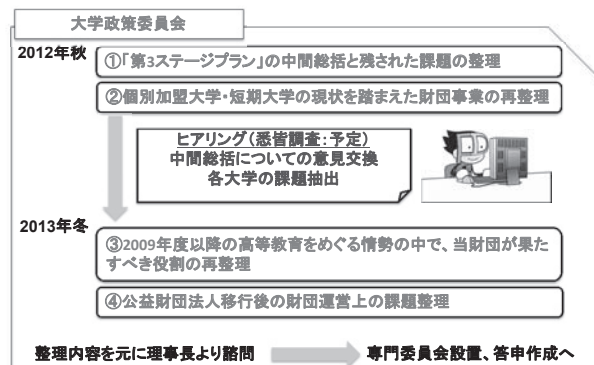
7. ステージプラン策定プロセス①

～第3ステージプランの場合～



7. ステージプラン策定プロセス②

～第4ステージプランに向けて～



8. 各ステージにおけるGPの活用



9. ステージプラン:まとめ

- ・次期ステージプラン策定時のヒアリング/アンケート調査により各加盟校から5年間の活動の具体的な評価を得るようにしている
- ・加盟校の設置形態・規模・分野により期待される活動が違うため、ヒアリングやアンケート結果の分析の際に一定の配慮が必要である



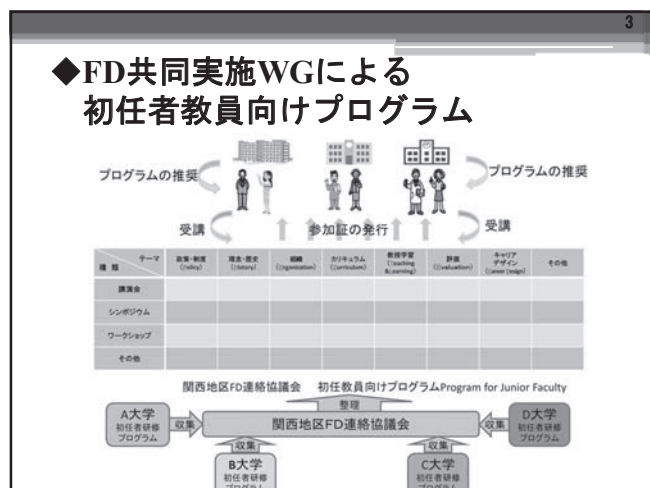
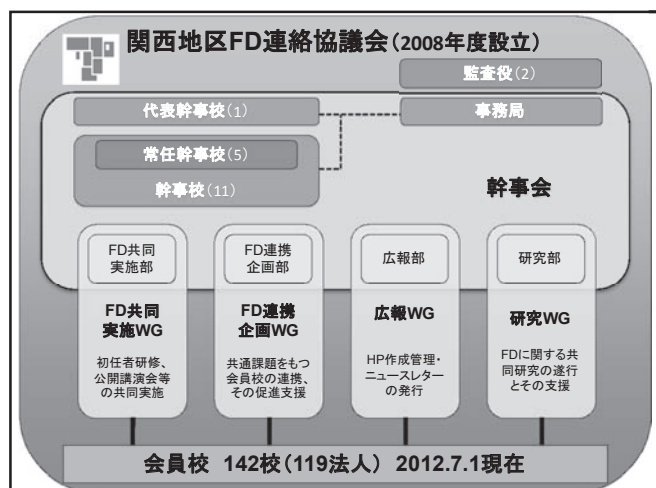
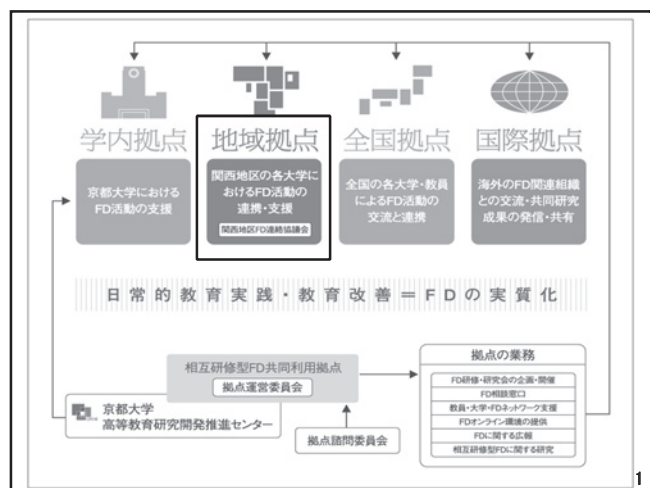
ご清聴ありがとうございました。



JFDN2012
2012.9.5@芝蘭会館別館

FDネットワークとしての 関西地区FD連絡協議会の5年

京都大学高等教育研究開発推進センター
大塚雄作



◆FD連携企画WGによる 『思考し表現する学生を育てる』シリーズ

- 2008年11月29日(土)14:00~17:00 『思考し表現する学生を育てる ―書くことをどう指導し、評価するか?―』立命館大学衣笠キャンパス
- 2009年12月12日(土)13:30~18:00 『思考し表現する学生を育てる ―書くことをどう指導し、評価するか? II―』関西大学 千里山キャンパス 第2学舎
- 2011年1月8日(土)13:00~18:00 『思考し表現する学生を育てる ―書くことをどう指導し、評価するか? III―』京都大学吉田南1号館
- 2011年12月17日(土)13:00~18:00 『思考し表現する学生を育てるIV ―ライティング指導の方法―』立命館大学以学館

◆FD連携企画WGによる関西FDパイロット校

関西FDパイロット校: 関西FD会員校の多くに共通する教育改善に関わる問題の解決の方途をパイロット・ケースとして探っていくという大学(短大)・学部・学科のこと。会員校間の連携・協働による支援を受けることができ、その成果は会員校間で共有する。現在の「関西FDパイロット校」と本WGが支援するFD活動は以下の通り。(平成24年1月現在)

パイロット校	支援するFD活動
神戸常盤大学・ 神戸常盤大学短期大学部	FDの学科間連携
藍野大学 医療保健学部理学療法学科	学生の学習成果の評価(OSCE)にもとづく授業改善や科目間連携
京都ノートルダム女子大学	授業・授業外の学習、インターンシップなどの活動が学生の成長に及ぼす影響についてのアセスメント
大阪府立大学	IR(Institutional Research)にもとづく授業・カリキュラム改善、学士の質保証

◆広報WGによる
ニュースレター

<http://www.kansai-fd.org/publications/newsletter/8.html>

[illegible]

◆研究WG…二つのサブグループ

➤FDメディア研究SG

ケータイを利用した授業アンケート・出欠確認
LMSの活用 *etc.*

(ケータイを利用した出欠確認の見学会 →)

➤FDデザイン研究SG

各大学のFD取組事例の共有

(公開研究会 →)

FDに関する各種調査 *etc.*

◆FDに関する2つの調査

➤「FDに関する実態およびニーズ調査(2007)」

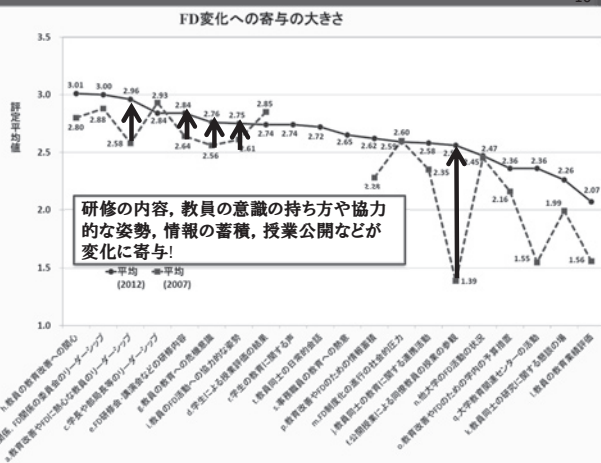
関西FD設立に向けて2007年6～7月に実施
対象：関西地区の大学・短大等

➤「FDに関する実態調査(2012)」

2012年2～3月に実施

対象：関西地区の大学・短大等

郵送、Web (REAS)、e-mail返信を利用
5月7日現在回収の348件を分析対象



◆FD活動報告会

・・・FD相互評価の機会として

➤ 関西FD総会時にポスターセッション

作成にMOSTを活用

➤ポスター発表に対してポストイットでコメントを付す

➤ 冊子・HPで公表

(http://www.kansai-fd.org/activities/meeting/20120519_peer-review.html)



◆関西FDとFD評価の課題

- 関西FDの活動をどう実質化するか
 - ・各大学のFD活動の共有化
 - ・各WG活動の活性化
 - ・FD活動報告会の定着 *etc.*
- FDの評価手法の可能性
 - ・FD活動報告会の相互評価機能は？
 - ・FD実態調査結果の評価情報としての意義は？
- 拠点の必要性とそのアピール
 - ・常に問われる教育改革の「形骸化」
→ 拠点の必要性
 - ・FDネットワークの活動の発信のあり方は？

FDネットワーク代表者会議（JFDN）2012（於:京都大学）

山陰地区FD連絡協議会 2012 報告

—成果を位置づける—

島根大学 松田 岳士
(教育開発センター)
(山陰地区FD連絡協議会)

> 報告内容
 ✓ 協議会活動報告：現状と課題
 ✓ 活動成果の評価：教学IRとの連携
 ✓ より広い大学間連携における位置づけ

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

山陰地区FD連絡協議会

■山陰地域における教育の質保証および質向上を図ることを目的とするものであり、その目的の実現に向けて地域における重要な人材養成機能を担う高等教育機関が「情報の交換・共有や合同事業、人材交流などの協働事業を推進していく核となる」

□平成21～25年度文部科学省特別教育研究
 □加盟校
 島根大学
 島根県立大学
 (3キャンパス)
 鳥取環境大学
 鳥取短期大学
 米子工業高等専門学校

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

山陰FD連絡協：2011～12年度の活動

■マクロからミドル・ミクロへの広がり
→ニーズに対応した活動のバラエティ

> 教育改革質保証シンポジウム
 > 本センター教員による加盟大学における講演

+

> 授業デザインワークショップ（愛媛大学SPOD協力）：5月
 > 個別授業コンサルティング
 > 初年次教育コンテンツ共有（moodle）
 > 職員による合同SDシンポジウム：Facebookコミュニティ
 > 大学間図書館連携
 > 学生ピアサポーターによる連携

9月実施（次スライド）

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

今後の予定と課題

■活動予定

> 大学図書館学生協働交流シンポジウム（9月10日）
 > 大学教育学会課題研究集会（11月23・24日）
 > IIR・質保証シンポジウム（12月）
 > 合同FD研修会（新任研修＋個別テーマ）
 > 大学教育合同フォーラム in 島根 2013（分科会形式予定）

■課題

> 経費支援期間の終了が近づく→成果の「見える化」
 > 大学間連携の深化→FDの新たな位置づけ

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

FDの成果を評価する

FD担当センター主導

> 教育が変わる
 → 学びが変わる
 レベルまで検証

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

成果評価に必要なデータ：教学IR

■FDの成果を総合的、多面的に捉えるには

> すでに学生に対する各種アンケートや教員への聞き取りは実施→主観的・定性的な評価データ
 > 成績・出席率・就職率・資格取得率など客観的・定量的データも併せて分析、探索的分析も可能に→島根大ではすでに個々の事例では対応

■教学IRシステム構築を検討（複数大学間で共有）

■教学IRシステム構築による対応→大学が管理する諸情報の集約・分析・その結果の可視化によって教育質保証を支援するシステムであり、学内に存在するデータを用いて、教育の改善に関する意思決定の根拠を提供することを目的とする

Center for Educational Research and Development (CERD), Shimane University

包括的な大学間連携とFD

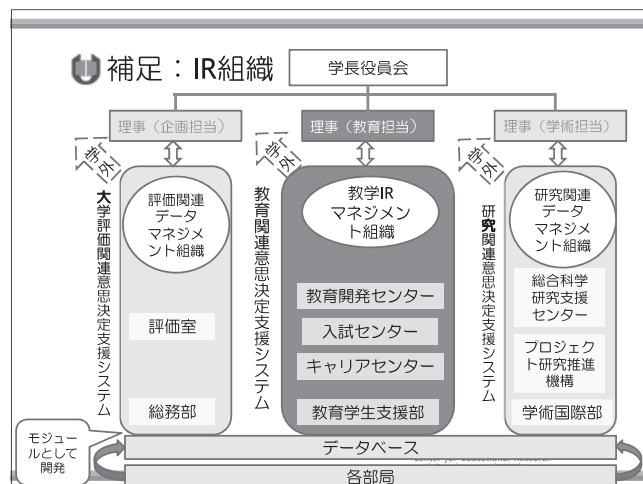
■ 戦略的な大学間連携の必要性

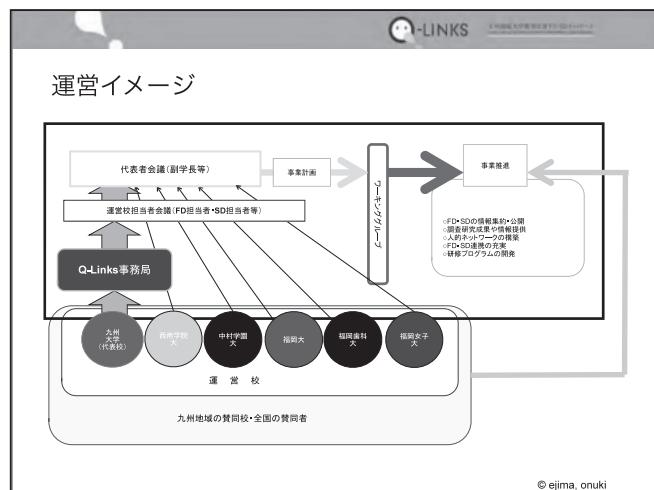
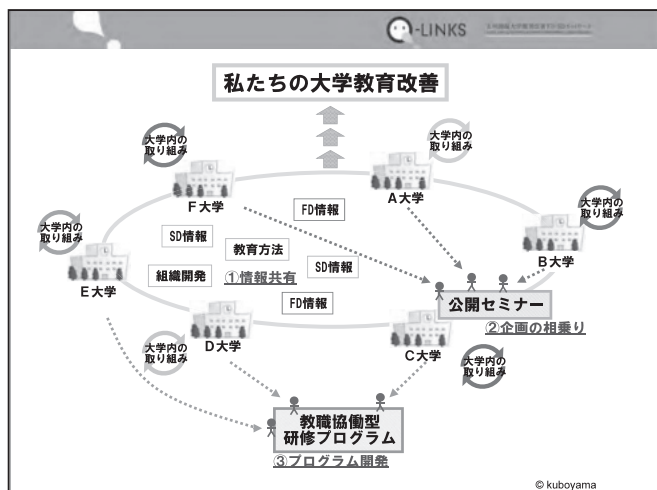
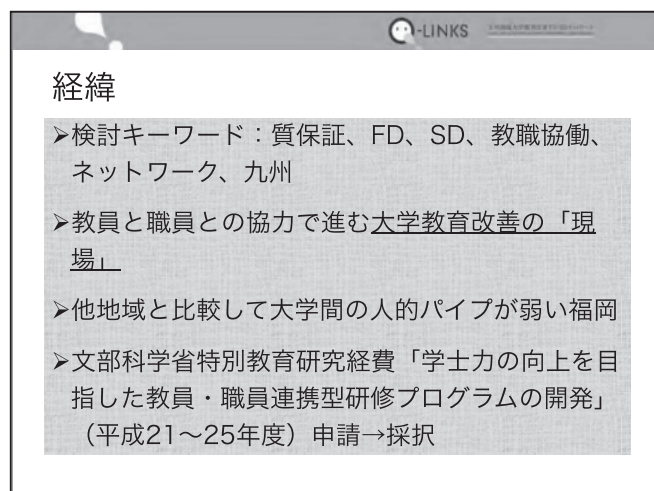
- 文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」への応募
- 山陰地区FD連絡協議会を共通基盤とした連携
- 地域ステークホルダーの意見を取り入れながら、共同の組織的FD/SD展開
- 複数大学にわたる質保証におけるFD/SDの役割見直し

■ まとめ

- ニーズに応じたミドル/マイクロレベルのFDを展開
- 教学IRの構築に伴うFD成果の見える化
- 広い大学間連携の枠組みへの位置づけ

Center for Educational Research
and Development (CERD),
Shimane University





目的

九州地域大学教育改善FD・SDネットワーク：
Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education (Q-Links) は、
 FD・SDの大学間連携による人的ネットワークの構築や情報共有を通じて、各高等教育機関における学習・教育の改善が推進されることを支援し、教育活動の向上と発展に寄与します。

主な取組

- ▶ ネットワークに参加している各機関のFD・SD情報を集約・公開
- ▶ 入学前から学士課程・大学院課程までの学習・教育に関し、他国、他大学の状況、関係官庁、関係業界の動向などについて情報収集し、機関へ提供
- ▶ 各機関同士のネットワークを活用した人的ネットワークの構築、特にFD・SDの連携の充実と強化
- ▶ 学習・教育改善に資する教職協働型（教育活動の質的向上という目標のもとで教員と職員が協力する）研修プログラムを開発・実施

31大学、5短大、65賛同者 (2012.08現在)

2009.10発足	九州大、西南学院大、中村学園大・短期大学部、福岡大、福岡歯科大、福岡女子大
2009.12加入	福岡工業大、西日本工業大、第一薬科大、保健医療経営大、福岡国際大、筑紫女学園大・短期大学部、九州共立大、国際医療福祉大、九州国際大、日本文理大[大分]
2010.01加入	九州産業大、福岡医療短期大、福岡教育大、長崎国際大[長崎]、宮崎公立大[宮崎]、琉球大[沖縄]
2010.05加入	沖縄国際大[沖縄]、崇城大[熊本]
2010.10加入	鹿児島大[鹿児島]
2010.12加入	名桜大[沖縄]、佐賀大学[佐賀]
2011.03.04加入	九州女子大学・九州女子短期大学
2011.07.13加入	香蘭女子短期大学
2011.09.27加入	純真学園大学
2012.07.10加入	長崎県立大学 [長崎]

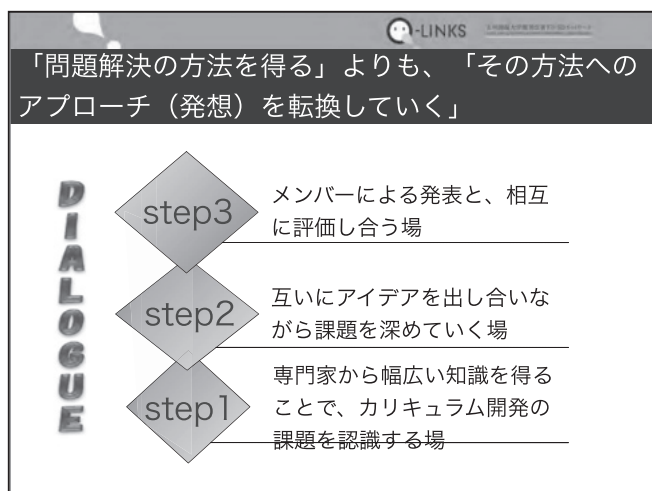
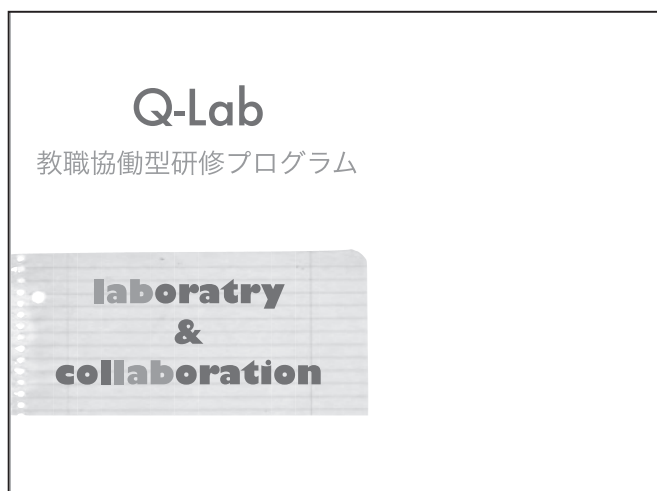
2. 活動実績

Q-caravan (全賛同校の訪問)



Q-place (メンバーシップ勉強会)





教員と職員が一緒のチームになって

「Lab(ラボ)」は、「Laboratory(ラボラトリー: 実験室、工房)」を意味しています。教育改善の課題について、Q-Linksメンバーシップの協働を通じ、新たな手法やアイデアが創出・試行されるような場をつくらう、といったところでしょうか。「Lab」には、個人の能力開発とともに、「collaboration(コラボレーション: 協働)」の意味も含まれていて、教職協働による組織力を高めていくことへの期待が込められています。

「FDとSD」から

“Educational Development”へ



参加者からの感想①

何よりの成果は、同じ志を持った仲間を今回のCDプロジェクトでも得ることができたことでした。(中略) 虹ノ松原の波の音を聞きながら、仲間と熱く語り合ったことは、仕事に臨むにおいてかけがえのない財産になることと思います。

(第2回CDプロジェクト参加 国大・職員・男性)

参加者からの感想②

経験も少なく、カリキュラムマネジメントのイメージが広がらない私にとっては、経験を掘り起こすにも一苦労でした。が、ほかのメンバーのエピソードを聞くうちに、「確かにそれもカリキュラムマネジメントだよな」と、イメージが広がってきました。(中略) いつも温かい雰囲気の中で聞き考えを創出して下さった参加メンバーの皆様、本当にありがとうございました。

(第3回CDプロジェクト参加 私大・教員・女性)

参加者からの感想③





チームで課題を考えることにより、立場により「対立と葛藤」が違うことに気づけたことは大きな事でした作成は難しかったですが、他のチームの方々からご意見をいただけたことで、教材作成においての気づきもありました。毎日の業務や生活の中で、深く考えずに向き合っていた「対立と葛藤」についてですが、今回のプロジェクトに参加したことで、少しは考え立ち向かえる勇気が出たのではないかと考えています。

(第2回ODプロジェクト参加 私大・職員・女性)


3. 今後の活動予定

2012年度下半期～2013年度

- [10/16 Q-place 「FD,SDプログラムのずれを活かそう！」]
- [11/02-03,12/7 第5回CDプロジェクト]
- [12/1 Eニュースレター創刊 (予定)]
- [2/23 Q-conference2012 (会場：九州産業大学)]
- [2013年度 Q-Lab新プロジェクト実施?]
- [// Q-Links成果報告発信、総括]


4. 課題（評価の観点を軸に）



Q-Linksインパクトをどう測定するか？

＜量的評価＞	＜質的評価＞
<ul style="list-style-type: none"> ・ イベント開催数 ・ 参加人数 <ul style="list-style-type: none"> －メンバー,ML,全イベントの参加数他 ・ 各イベントアンケート調査...等 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各機関の大学教育改善エピソード ・ 教職協働、FD・SDへの波及効果 ・ 人的繋がりによる把握→可視化？

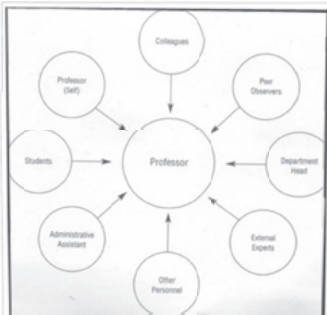
26



Q-Linksインパクトをどう測定するか？

360° Multisource Assessment of a professor

(Berk, Ronald A., 'Thirteen Strategies to Measure College Teaching', Stylus, 2006.)



27



ありがとうございました。

Q-Links でお待ち申し上げております。



IV-5. 若手 FD 研究者ネットワーク(JFDN Jr.)

ーこれまでの活動と今後の展開についてー

1. 若手 FD 研究者ネットワーク（JFDN Jr.）設立の経緯と目的

2008 年度に「FD 推進のための情報交換、実践研究、および情報発信をおこなうことを目的として、FD に関わる若手研究者を組織化し、問題点や成功事例を共有する」ことを目指して設立された若手 FD 研究者ネットワーク(Japan Faculty Development Network for Junior Researchers : JFDN Jr.) は 5 年目を迎えた。本稿では、JFDN Jr.設立の経緯と目的、これまでの活動記録を振り返った上で、今後の活動の展望について述べる。

JFDN Jr.設立の経緯であるが、2008 年 3 月に京都大学で開催された「第 14 回大学教育研究フォーラム」においてラウンドテーブル「高等教育センター若手教員の奮闘」を企画・実施したことがきっかけである。このラウンドテーブルの目的は、大学教育センター（以下、大教センター）で勤務する若手教員の業務を紹介して問題や悩みを共有することであり、その上で、今後の大教センター若手教員のあり方を考えることであった。内容として 4 名の話題提供、参加者によるグループワーク、京都大学高等教育研究開発推進センター長の田中毎実教授（当時）による指定討論を行った。グループワークの結果報告のあと、まとめの言葉として田中先生は「今は過渡期だから、10 年我慢して頑張れ」というコメントをされた。このコメントは、ある意味、若手 FD 研究者ネットワークの出発点となったとも言える。

大教センターに勤務する若手教員が抱える悩みはさまざまであるが、大きく 3 点があげられる。1 点目として、自分の専門分野とは異なる分野の業務に関わることである。FD や大学教育を専門とした研究自体が近年増加したもので、その分野を専門にしている研究者は数少ない。大教センターにポストができたことで就職し、熱心に業務に取り組んでいるものの、研究者としてのアイデンティティについて悩むことが多い、ということである。

2 点目として、これまで大学でほとんど教育活動の経験がない立場でありながら、大教センターの教員として FD や大学教育改善について中心となって活動し、大学教員に対して研修を行う立場になる、ということである。教育経験の豊富な教員に対して行う FD 業務は、若手教員にとって大きな難しさを伴うものとなる。他の教員から FD 業務に対して批判を受けることもあれば、逆に「大教センター教員だから（大学教育や FD が）専門なんですよ」と頼られるケースもあり、葛藤することも多い。

3 点目として、学内の情報や大学教育関係の情報が手に入りにくく、孤立しがちである、ということである。大きな原因として、大教センターが一般的に小さい組織であること、教員が大学を移って就職して勤務している場合、その大学の情報をどのように収集すればいいのか、ノウハウがない、ということが考えられる。またさまざまな分野の研究者が大教センター教員になっているため、他大学の大教センター教員との知り合いが少ない場合が多い、といったことが考えられる。

このような背景の中、2008 年 4 月に田中先生から、若手教員の支援をしたい、という申し出をいただき、若手 FD 研究者ネットワーク（Japan Faculty Development Network for Junior Researchers: 通称 JFDN Jr.）を設立した。2013 年 1 月現在で、参加人数は 98 名（71 大学）であ

る。大教センターの教員に限らず、FD 委員会や FD 業務に関わっている国公立、私立大学の教員、FD に関する業務を行っている大学職員、FD に関心を持っている大学生・大学院生も参加している。

JFDN Jr.の活動の目的は、大きく 3 つある。1 点目は、大教センターや FD 業務に関わる若手教員のネットワークづくり・相互支援を行うことである。同じような業務を行っている教員同士がつながることのできるようなコミュニティを構築し、そのコミュニティ上で情報共有を行うことで、相互に支えあうことを目指している。2 点目は、FD 実践や大学教育改善に関する研究の推進・実行である。FD に関する研究はまだほとんどないのが現状であり、このネットワークにおいて FD 研究についての議論を行うとともに、共同研究の企画、実施を進め、よりよい FD 実践に向けた知見の提供を行っていく。3 点目は、若手研究者による積極的な社会活動に対する支援である。FD に関わっている若手研究者は、大学や大学組織の現状に関する課題に対してさまざまな意見をもつことも多い。ただ、任期付きでの雇用も多く、立場などさまざまな問題から、大学内でなかなか意見を言うことができないという問題を抱えている。そこで、このネットワークとして大学全体の現状、大学組織について意見を表明していく、という役割も担うことも目指している。

2. これまでの活動の記録

2-1. 2008 年度

2008 年度は、JFDN Jr.立ち上げに向けたコアメンバーによるミーティングや、運営委員の委嘱、メーリングリストの運用開始、第 1 回合宿にあたる、運営委員会の第 1 回会合などを実施した。以下がその詳細である。

- ・ JFDN Jr.立ち上げに向けた事前会合（2008 年 5 月）
- ・ 第一期若手 FD 研究者ネットワーク運営委員の委嘱（19 名）
- ・ 運営委員会 第 1 回会合（2008 年 7 月 19 日・20 日）大阪にて
 - 19 日：グループ討論 テーマ「研究者としての専門性と組織における役割」
情報交換 テーマ「FD とうまく関わるためには？」
 - 20 日：グループ討論 テーマ「予算と時間があったらこんなことがしたい！」
- 参加者 23 名
- ・ メーリングリスト開設（2008 年 7 月）
- ・ JFDN Jr.運営委員実態調査 Web アンケートの実施（2008 年 9 月～10 月）
- ・ 第 15 回大学教育研究フォーラム・ラウンドテーブル（2009 年 3 月）
「FD に関わる若手教員の現在と未来 ―高等教育センター若手教員の奮闘 2―」

次年度に向けた予備調査的な意味合いも含め、運営委員に対してアンケートを実施した。また、JFDN Jr.設立に関して、大学教育研究フォーラムのラウンドテーブルにて発表を行った。もともと、昨年度のフォーラム・ラウンドテーブルが JFDN Jr.設立の契機となっているため、第 14 回からの継続テーマとなる。4 名の話題提供のあと、グループ議論を行い、結果を共有した。

2-2. 2009 年度

2009 年度は、前年度の活動を踏まえ、第 2 回合宿研究会を開催するとともに、全国の若手 FD 担当者ならびに、FD センター等の代表者に対するアンケート調査を実施した。

- ・第 2 回合宿研究会（2009 年 7 月 18 日・19 日） 京都外国語大学にて
テーマ「教育改善につながる新しい研究を考えよう」
参加者 20 名
- ・全国 FD 担当者アンケート調査（2009 年 11 月～12 月）

2-3. 2010 年度

2010 年度は、前年度調査の結果を日本高等教育学会、日本教育工学会で発表するとともに、第 3 回合宿研究会を開催した。初日に、関連する公開シンポジウムを全員で聴講し、次の日に議論をするという形式をとった。

- ・第 3 回合宿研究会（2010 年 9 月 7 日・8 日） 京都大学にて
7 日：JFDN 公開シンポジウム
「FD ネットワークの展開と大学教育改革の方向性を問う」に参加
8 日：ワークショップ テーマ「所属組織・担当業務の現状と課題」
〃 テーマ「公開シンポジウムの振り返り」
〃 テーマ「FD と関わる：展望と課題」
〃 テーマ「学問領域別教育の質保証について考える」
参加者 22 名
- ・学会発表
(2009 年度アンケート調査の結果を日本高等教育学会、日本教育工学会で発表)
- ・メールマガジンの発行
2010 年度より、情報共有を目的としたメールマガジンの発行を開始した。2010 年度は 10 回発行しており、内容は、各大学の FD の取り組みを紹介した「日本縦断 FD の旅」、FD・SD に関する疑問や困っていること、もっと知りたいことを質問として、その質問についての意見やアイデアを募集し、まとめた「FD あるある Q&A」、大学教育関係の学会や研究会などの内容を紹介する「参加報告」などであり、連載の形で掲載した。

2-4. 2011 年度

2011 年度は、第 4 回合宿研究会の開催、メールマガジンの発行を継続するとともに、新たにホームページを開設した。

- ・第 4 回合宿研究会（2011 年 9 月 5 日・6 日） 京都外国語大学にて
テーマ「FD・SD をよりよいものに」
参加者 13 名
- ・メールマガジンの発行
2011 年度のメールマガジンは、6 回発行された。東日本大震災のあと、実際に展開していることなどをまとめた「震災徒然草」、大学教育関係の学会や研究会などの内容を紹介する「参加報告」、FD 委員長としての活動を記録した「FD 委員長 奮闘？日記」などを掲載した。
- ・Web サイトの開設
JFDN Jr. の設立の目的や経緯、メールマガジンのバックナンバーなどを広く公開するために Web サイトを構築した。Web 経由でメーリングリストへの登録申込も可能となって

いる。アドレスは <http://jfdn-jr.net/wp/>（図 1）である。



図 1 若手 FD 研究者ネットワークの Web サイト (<http://jfdn-jr.net/wp/>)

・科学研究費助成事業（基盤研究 C）の取得

2011 年度には、科学研究費助成事業（基盤研究 C）を取得した。（「若手 FD 担当者が抱く問題意識とキャリア展望」、研究代表者：大塚雄作、研究分担者：村上正行・杉原真晃・半澤礼之）。なお、科学研究費助成事業への応募は、2009 年度当初より毎年行ってきたが、2011 年度に初めて採択された。

2-5. 2012 年度

2009 年度に実施した全国調査の結果をまとめた論文（田口真奈・半澤礼之・杉原真晃・村上正行「若手 FD 担当者の業務に対する「やりがい」と「不安」—他部局との連携とキャリア展望の観点から—」）が、日本教育工学会論文誌 36 巻 3 号（2012）に掲載された。

また、2013 年 2 月に第 5 回の研究会を実施する予定である。

3. 今後の活動の展開

若手 FD 研究者ネットワークの諸活動は、この 5 年間で一定の成果を上げてきたと考える。我々は、本ネットワークにかかる若手の FD 担当者（大学教育開発・改善や e-learning の開発・整備等に関わる者）の関わり方について、大きく分けて 3 つの層を想定していた。3 つの層とは、次のようなものである。

- (1) FD 業務（大学教育開発・改善や e-learning の開発・整備等）にかかる研究や提言を展開していく
- (2) FD 業務にかかる諸情報を発信し、FD 担当者同士の交流を深め、支援し合う

(3) 研究成果やネットワーク内で行き交う諸情報を参照し、自身の業務に活用する

このような3つの層において、ネットワーク参加者が、それぞれ居場所があり、有用性がある「緩やかなネットワーク」を作ってきた（本ネットワークの概要やこれまでの活動内容については、前節までをご参照いただきたい）。

その中でも、この5年間で重視してきた内容は、主に「2」にかかるものであった。それはFDが義務化され、全国で大学教育センターが設立され、そこに若手教員（それも大学教育が決して学生時代の専攻ではなかった教員）が配置される中、FD業務の多様性・曖昧性や学内外の政治からの影響の受けやすさに直面し、多忙な業務に埋没し疲弊し、暗中模索で孤立無援化するFD担当者の現状への喫緊の課題であったと判断したためである。そこでは、「同じような苦労や不安を自分だけでなく他人も抱えていることを知り、気が楽になった」という声が聞かれている。そして、「どう実践したらいいかわからなかったところに、さまざまな実践事例を知ることができ参考になった」「他人の業務内容を知ることによって自らの業務の問題点や克服方法を見出せた」といった声も聞かれた。

もちろん、「1」および「3」にかかる活動も少しずつではあるが進めてきたが、限られたマンパワーにおいて、二兎三兎を追うことにより疲弊するよりも、持続性・実質性に重きを置いてきたというのが実情である。

そのような中、現在、そして今後、本ネットワークは「1」および「3」にかかる活動・支援にも重点を置き、活動を展開していく状況である。

現在、共同研究として「若手FD担当者が抱く問題意識とキャリア展望」（科学研究費助成事業（基盤研究（C）：平成23年度～平成25年度）を進めている（前節参照）。この研究で明らかにしたいことは多々あるが、中でも、「FD担当業務」の実態を明らかにし、いわゆる「伝統的な教職員」に認知してもらうこと、そして、それにより「組織」のあり方を問う契機を作り出すことを重視している。これまでの伝統的な教員の置かれた状況や業務内容とは異なる「FD担当者」が、業務遂行にかかり高い「能力」が求められ、その「能力」を育成しようとする動向が盛んになりつつある。それは、グローバル化する社会の中で市場的価値における強く自律した「個人」が求められ、失敗や成果があがらない要因が個人に重く押し掛かってくる状況（「個人化」（Beck, U.（東廉、伊藤美登里訳）『危険社会』法政大学出版局、1998年.））や、教育によりそのような強い「個人」を作り出すための「能力」開発が進められる状況（「教育の福音」（Lauder, H., Brown, P., Dillabough, J. A., Halsey, A. H.（広田照幸、吉田文、本田由紀翻訳）『グローバル化・社会変動と教育 1—市場と労働の教育社会学—』東京大学出版会、2012年.））に通ずると言ってもよいかもしれない。

そのような中、我々は、一方でFD担当者にかかる現状の動向の必要性や意義を認めなければならないが、もう一方で、そこから距離をとり、それを批判的に検討することも実践していかなければならない。その際に見逃してはならない観点が、「組織」であり、「組織」を形成している「構成員」（多くは伝統的な教職員）であると考えている。

以上のような、3層を想定した活動を通して得られた知見を本ネットワーク内で（そして、ネットワーク以外にも）提供したいと考えている。

そして、今後の展開としては、次のようなものを予定している。

(1) Webサイトの運営

2010年から本ネットワークにかかるWebサイトを運営してきた（<http://jfdn-jr.net/wp/>）。本ネ

ットワークの活動、研究成果、FD 業務にかかる諸情報等、ネットワーク参加者方々にとって有益な情報を今後も継続して提供していく。

(2) メーリングリストの運営

2. で述べたように、2009 年から FD をはじめとした大学教育に関する諸情報や、各種コーナー（「FD あるある」「震災徒然草」など）における投稿記事を掲載したメールマガジンを定期的に提供してきた。今後も継続して行っていく。

(3) 合宿研究会の実施

2008 年から毎年 1 泊 2 日での合宿研究会を開催してきた。今後は、FD 担当者だけでなく、大学教育開発を研究対象とする大学院生をも対象にして、研究支援活動を行っていく。そして、我々の科研（上記参照）にかかる研究会という形での実施も予定している。これらは、具体的には、たとえば、科研の研究成果の検討、各自の研究の相互検討、文献購読、新たな調査検討等が含まれる。

(4) 交流、情報交換の充実

これまでも、大学教育にかかる学会・研究会（たとえば、「大学教育研究フォーラム」）の折に、本ネットワーク参加者に呼びかけ、オフ会を開催してきた。今後も、対面での交流を大切にするために、継続して開催していく予定である。

(5) 調査、研究

これまで、そして、現在、進めている研究に続き、今後、必要な研究をあげ、優先順位をつけて展開していく。可能であれば、定期的に遠隔研究会を開催し、各自の研究の相互検討、文献購読、新たな調査の検討等を行い、調査・研究を継続的に実施していく。

(6) 知見の発信・共有化

上記で得られた知見をより広く還元するために、報告書、ウェブサイト、書籍等で発信していく。書籍に関しては、研究にて得られた学術的な要素を入れ込んだものだけでなく、FD 業務に関する Q&A、ケーススタディのコンテンツを充実させたものを製作したいと考えている。

以上のような展望を持ちながら、今後もみなさんにとってより良いネットワークを作っていきたいと考えている。

（村上 正行、杉原 真晃、田口 真奈、半澤 礼之）